

刀使ノ巫女 刻みし一閃のバエルの燈火

とあるBael厨毒者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、燕結芽に兄がいたら……

しかも、その兄がマツキーの愛称で呼ばれている例あの人だったら……。

そんなお話です。第一話の文字数4万字強!!

※刀使ノ巫女見てないと多分、話が分からないと思います。

※世界観は刀使ノ巫女にオルフェンズの要素を少し加えただけと
なっております。あと团长勢は登場しません。

※基本、一人称の短編です。

目次

燕結芽回想編	1
私のおにいちゃん	
衛藤可奈美胎動編	
その者の太刀	71

燕結芽回想編 私のおにいちゃん

私、燕結芽には10歳年上の義理の兄が居る。

燕家は海外との交友関係を幾らか持っていてその兄はイギリスのフアリド家というイギリスの名家からの養子として私の家にやって来た。

私はまだ、生まれたばかりの時の事だ。

その兄の名前はマクギリス・フアリド。

私が良く慣れ親しんだ呼び名は燕マクギリスだ。

お兄ちゃんは私が物心つく前にはもう側にいたため私は何ら違和感なくマクギリスを普通にお兄ちゃんと呼んで慕っていたし、何処に行くにもお兄ちゃんの後をくっついて歩いていった。

正直、今思ってもかなりのブラコンだったと思う。

「はい結芽、チョコレート。お母さんとお父さんには内緒だぞ？」

「わーい！お兄ちゃんありがとう！結芽、お兄ちゃんの事、だーいすき！」

こんな会話だって毎日の様にしていた。

私にとってお兄ちゃん存在は自慢であり憧れの対象だった。

そのお兄ちゃんは私の物心が付く少し前、私が4歳の時、お兄ちゃんは伍箇伝の綾小路武芸学舎が運営し今はもうある事件のせいでお取り潰しで無くなった綾小路総合武芸学舎に入学して通っていた。

綾小路総合武芸学舎というのは綾小路武芸学舎が刀使や刀使の関係者に様々な先進技術を取り入れる為に作った所謂分校の様な存在で分校と入っても生徒の数は本家と変わらない数の生徒が通っていた。

そこでお兄ちゃんは中等部二年にして生徒会長を務め、以後は卒業まで生徒会長をした。

成績ではスポーツも武芸も勉強も総合武芸学舎内では全てにおいて主席だったらしい。

それだけでもすごいのに、お兄ちゃんは他の生徒とは明らかに違うすごい事をしていた。

今になって良く分かるが、生徒会長として総合武芸学舎の改革なんという難しい事をやったのだ。

お兄ちゃんは学校の風紀委員会を解体してギャラルホルンってゲームにでも出てきそうな名前の新しい組織を作った。

最初はギャラルホルンは単なる風紀委員会の役割だけをしていたらしいが、そのギャラルホルンはどんどん大きくなって、お兄ちゃんが中等部3年になる時には部活や総合武芸学舎の学科を超えた統一の組織となり、それどころか外部の大学や企業等と協力しながら女子しかねない刀使を男も少しでも戦力になれる様にする為の今までにない画期的な研究までもする組織にした。

お兄ちゃんはほかにも個人的に投資なんかにも手を出していて世間一般の中学生や高校生からすれば、考えられないくらいのお金も稼いだ。

私は5、6歳の時にはもとかからお兄ちゃんに対して思っていた好きという感情の他に憧れを抱くようになった。

当時の私からすれば、お兄ちゃんはカツコイイし頭も良くて強くてとにかく凄かった。

でも、母と父は兄の事を良くは思っていないかった様でお兄ちゃんが幾らすごい事をして褒めたりはしなかった。

それどころかこれは最近知った事だが、お兄ちゃんが投資で手に入れたお金を養育費とかいつて取っていたらしかった。

そんな時、私が7歳にして御刀に触れて認められて、しかも私に備わった剣術の才能が認められると母や父、周囲の人々は私にちやほやし始めた。

私は御刀にまで認められ実力もお兄ちゃんに近づけた気がして凄く嬉しかった。

しかも、お兄ちゃんは私を褒めてくれたし、時間がある時は稽古場まで来て私の応援までしてくれて。

とても嬉しかった。

憧れのお兄ちゃんが自分を褒めてくれる。

ただそれだけだった。私には、凄く嬉しかった。

でも、私はダメだった。

7歳の時、才能を認められて伍箇伝の綾小路武芸学舎への入学が決まり入学式を終えたばかりのことだった。

私はある病気を発病した。

私は病気で倒れ入学後すぐに学校にも行けなくなった。

大きな病院に入院し毎日の様に点滴を受けベットで寝ている毎日。

医者はその病気を今の医学では治せないと言った。

そして余命は残り少ないとも言った。

私の病気は不治の病だった。

私の症状は日々に悪化してついにはベットから起き上がれなくなった。

最初はちやほやしていた私の周りの人々は私が助からない事を知ると一人、また一人と離れていった。

それは母と父も……。

ただ一人、私の側に居てくれたのはお兄ちゃんだけだった。

「……お兄ちゃんはどうして結芽のお見舞いに来てくれるの？」

「たった一人の大切な妹だから……という理由ではダメかな？」

「お母さんもお父さんも来てくれないのに……」

「こんな事を口に出すのは恥ずかしいが、俺にとって結芽は大切な存在。だから、お兄ちゃんは結芽の側にいるよ」

お兄ちゃんは18歳でもうすぐ学校が卒業で忙しいにも関わらず、よくお見舞いに来てくれた。

他に誰も来てくれない状況で、死の影に怯え、かなり憔悴した私にはお兄ちゃんのお見舞いはとても嬉しく心強かった。

まさにお兄ちゃん存在は私にとつての希望の光だったのだ。

でも……でも、その、お兄ちゃんも結局は母や父と同じだった。

お兄ちゃんは結芽の側にいるよと私に言ってくれたお兄ちゃんは結局は私を見捨てたのだ。

お兄ちゃんはある日を境に病室に来る事はなくなった。

私は看護婦や先生に毎日の様に聞いた「お兄ちゃんは？」と。でも看護婦も先生もただ困った顔をするばかりだった。寂しかった。

寂しくて寂しくて寂しくて……。

なんで、誰も結芽の側に居てくれないの？

こんなに辛いのに。

こんなにも苦しいのに……。

でも、幾ら私がそう思っても誰も私の病室には来てくれない。

来るのは看護婦や担当の先生達だけだ。

私は絶望感に包まれた。

日に日に悪化する自身の体調に恐怖し死の影にただひとり怯えた。

このまま誰にも見てもらえずに死んでしまうのか。

そう考えると嫌で嫌で仕方なかった。

そんな私だったが、そんな私を救ってくれたのは折神家当主、警視

庁刀剣類管理局の局長、折神紫だった。

折神紫は病室で私に対して

「選ぶが良い。このまま朽ち果て誰の記憶からも消え失せるか。刹那

でも光り輝きその煌きをお前を見捨てた者達に焼き付けるか」

そう言った。

紫様は私に荒魂の元となる御刀の原料の珠鋼を作り出す際に不純物として出来るノ口を私に見せて、それを私の体に投与すれば私は再び刀使として戦える様になると言った。

ノ口を自分の体に入れるなんて刀使としては最低だ。でも、私はそれでも良いと思った。

誰かに見てもらいたかったのだ。

私が居たという事を誰かに知らしめたかった。

もつともつとすごい私を皆に焼き付けたかった。

私は忘れられなくなかった。

だから、私はノ口を受け入れ再び刀使として戦えるようになった。

再び刀使として戦えるようになった私は折神紫の親衛隊に入る事になり折神家親衛隊の第四席となった。

第四席とは言うが実力は絶対に私が親衛隊では一番だと思ってる。

この時が私が9歳の時の事である。
そして、親衛隊に入つてすぐ、私はお兄ちゃんと再会したのだ。

◇

親衛隊に入つて3ヶ月ほどして私は紫様が警視庁刀剣類管理局の局長として刀剣類管理局の重要な下部組織の幹部と会つて会談する際の紫様の警備を命じられた。

そこは刀剣類管理局の本部の会議室で正直言つて警備というよりは付き添いに近かつた。

紫様がソファに座り、その後ろで私と折神家親衛隊第一席の獅童真希が立つて、とにかく、つまらないお役所話が終わるまで待つのがその日の仕事だった。

そして、会談の時間になった。

テーブルの上には紅茶が紫様と来客用に2つ用意され時間になると、会議室の扉が開き、折神家親衛隊第二席の此花寿々花が会議室に入つて紫様に来客をお連れしたと伝える。

そしていよいよ、来客が会議室にお見えになった。

その来客は非常に奇妙な集団だった。

最初に入つてきたのは恐らく来客の付き添い者で所謂、私達、折神家親衛隊と同じような役職の者だった。

その者達は計2名。

青、金、白という派手な色のまるで何かのコスプレかのような制服を着て頭には顔半分が隠れる白い中世ヨーロッパの甲冑の様なヘルメットをしていた。

その2人はどうやら刀使の様であり御刀を所持していた。

その二人は私達とソファを挟んで向かい合う形でソファの後ろに

立ち、その後から再び二人の人物が歩いてやってきた。

その二人の性別は男で御刀は持つてはおらず明らかに刀使ではなく、先に入ってきた二人の刀使よりも同色は使っていても金が多くより派手な制服を来ていた。だが、ヘルメットはつけていない。

私は変わった服装だとは思いつつも特に興味は無かったから顔までは見ずにあとは、自分の御刀についているキーホルダーを握ったりしながら暇を潰した。

「本日は遠いところよく参られました。どうぞおかけてください。確か直接お会いするのは前回のパーティーでお会いした時以来でしたか」

紫様が来客に挨拶をしてソファに座るように言う。

つまらない時間が始まった。

私はそう思った。

しかし、私は来客の男が発した言葉に目を見開いた。

「ええ、そうですね。前回のパーティー以来です。刀剣類管理局局長、折神紫様」

今の声は……。

私はどこか聞いた事のある声だと思った。

私はゆっくりと顔を上げる。

そして私の目には、染めていない地毛の金髪の髪、翠色の綺麗な瞳が映る。

まるで時がゆっくりになったように感じた。

間違いなかった。

「いえいえ、こちらこそ。ギャラルホルン局長、マクギリス・ファリド様」

私の目の前でギャラルホルン局長と呼ばれたマクギリス・ファリド……私のお兄ちゃんは作り笑みを浮かべて紫様と握手をしていた。

そしてもう一つ、私は見逃さなかった。

お兄ちゃんは……約2年ぶりに会う私に対して、一回だけチラリと見たがそれ以上は全く見むきもしなかったのだ。

私など全く興味も無いかのように……。

お前なんて最初から居なかったと言わんばかりに……。

それから会談は2時間ほど続き会談が終わるとお兄ちゃんは、そのまま会議室を後に行つた。

私はつい、お兄ちゃんを追つて廊下に飛び出した。

「お、おい！結芽！」

獅童が私を止めようとするが時既に遅しだった。

「お兄ちゃん！」

廊下に出た私はお兄ちゃんを呼び止めた。

一瞬だけお兄ちゃんはそれで振り返つたが、それだけだった。

お兄ちゃんはそのまま興味も無さそうに歩いて取り巻きの人たちと共に行つてしまった。

その際にお兄ちゃんと同じような制服を着ている黒髪の男がお兄ちゃんに向かつて

「よろしいのですか？」

と聞いていたがお兄ちゃんは、そのまま片手を軽くあげて

「よい」

とだけ言つただけだった。

この時、私の中にかすかに残っていたお兄ちゃんに対する感情は完全に瓦解した。

お兄ちゃんなら、もしかしたら他のヤツラとは違って私の事をちゃんと覚えているかもしれない。

もしかしたら、お兄ちゃんは何か理由があつて、病院に来なくなつたのかもしれない。

もしかしたら、もしかしたら、もしかしたら……。

そう思つたのだ……。

でも、実際は違つた。

「お兄ちゃんも結局そうだったんだね……」

私はお兄ちゃんの後姿に向かつてそう呟いた。

この日、私の心の中で最後まで今まで引つかかっていた物が無くなつた。

◇

会談のあと、私は折神家親衛隊の面々や紫様、本部の人間に手当たりしだいに当たった。

お兄ちゃんのギャラルホルンなる組織は一体なんなのかを知る為だ。

そこで幾つかの事実を私は知る事になった。

私が入院中の時に、既に私の知るギャラルホルンはまったく違った物になっていたのだ。

今、ギャラルホルンは完全に発足時に一人の学生が作った学校内の組織の枠を超えて巨大化し、もはや警視庁刀剣類管理局の下部組織としての地位を確固たる物として築いていたのだ。

話によれば学校時代のギャラルホルンはCGSモバイルワーカーと言う対荒魂用の画期的な高速戦車を開発してそれが、刀剣類管理局や防衛省に認められて本格的な組織化が行われたら良かった。

それで、お兄ちゃんは学校を卒業した後もギャラルホルンに残り今もギャラルホルンのトップとして局長の椅子に君臨しているのだ。

「流石はお兄ちゃんだね……」

この事を知った時ばかりは流石の私もつい眩いてしまった。

ギャラルホルンは現在、本拠地を綾小路総合武芸学舎から東京の奥多摩に移し今や巨大な工場を有する基地を持っているようだ。しかも、副支部を綾小路総合武芸学舎に置き、その他にも千葉県に支部があるらしかった。

ギャラルホルンはこれらの基地に特別祭祀機動隊や自衛隊から割り振られ転属配備された部隊や伍箇伝、特に綾小路武芸学舎からの入局希望をした刀使、民間の技術者、科学者を多く抱えていて対荒魂用の新装備を幾つも開発している様だった。

紫様によるとS装備の開発にも関わっているらしかった。

ギャラルホルンが持つ組織の規模は今や警視庁館内では刀剣類管理局に次ぐ規模だという。

ちなみに、幾ら刀剣類管理局に次ぐ規模といっても規模自体は刀剣類管理局の方が遙かに凌駕している。

何せ刀剣類管理局は日本全国に支部があり伍箇伝も荒魂も御刀もギヤラルホルンに譲渡された物以外は全てを管理しているのだ。

「でも……これではつきりしたね、お兄ちゃん……」

私は自分の部屋のベットの一人で呟く。

「お兄ちゃんは、結芽よりもそっちの方が好きだったんだね……」

◇

お兄ちゃんのギヤラルホルンがすごく大きくなったという事を知ると同時に私はある疑問を紫様に聞いた。

それは、お兄ちゃんが紫様に燕マクギリスではなくマクギリス・ファリドと呼ばれていたことだ。

なぜ燕ではなく燕家に来る前のファリド家の苗字を名乗っているのか。

私は気になった。

そして紫様から教えられた事実は、少し私の予想を超えるものだった。

お兄ちゃんは……理由は分からないが燕家を破門されたというのだ。

それでお兄ちゃんは今では燕ではなく旧姓のファリドを名乗っているらしい。

お兄ちゃんはや、私のお兄ちゃんですら無くなっていたのだ……。

でも、そんな事はもう私にとってはもうどうでも良かった。

私のすべき事はもう決まっているのだから。

とにかく強い刀使と戦いたい。

そして、私の存在を焼き付けたい。

それが私の望みだった。



でも、私の中でお兄ちゃんへの気持ちはどんどん嫉妬という感情に変わっていった。

最初に再開したあの日から、私はお兄ちゃんと会う事も多くなつたし、刀使として荒魂と戦う際にもギャラルホルンに所属する人たちと会う事も多くなつた。

最初に荒魂と戦う際にギャラルホルンと鉢合わせたのは何時だったであろうか。

確か、その日は珍しく荒魂が東京で同時多発的に現れた時だった気がする。

本来なら東京での荒魂は鎌府女学院の刀使が相手をする事になっているのだがその日は荒魂の数が多く私達、折神家親衛隊にも仕事が回ってきたのだ。

私は東京の西葛西駅周辺に現れた大型の荒魂の討伐を紫様に命じられた。

私はへりで向かったのだが、その中で連絡員がすでに現地部隊が荒魂と交戦していると私に報告してきた。

よく聞けば現地部隊には刀使はおらず事態は膠着しているという。この時私は少し疑問に思った、小型の荒魂なら特別祭祀機動隊でも相手はできそうだが、今回の相手は全長30mを超える大型の荒魂だ。

それを何処の誰かは知らないが刀使が居ない状況で事態を膠着させるとはどういう事なのだろうか。

そして、その答えは現地についてから分かる事になった。

私が西葛西駅の上空でへりから飛び降りて地上で見た光景は、ムカデの様な様相をした巨大な荒魂が西葛西駅に巻きつき、それを

見たこともない戦車が装甲車の様な車両が囲んでいる姿だった。

その車両は車体の左右に取り付けられた機関銃……後から聞くと30ミリマシンガンとかいう銃で荒魂を足止めしていた。

そしてその周りにいたのは特別祭祀機動隊……ではなく、一度見たら忘れられないあのギヤラルホルンの制服を着た者達だったのだ。

その者達は私が到着すると私に向かって敬礼をした。

「刀使の方ですね？お待ちしておりました！」

「……そうだよ。で？あんた達は？特別祭祀機動隊って訳じゃないみたいだけど」

私は若干イラついて私に対して敬礼をした者に言った。

正直、正体はギヤラルホルンだと分かってはいたが嫌がらせの意味もあつて聞いた。

「はっ！我々は警視庁刀剣類管理局に属するギヤラルホルンの対荒魂特別機動部隊です。いや、助かりました。我々も弾薬がそこを尽きそうです」

「ふーん……まっそんなのはどうでも良いけどね」

その後、私は、特に苦戦する事もなく一瞬で荒魂を片付け任務を終わらした。

後で聞けば荒魂と戦っていた戦車や装甲車に見えた物は噂に聞くCGSモビルワーカーだった。

そのCGSモビルワーカーの横腹にはギヤラルホルンのマークが描かれていた。

その後も、ギヤラルホルンの名前はよく聞いたし、よく会うことが多くなった。

特別祭祀機動隊も彼らの事は一目置いているみたいで、特にギヤラルホルンのCGSモビルワーカーはあちこちで見かけた。

私はその様子を見て何故かイライラを積もらせていった。

そして、一番の決定的だったのがギヤラルホルンが主催したギヤラルホルン結成8周年の記念イベントだった。

ギヤラルホルンは刀剣類管理局の下部組織である為に紫様もこうした記念イベントに来賓として参加するのだ。

正直私は別に参加なんてしなくていいじゃないかと思っていたが、大人には嫌でも人と付き合わなければならぬ事があるらしかった。そしてギヤラルホルンの結成8周年の記念イベントが行われた。記念イベントは奥多摩のギヤラルホルン本部施設の屋外の広場で行われた。

私はギヤラルホルンの施設に入るのは初めてだった為、その施設を初めて見た時は少しだけ驚いたのを覚えている。

私はてつきりギヤラルホルンも刀剣類管理局ひいては折神家の管轄の組織なのだからその建物も和風な感じの建物があるのかと思っていた。現に、折神家の建物は和風の建物が多いのだ。

しかしギヤラルホルンの本部施設はそうではなく、未来的な形をしたビルや工場が大半を占めていた。

そんなギヤラルホルンの本部の真ん中に位置する広場で記念イベントは演奏楽団の演奏で幕を開けた。

私を含めた折神家親衛隊の面々は紫様の側につき来賓やギヤラルホルンの幹部席についていた。

その幹部席の前ではギヤラルホルンの制服とヘルメットをつけた人達がまるで軍隊の様に隊列を組んで並んでいた。

紫様は司会紹介で警視庁刀剣類管理局の局長、そして折神家の代表として最初にギヤラルホルンの面々の前の演台に立ち訓示を行った。

その後、その他の来賓たちが挨拶を行い、最後にお兄ちゃんが演台に立った。

お兄ちゃんの演説は5分程続いたと思う。

演説の最後には「刀使とギヤラルホルンに栄光あれ！」という臭いセリフで演説は占められた。

そしてその言葉の後にギヤラルホルンの人たちが歓声を上げた。

そして屋外イベントの最後はCGSモバイルワーカーのパレードで幕を閉じた。

ちなみにその間、お兄ちゃんはパレードの様子を演台の上敬礼をしたまま見続けていた。

一方の私はそのお兄ちゃんの後姿を複雑な気持ちで見っていた。

屋外イベントが終わると今度は屋内で来賓やギャラルホルンの重役を交えたパーティーだ。

パーティーはバイキング形式で広いパーティー会場には料理が置かれたエリアと客席のエリアに分かれていた。

ちなみに、私が手に取った料理はケーキやマカロンだ。

料理は一流の料理人が作っているらしく美味しかった。

ただ、やはり、その会場でも私はお兄ちゃんの姿を何度も見かけた。お兄ちゃんの周りには沢山の取り巻きの人が居て、私はそれを遠くで見れていたが、見れば見るほど、どんどん嫌な気持ちになっていった。どうして、お兄ちゃんばかり……。

少し前までは私もあの場所に居たのに……。

どうして結芽の事は誰も見てくれないの……。

お兄ちゃんの周りには相変わらず沢山の人が居る。

一方で私は折神家親衛隊第四席なんて言われているが、お兄ちゃんを見ていると自分はまだ、お兄ちゃんと肩を並べてはいないのでないかと思ってしまう。

その気持ちが嫉妬だという事に気がついたのはパーティーが終わる帰りの車の中の事だった。



お兄ちゃんへの嫉妬を抱いた私はお兄ちゃんに会うとイライラをつみかさねていった。

私を見捨てたお兄ちゃん……。

一番つらい時に私を見捨てた男マクギリス。

どうやったらお兄ちゃんを見返せる？ どうやったら私を見捨てたお兄ちゃんを見返せる？

嫉妬は次第に私の理不尽な状況への怒りへと代わっていく。

私の命はノ口の力で延命をしているとはいえ、長くは持たない。

もって数年の命だ。

こんな短い期間でお兄ちゃんをどうやって見返せるのだろうか？

私は別に他の人の記憶に私という存在を焼き付ければそれで良い。その目的自体は頑張れば絶対に出来ると私は信じている。

ただ、その目的にお兄ちゃんへの嫉妬が加わりお兄ちゃんを見返してやりたいという気持ちが加わると話は別だ。

お兄ちゃんを見返す……言葉にすると簡単な話だが正直言っ出て来る気がしなかった。

あの紫様と対等に話すことができる地位にまで上り詰めたお兄ちゃんに……。

ただ、このままお兄ちゃんを見返せずに死ぬのは嫌だ。

私の脳裏には未だに約ほとんど2年ぶりに再会した時のお兄ちゃんの私を無視する後姿が焼きついている。

すると私が10歳になった時、ちょうど、そんな時に、私は警備の名目で紫様とお兄ちゃんの会談を立て聞いていた時、今の私にとってすごく良い話が舞い込んできたのだ。

「ガンダムフレーム……ですか？」

「ええ、そうです」

その話を最初に持ち出したのはお兄ちゃんだった。

紫様がその話を聞いてお兄ちゃんに聞きなおす。

この話をしている時、お兄ちゃんは不敵な笑みを浮かべていた。

「具体的にはどの様な物なのですか？」

「ガンダムフレーム、これはS装備の技術と我々のロボット工学の技術を融合させた新装備です」

お兄ちゃんはなにやらソファアーターブルに資料を出して紫様に見せる。

私も資料を紫様越しではあるが少しだけ見る。

そこには図面らしき物が書いてあり、その図面にはまるでロボットアニメにでも出てきそうなロボットが描かれていた。

「まだ開発段階です。しかしこれが完成すれば、荒魂への対処が現在の体制から大きく覆る事になるでしょう。さらにこの装備の特別な

点がもう一つ、阿頼耶識システムです」

「阿頼耶識システム？」

「ええ、このシステムは搭乗者の脊髄にナノマシンを注入しピアスと呼ばれるインプラント機器を埋め込み、操縦席側の端子と接続することで、パイロットの神経と機体のシステムを直結させる……つまりは機械と人間との融合。これによって直感的かつ迅速な操作が可能となります。さらに現在、機体の情報伝達回路に珠鋼を使用する事を計画しています……これはあくまで我々の科学者の見解なのですが機体の情報伝達回路に珠鋼を使用する事で刀使がこの機体に搭乗した場合、阿頼耶識システムによって理論上は機体もろとも写シを張る事が可能になるのです」

「なるほど……あなたの言いたい事は大体、分かりました。マクギリス局長、つまりは我々折神家にその開発の援助をして頂きたいという訳ですね？」

「流石は折神家当主。その通りです。我々に折神家が管理している剣をこのガンダムフレームの開発の為に1刀、融通させてもらいたいです。この装備の完成には神聖な希少金属、珠鋼がどうしても必要です。珠鋼を組み込む事によってこの機体は神聖を帯び、荒魂とも戦えるようになる可能性が高いのです。この機体が完成すれば刀使の戦いのありようが確実に変化するでしょう」

「確かに……従来、大型の荒魂への対処法は数人の刀使による殲滅。仮にこの機体が資料通りのスペックを出す事ができたのならば大型の荒魂を相手にしても一機で倒す事が可能となるという訳ですね」

「その通りです」

お兄ちゃんは満足そうに笑みを浮かべた。

「ですが、この計画は危険ではありませんか？マクギリス局長」

「というところ」

「このままの計画を採用するとすれば、その阿頼耶識システムを刀使に手術をして取り付けるという事ですが、刀使はその大半が学生の少女達です。しかも御刀を持っている期間は人生の内短い期間でしょう。その少女達に手術までして機械を繋げるといのは問題が多す

ぎると思いますが」

「なるほど。確かにあなたのご指摘も一理ある。しかし、少し考えていただきたい。確かに現状では大半の刀使は若い間だけ、しかも少女の期間で刀使の役目を終えてしまう者が大半です。ですが近年、再生医療の技術が飛躍的に発展している。この状況を垣間見れば、いずれは人間の寿命の飛躍と共に刀使の適正期間も長くなる可能性が高い。現に全国の刀使に対して我々が行ったアンケート調査では、もし刀使として十分な仕事が生徒が一生できるのであればどうするか？という質問に対して43%以上の生徒が刀使を続けたいと言っている。折神家としてその点はどのようにお考えですか？」

「再生医療については我々、折神家でも一目を置いています。ですが再生医療が刀使としての寿命までを延ばせるかは未だに証明されていない」

「ですが、それも時間の問題では？」

「ならば、再生医療の優位性が確認できてからでも遅くは無いでしよう」

「残念ですがこのプロジェクトはすでに動いているのです紫様。我々ギャラルホルンの威信と刀使の正義をかけたプロジェクトとして」

「……………」

紫様がお兄ちゃんを睨みつける。

だが、お兄ちゃんは怯まず作り笑みを浮かべる。

「それに……ただの話、我々ギャラルホルンも一枚岩という訳ではありません。一部には強硬派という輩がおりますね。この開発を折神家抜きでやろうなどという愚かな連中がいるのですよ。私としては、刀剣類管理局の下部組織であり刀使を補佐すべき我々がその様な愚行をすることは看過できない。そこで今回のお話をしに参ったのです。ぜひとも紫様には英断をお願いしたい。ギャラルホルンの愚行を抑えるためにも」

「……………良いだろう。では我々も検討するとしましよう」

「良い答えをお待ちしておりますよ」

……ここで紫様とお兄ちゃんの会談は一段落した。

お兄ちゃんは折神家親衛隊第三席、皐月夜見が入れた紅茶を飲み干す。

「それでは紫様、本日はお忙しい中、私どもの様な若輩者の話を聞いていただきありがとうございます。それでは本日はこれで。またお会いしましょう」

そう言うとお兄ちゃんはソファから立ち上がった。

そしてそのまま扉の方へと歩いていった。

「時に、マクギリス局長。一つお聞きしてもよろしいか？」

マクギリスが付添い人のギャラルホルンの黒髪の男と護衛の刀使と共に部屋を後にしようとしたその時、紫様がお兄ちゃんを呼び止めた。

お兄ちゃんが立ち止まる。

「なんででしょうか紫様」

「実は私の知り合いが少し面白い噂話を聞きましたね」

「ふっ……どのような噂話ですか？」

「あなたの呼び方に関してですよ」

「……呼び方？」

その瞬間、私はお兄ちゃんの口調に違和感を感じた。

いつも余裕そうにしているお兄ちゃんが警戒感を露にしたのだ。

「いえ、もしあなたが局長と呼ばれるのが嫌なのでしたら私としても呼び方を改める必要があるのではないかと思ひましてね」

紫様が薄っすらと笑みを浮かべる。

「……話が見えませんか」

「准将」

「……………」

「と呼ばれているそうではないですか。ギャラルホルンの中では。いや、確かに局長よりもマクギリス・ファリド准将の響の方が似合っている様に感じますからね。ですから、もしも、あなたが局長よりも准将の呼び名がよろしいのでしたら我々もそうしましょう」

「ふっ……おたわむれを。私はあくまでギャラルホルンの局長、マクギリス・ファリドです。誰が私の事を准将などというのかは分かりま

せんが、准将を名乗るのでしたら折神家の当主たるあなた、適任ではありませんかな？ いや、それとも大将でしょうか……まあ冗談はさしておき、私は次の予定がありますのでこれで失礼します」

そう言うとお兄ちゃんは会議室から去っていった。

私は正直言つて詳しくお兄ちゃんと紫様が何を話していたのかは分からなかった。

でも、二人が険悪なムードというか、そこまでは行かなくても、なんだか両者警戒をしている雰囲気だとは私も感じていた。

ただ、同室にいた獅童真希や此花寿々花は話までが分かっていたように紫様と同じように警戒した様子で聞いていた。

私はそういうお役所話とかそういう話にはあまり興味がなかったが、いつからか紫様はお兄ちゃんと会う時に警戒を見せるようになっていた。

特に今日の雰囲気は本当にピリピリしていた気がする。

会談が終わった後、紫様は私達に下がるように命じたため私達は紫様の執務室から外に出た。

ようは暫くの間、暇になったのだ。

私が後ろで獅童真希と此花寿々花が前になる形で歩いている。

そんな獅童真希と此花寿々花は二人でなにやら話していた。

「ギャラルホルン……最近、手口が露骨になってきましたわね」

「ああ、そうだね……でも、少し前の様に僕達の影でこそ色々さされるよりは良いんじゃないかな」

「確かにそうですね。ギャラルホルン、果たして彼らは何をしようとしているのかしら……」

「正直言つて僕にも良く分からないが、紫様には何かお考えがあるんだろう」

「そうですね。ですが、最近のギャラルホルンの動きは解せませんわ……急激な軍備拡大。関係各省への圧力。それどころか御刀を要求するなんて……許せませんわ」

普段、私の前ではお兄ちゃんに関する話をしない二人が今日は珍しくお兄ちゃんのギャラルホルンについて話している。

私はそれを見て会談中の二人の様子を思い出して納得する。

二人はお兄ちゃんやんが紫様に対して色々言っている様子を見てあからさまにお兄ちゃんに敵意と不快感を向けていたのだ。

当然といえば当然だ。

自分達が尊敬し敬愛している紫様に対して非礼な事をお兄ちゃんはずつと言っていたのだから。

普段においても二人は、お兄ちゃんとの会談の時はただでさえ、嫌そうなのに今日はいつもよりもお兄ちゃんに対して怒りに近いものを向けている様だった。

恐らく、怒りでいつもは私の前ではしない話をしてしまっているのだろう。

なぜ、二人が私の前でその話をしないのかは何となく予想がつくが……。

私はこれを良い機会だと思った。

私は二人の前に出ると声をかける。

「ねえ！真希おねーちゃん！寿々花おねーちゃん！」

「……いゆ、結芽」

獅童真希と此花寿々花が少し驚く。

そして、今時分たちが話していた内容を思い出す。

「おねーちゃん達はさ、いつもお兄ちゃんやんがここに来たりするとき、二人でコソコソ話してる事が多いけどさ……何の話をしてるの？結芽に内緒で……ねえ？おねーちゃん」

私は二人に笑みを浮かべながらも睨みつける。

「はあ……失敗しましたわね。真希さん」

「そうだな……結芽には余り心配を掛けたくは無かったんだが……」

二人は私を見てやってしまったと表情を落とす。

「……どういう事なのか、もちろん教えてくれるよね」



獅童真希と此花寿々花の二人が私に語った事は中々にスケールの大きい事だった。

聞けばお兄ちゃんのリョウジはここ最近、不穏な動きを見せているというのだ。

私がここに来たばかりの時はまだ、疑惑はあるものの、警戒するほどではないという段階だったらしいが、今は警戒を厳重にするべき段階にまでなっているのだという。

二人の話によればリョウジは正式に公的機関として昇格されてから急激な組織の拡大と組織が持っている武装の数を刀使の支援に使う為として急激に増やしているのだという。

すでにリョウジは錬度は不明だけど刀使を37名が在籍していて、さらにそれに加えて対荒魂用のCGSモバイルワーカーを少なくとも300両以上の数で保有しているようだ。

一警察組織が保有している数とすれば明らかに過剰戦力であるが、名目上はリョウジのCGSモバイルワーカーの保有数は50両で、その他の車両は警察や自衛隊への引き渡し予定の装備なのだそう。

しかし、本来ならば完成しだい注文を出した警察や自衛隊に引渡しをするのが普通なのだが、リョウジはどうかやら警察や自衛隊の上層部に秘密裏に圧力をかけているらしく、引渡しを延期するという形で、過剰なその戦力を自分達で抱えこんでいるのだという。

しかも、最近では自分達の施設で大規模な演習までもしているそうだ。

そして、ここに来て、今日の会談だ。

獅童真希はあの会談は脅しも同然だと怒りを露にしていた。

それは、此花寿々花も同じ。

私はこの二人の話を聞いて確かにこの話は怪しくて危なそうな匂いがぶんぶんすると思った。

ただ、私はこの危なそうな匂いを

「へえ、そうなんだー」

内心、少し楽しんでいた。

何か面白い事が起こりそう……。

私はそう考えていた。

それと、所変わって、ちなみに獅童真希と此花寿々花の二人が私にこの話を内緒にしていたのは、私のお兄ちゃんがギャラルホルンのトップだから遠慮していたのだという。

正直、こういう事をされるのは迷惑なのだが、それは言わなかった。そして、この話をした日から1週間後の事。

私は紫様の執務室でいつもの様に紫様に切りかかっていた。



コンコンと私が紫様の執務室の扉をノックする。すると、中から「入れ」と返事がした。

私は満面の笑みで扉を開けて中に入る。

紫様は座って資料を見て仕事をしている。

「ゆっかりっさまー」

リズムをつけてそう言うとは部屋の中へと入り扉を閉める。

そして紫様の方へとスキップして歩み寄った。

「あーそーぼっー」

言葉の最後のタイミングでスキップをしていた足をバネに紫様めがけて足を踏み出し瞬時に御刀を抜いて紫様の顔へと向けて刺し込んだ。

しかし、私の御刀は紫様に軽くかわされる。

私はすかさずテーブルの上で姿勢を変えて今度は御刀を紫様の豊かな胸へと向けて突き出した。

だが、それもかわされる。

そして、紫様は写シより御刀を一本取り出して私に切りかかった。私はそれを御刀でガードするがその太刀の勢いに負け壁に叩きつ

けられた。

「もー!!また勝てなかったあ!!」

私は少しばかり悔しさを出す。

すると、紫様はそんな私を見て呆れたように言った。

「そんなに退屈か?」

私は立ち上がると御刀を鞘へと戻し紫様の元へと頬を膨らませて歩み寄る。

「もう!だって最近なんにも面白い事ないんだもん!それどころかお兄ちゃんも、来るし!やになっちゃう!」

「ふっ……」

私がかここ最近の不満を紫様に言うのと紫様は一瞬だが、かすかに笑みを浮かべた。

「結芽、今は待て。直に面白い遊び場を用意する」

「本当!」

私は紫様の言葉に食いつく。

「一週間前にお前の兄が来たのは覚えているな?お前も兄には随分、ストレスを抱えているようだが」

「むう……もったえつけないで教えてよ紫様!」

「まあ落ち着け。実は例のギャラルホルンの新装備、ガンダムフレームとかいったか、実はこの度、これの開発を我々、折神家でも支援をする事になった」

「へえーあれ、結局、協力する事にしたんだ」

「ああ。だが、一つ条件をつけてな」

紫様は薄っすらと笑みを浮かべる。

「条件?」

「我々、折神家がギャラルホルンに開発の援助として適合者の居ない御刀を提供する代わりに、ギャラルホルンは新装備の開発後、その試験運転として我々、折神家の刀使と試合を行う事になった。刀使にも勝てないようでは装備として役に立たないからな」

「それって……」

私の胸がトンと高鳴る。

「そこでだ。私はその試合を結芽、お前に出てもらおうと考えている」「え!?ほんとに!?その試合、結芽がやって良いの?」

それを聞いて私は一気に気分が高揚した。

お兄ちゃんは言っていた。

「残念ですがこのプロジェクトはすでに動いているのです紫様。我々ギヤラルホルンの威信と刀使の正義をかけたプロジェクトとして」と。

つまりは、このガンダムフレームとか言うのは、お兄ちゃんの意味だ。

これは、一週間前に獅童真希と此花寿々花から聞いた事だが、お兄ちゃんはギヤラルホルンは一枚岩ではないと言っていたが、その話は果たして本当なのか疑問だという事だ。

ギヤラルホルンはお兄ちゃんを中心に発展してきた組織だ。

しかも折神家の情報筋によると、お兄ちゃんはギヤラルホルンの一般職員の中でもかなり慕われているとの話だ。

そのお兄ちゃんの組織が一枚岩ではないというのは疑わしい話だった。

これがお兄ちゃんの意味ならば、そのガンダムフレームとかいう物を私がこれを機会に壊せば、お兄ちゃんを見返すことが出来るのではないか。

私はそう考えた。

「ああ、問題ない。それに三カ月後はお前の誕生日だろ?丁度良い誕生日プレゼントだ」

「でも、紫様。本当に私がやっちゃっても良いの?試験じゃなくて壊しちゃうかもしれないよー?」

「ふっ、思う存分暴れるが良い」

「やったー!それで、それで?その試合っていつ?ゆっかりつさまー!」

「今日より三カ月後。奥多摩のギヤラルホルンの本部によってとり行われる」

「そっかーそれじゃあ、それまで、結芽、良い子で待ってるね。紫様!」
「ああ、楽しみにしている。試合のことは折り入って知らせるそれま

では待っている」

「うん！分かった！それじゃあ、良い話も聞いたから結芽は帰るねー」
「うむ」

私は気分が高揚した為、久しぶりに良い気分でスキップをしながら、執務室の出口の方へと戻った。

だが、私はふと思ひ、扉の前で立ち止まる。

「ねえ紫様」

「ん？まだなにか用か？」

「あのさー、無かつたら別に良いんだけどさー」

私は紫様に振り返りながらに笑みを浮かべる。

「そのさーお兄ちゃんが作った新装備？よく分かんないけど、その口ポットみたいなヤツに名前があつたら教えて欲しいなーって」

「あれの名前か？確か……」

紫様は机の上の資料を見る。

「バエルだ」

「バエル？」

「そうだ。ガンダム・バエル……レメゲトンの第一書ゴエティアに記載された所謂、ソロモン72柱の悪魔の一つで66の軍団を率いる序列1位の悪魔の名前だ。その名を持つ相手がお前の今回の相手というわけだ」

「へえー強そうな名前だね……でも、そんなの関係ないや。そんなの私が倒しちゃうから」

そう言うとは私は笑みを浮かべたまま紫様の執務室から出て行った。

その時の私の頭の中は三カ月後後の試合の事でいっぱいワクワクした感情と、どうやってそのバエルとか言うのを、倒してお兄ちゃんを見返そうかとか、そんな事をばかりを考えていた。

ただでさえ時間のない私に舞い込んできた数少ないチャンスだ。

いや、数少ないチャンスどころか、もしかしたら、もうこれが私に残された兄を見返す為の最後のチャンスなのかもしれない。

私はなんとしてもこのチャンスを上手く使ってやると、心の中で誓ったのだった。

しかし、三カ月後、この私の誓いが果たされるべきチャンスはやってこなかったのだ……。



三カ月後。

私の誕生日の日。

お兄ちゃんのバエルとの試合の当日の夜8時ごろ。

その日、私は昼間に行われたバエルとの試合の勝利から気分が高揚していた……という訳はなく。

鎌倉に侵攻してきたテロリストとの戦闘を行っていた。

「うう!!今日はお兄ちゃんとの試合の日だったのに!!もう邪魔っ!!」

私は文句を言いながら迅移で加速する。

「刀使だ!総員一斉射撃!!」

「弾幕をはれ!!」

私に対して彼らは自動小銃を使って銃撃をするが私はそれを一瞬にしてかわすと敵の懐に飛び込み敵の兵士が目にも止まらない速さで13名の敵兵を全員切る。

「なっ……」

「グハッ……」

バタバタと敵兵はその場に倒れる。

私は御刀についた血を一回勢いよく振って落とす。

それから私は倒した敵の死体を見た。

黒い戦闘用の防弾装備に全身を包んだ者達が自動小銃を持って倒れている。

私は横向きに倒れているその死体を足で上向きに倒すとその防弾ジョッキに描かれたマークを見つめた。

そこには見覚えのあるマークが描かれていた。

私は周囲を見る。

私が今居る通りには、今は敵はいない。

しかし、この当りは敵だらけだ。

あちこちで銃声の音が断続的に鳴り響いている。

「はあ……こんなザコ共を相手にしてる場合じゃないのに！」

私は敵の死体の頭を踏みつける。

すると、その時、後ろの方から特別祭祀機動隊の部隊と鎌府女学院

の刀使部隊がやってきた。

「燕様ー！」

「こ、これは……まさかお一人で？」

駆けつけてきた部隊の各員は私の周りに転がる死体を見て若干表情を青ざめる。

「あたりまえじゃん。こんなザコじゃ私の相手になんかなれないよ……」

私がイライラから強い口調で言う。

すると、ちょうど、その時。

上空で多数の爆発の閃光が光った。

「……………」

私は空を見上げる。

私以外にもその場の全員が空を見上げる。

ただ、私以外は皆、怖がっていた。

上空での複数の爆発。

そしてその爆発を次々と引き起こしている“原因”が夜空に青い軌道を描いてものすごい早さで空を駆けている。

爆発を起こしているのは敵に向かって発射された陸上自衛隊や海上自衛隊のミサイルだ。

しかし、それらのミサイルは、目標の敵に辿りついて爆発しているわけではない。

青い軌道を描いている“それ”に次々と撃墜されているのだ。

私はその光景を今までにない程、ワクワクした気分で見っていた。

いや、睨んでいた。

この気分は三カ月後前に試合が決まった時よりも遥かに強い。

そして私は笑みを浮かべ呟く。

「……待っててね。絶対に結芽が倒してあげるから」

◇

全ての始まりは二日前の夜の事だった。

神奈川県鎌倉にある警察庁特別刀剣類管理局の本部。

ここには折神家の本家や伍箇伝の一員である鎌府女学院が隣接している。

つまりは私が普段から居て一年の長い期間を過ごしている場所だ。

その警察庁特別刀剣類管理局の本部では、いつにもない程、あわただしい空気に包まれていた。

時にして夜九時頃の話である。

その時の本部の空気はたった二文字で表す事ができる。

混乱

それが、その時の本部全体、そして司令室での状況だった。

私はその時は非番で夜に突然、本部から連絡が入り呼び出され本部にやって来ていた。

紫様や折神家親衛隊3人は別件で長野の方に行っていた為、4人が帰ってくるまでの間、司令室に居て欲しいとの事だった。

司令室勤務の職員達の間で怒号や混乱の声が飛び交う。

私は司令室の隅でその様子をポツキーを食べながら見つめていた。

「警察庁本部との連絡は!?!」

「ダメです!!何処も混乱していて……」

「他にも連絡をしろ!防衛省!経産省!文部科学省!何処でも良い!!」

なんとしても向こうの状況を把握するんだ!!」

「鎌府女学院から緊急の問い合わせが!」

「何だこの忙しい時に!」

「警察庁の会議に出席していた高津学長とも連絡が取れないようです!」

「なに!?あのヒス学長も東京にいたのか!」

「どうやらその様です!」

「くそ……一体、何が起きているんだっ!!」

そんなやり取りを司令室の隅で私は聞いていたわけだが、正直言つて

「何これ?」

私は首を傾げていた。

私も他の職員と同じく意味が分からなかったのだ。

何せ私が来た時にはすでに司令室はこんな状況で、大混乱だったのだ。

司令室の職員をつかまえて聴いてみたりもしたがその答えはあやふやな物で使えなかった。

ただ、一つ分かったのは何か大事が起きているという事であった。

司令室の大型モニターにはまるでハリウッド映画でも見ているような気分になる映像が沢山映っている。

モニターに映っていた画面は東京都内の防犯カメラの映像で、本来は荒魂を見つける際などに使用されるのだが、その映像には炎上するパトカーや乗用車、たまに映る街中を爆走するCGSモバイルワーカーらしき車列、銃撃戦の様子等が映っていた。

私とその映像を見ると、その時、司令室の扉が勢いよく放たれた。「うろたえるな!!」

「親衛隊の……それに紫様も……」

職員の誰かがそう呟いた。

私は開けられた扉の方を見る。

勢いよく扉を開けて司令室に入ってきたのは紫様を先頭に続いて獅童真希、此花寿々花、折神家親衛隊の第三席の皐月夜見だった。

先の怒声は普段は大声など出さない紫様だった。

「まずは状況の報告をしろ！何が起きているのか状況を精査する！」

「は、はいー！」

紫様の叱責に職員の一人がタブレット端末を持って紫様の近くにかけよる。

「ほ、報告します！今から3時間ほど前、埼玉県、千葉県、東京23区内において、同時多発的に大規模な所属不明の部隊による攻撃が発生しました！すでに霞ヶ関とは完全に通信が途絶！新宿区では都内の特別祭祀機動隊と所属不明部隊との間で激しい銃撃戦となっており、そのほかの地域でも戦闘が行われています！」

「霞ヶ関との連絡が取れないのか？」

獅童真希が職員に聞く。

「は、はい。霞ヶ関との連絡は一時間前に警察庁からの通信を最後に完全に途切れています……」

「ほかの警察署は？」

「八王子市の警察署はどうやら被害を免れているようです。しかし、東京23区内の警察署とは連絡が取れません。また、通信回線も次々と断線されており警察庁の防犯カメラのネットワーク網が寸断されつつあります」

「霞ヶ関との連絡が取れないのはまずいな……」

「ええ、そうですね……確か、国会議事堂では臨時国会が開催中でしたはずですし……所属不明の部隊とやらが気になりますわ」

「そうだね……君、すぐに所属不明の部隊が映っている防犯カメラの映像を映してくれ。これだけ沢山あるんだ。ひとつくらいはあるだろう？」

「了解！」

そう言うと職員の男はモニターに画像を表示した。

だが、獅童真希はその画像を見て目を細めた。

「これが……所属不明の部隊か？」

「は、はい。そうです。服装だけを見ますと……いえ、確認を取ろうにも何処も混乱していて確認が出来ません」

「ですが、これは……黒ではありませんの?」

此花寿々花も獅童真希と同じように目を細る。

その先にはモニターの画像があった。

「い、いえ、それはまだ……まだ、確定した情報ではないので……? 紫様?」

紫様が数歩前に歩みだしモニターの画像を見つめる。

そして睨み呟いた。

「……ついに本性を表したか」

モニターには防犯カメラに映ったCGSモバイルワーカーの静止画、その拡大写真が映っていた。

その車体の周りには一度見たら忘れられない派手で特徴的な制服を着て自動小銃を持った者達の姿。

そして、その車体の側面には紛うことなきギャルの角笛のマークがしっかりと映りこんでいた。

「ギャラルホルン」

紫様は睨んだままそう言った。

そして、紫様と同じくモニターを見ていた獅童真希も根幹とも言うべき事を呟く。

「反乱だ……」

と。

◇

その事件は私の10歳の誕生日の二日前、つまり試合の二日前に起きた。

『聞け！ギャラルホルンの諸君！今、三百年の眠りからマクギリス・ファリドのもとにバエルは蘇った！』

これは奥多摩のギャラルホルン本部にて事件が始まった3月1日にマクギリス・ファリドがパワードスーツの様な物に乗ってギャラルホルンの局員達に向けて夕日をバックに一斉生中継された映像にて最初に発した一言である。

“マクギリス・ファリド事件”

今ではみんな、あの事件の事をそう呼んでいる。

日本の歴史上、戦後初にして規模から見れば近代日本では歴史上初めて発生した大規模クーデター事件。

事件の首謀者はギャラルホルン局長マクギリス・ファリド。

そしてその事件において事件を首謀したのはギャラルホルンだ。

ギャラルホルン奥多摩本部と千葉支部の二つの支部が反乱の中心組織で、総勢約5300名が反乱軍を形成した。

二日前、ギャラルホルンは何の前触れも無く突如として埼玉県、千葉県、東京23区にて荒魂対策の名目で配備していた部隊で攻撃を開始し反乱を開始。

最初に標的となったのは埼玉県内や千葉県内にあつた航空自衛隊

の基地で、数両のギャラルホルンのCGSモバイルワーカーが基地内にフェンスを破壊して突入し30mmマシンガンを連射。

その戦闘能力を満遍なく示して基地を占拠した。

その次に事があったのは東京23区。

ギャラルホルンは貨物列車や輸送トラックなどにCGSモバイルワーカーを隠していたようでそれらの戦力を使って電撃的に侵攻を開始した。

テレビ局を占拠もしくは破壊し、さらには霞ヶ関の関係各省庁を強襲。

突然の出来事に関係各省は対応しきれずに霞ヶ関はほんの僅かな時間で陥落した。

ここまでの出来事は全て3時間以内での出来事である。

そして紫様が折神家親衛隊を引き連れて出張先の長野からへりて緊急で本部に帰還し本部の司令室に到着した時、

その時は既に事件開始から3時間もの時間がたった後の事だった。

事件発生から6時間後。

全てが動き出したのは事件発生から6時間もの時間がたった後の事だ。

東京が陥落した事によって全ての関係各省が事実上の機能不全に陥った後、警察本部を失った全国の警察は臨時的な処置として紫様の名の下に折神家の一時的な傘下に入り、自衛隊は新たに臨時作戦本部を静岡県の駒門駐屯地に設置した。

事件発生から8時間後。

警察と自衛隊は協力体制をくんで部隊を東京23区を包囲するよう配置した。

ちなみに、この間、ギャラルホルンからの攻撃は無かった。

その後も、ギャラルホルンからの動きが無かった為、自衛隊と紫様は刀剣類管理局の本部で対策会議を開いた。

この対策会議では時にはギャラルホルンの反乱を許した警察への自衛隊側からの怒号も飛んだりもした。

私はその間、常に紫様の後ろに他の折神家親衛隊の3人と共に控え

てていたが、もちろん、そんな会議に私は興味はない為、私は御刀のキーホルダーを握ったりして気を紛らわしていた。

会議の内容は私が理解できた範囲でこうだ。

自衛隊の強行派による先制攻撃案と警察の相手の出方を待ってから対応を決めるという案の二つの話し合いだ。

自衛隊が強硬姿勢だった事も災いして会議の時間は伸びに伸びて結論が出たのは1時間半ほどたった後のことだった。

会議での結論は、警察が提案した、相手の出方を見てから行動するというものになった。

そんなこんだで、私達が事件への対応を後手にまわる中、事態が本格的に動き始めたのは3月2日の午前6時の事だった。



3月2日の朝の6時。

『全国民に告げる！私は警察庁特別刀剣管理局ギヤラルホルンのライザ・エンザである！私は我々、ギヤラルホルンのリーダーであるマクギリス・ファリド准将に代わって恐れながら、この私が今ここで、全国民に宣言する！』

ライザ・エンザを名乗るその青年の演説はギヤラルホルンの制服を着てテレビに中継されていた。

撮影場所は国会議事堂の衆議院議場の様で演台の上から力強く演説をしている。

『我々、ギヤラルホルンは、今日この日をもって霞ヶ関を含めた東京23区の全域を完全に掌握した！』

ライザ・エンザがそう言うのと映像は何処かの道路の路上に切り替わる。

映像には警察官達が列を作ってギヤラルホルンの黒い戦闘服を身にまとった隊員達に連行されている様子や、銃を突きつけられ拘束さ

れる政府の職員達。

そして映像が国会に戻ると議場の議員席にて複数の戦闘員に銃を突きつけられて座る国会議員たちの姿になった。

『我々は、我々ギャラルホルンはついに立ち上がったのだ！革命の時が来たのだ！新しい風を起こし、この国に蔓延した腐敗と災いを吹き飛ばす！我々が一人一人の力でこの欺瞞に満ちた世界を変革する時が来たのだ！』

『もはや東京には我々と戦う事ができる戦力は残されていない！』

破壊された航空自衛隊の基地の様子が映り次に国会議事堂前に配備されたCGSモビルワーカーが映る。

そして日本の国旗が地に落とされ、変わりにギャラルホルンの青い旗が掲げられた。

『我々の目的はただ一つである！この腐りきったこの国を我らギャラルホルンの名の下に再編成し！平和と秩序と刀使の正義の名の下に誰にも等しく権利を与えられる国へと作り変える！この国を完全に新しい物へと生まれ変わらせるのだ！』

『しかし、国民よ！我々を恐れないで欲しい。我々ギャラルホルンは全ての国民の味方である！真なる敵は、この国を腐敗させていく愚かな政治家共である！もはや他者の揚げ足取りと化し自己の権利を乱用しこの国を停滞させている政治家や官僚共なのである！我々、ギャラルホルンは独自に行った内偵によって到底許す事が出来ない幾多もの不正や汚職を明らかにした。今日、我々はそれを白日の下へとさらす！』



朝6時に行われたこのテレビ放送は夜が明けたばかりの日本全国を大混乱へと叩き込んだ。

ただでさえ、一般の国民は昨日から殆どのテレビ番組が映らなく

なった事に困惑し何が起きているのかも分かっていなかったのに、朝起きて、テレビを点けてみたら革命だ。

一般国民は慌てふためき、近隣の警察署や役場に押しかけた。

この混乱で警察や自衛隊も多かれ少なかれ人員を割く事になってしまった。

今思えばわざわざ事件発生から朝まで待つて犯行声明を出して来たのは、東京を包囲する人員を少しでも少なくしようというお兄ちゃんの策略だったのではないかと思う。

だが、この放送の問題は別の所にも届いていた。

このテレビ放送では国会議員や役人の不正や汚職の実態を放送した。

中には警察関係者や自衛隊の物までもが僅かに含まれており、これを見た自衛隊の強行派は焦った。

これ以上、ヤツラにテレビを使わせて自分達の情報を流させるわけには行かないと考えたのだ。

そう考えた自衛隊の強行派の行動は早かった。

「なんだと!?!」

刀剣類管理局の司令室に獅童真希の驚いた声が響いた。

「それは本当ですよ!?!」

獅童真希に続くように此花寿々花も声を上げる。

その声が向けられているのは先ほど司令室に駆け込んできた男性職員だ。

「は、はい。間違いありません!陸上自衛隊は先ほど輸送ヘリ部隊を使った大規模なヘリボーンを実行すると一方的に通知してきました!」

「なんてことですよ……紫様があれ程、下手な行動は慎むようにと言っておられましたのに……」

「恐らくあの放送が彼らにとって、かなりまずい内容だったんだろう……」

「とにかく紫様に報告ですわね……紫様は？」

「紫様は現在、お勤め中です」

皐月夜見が此花寿々花の質問に答える。

「そうですね……でしたら夜見さん、お勤め中の所、申し訳ありませんが紫様を呼んで着てくださいますか？」

「分かりました」

そう言うと皐月夜見は司令室を出て行った。

◇

事件後に発表された、このヘリボン作戦に参加し生還した自衛隊員の体験談をまとめた本には、この様な内容の出来事が書かれている。

その日、作戦決行が言い渡されたその日、3月2日の午前6時半。

その日の関東の天気はこれから挑む始めての実戦への不安を表すように、空はどんよりと暗く厚い雲で曇っていた。

ただ、天気予報では午後には晴れるそうだった。

そんな天気の中、東京都八王子市のとある小学校の校庭の仮設ヘリポートでは陸上自衛隊・東部方面航空隊、第4対戦車ヘリコプター隊に所属する彼、大山照幸は校庭に停まっている自分の愛機、AH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターの横で空の雲を見つめていた。

彼、大山照幸はほんの1年半前にAH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターのパイロットになったばかりの36歳の男である。

彼はどんよりと曇った空をまるで自分の今の心のようにだと思っ

見つめていた。

するとそんな彼の元に自衛官が近寄ってくる。

「パイロットの大山照幸3佐ですね？」

「あっはい、そうです。自分が大山です」

「先ほど、作戦本部より予定通り作戦は決行するとのことのお達しがありました！作戦決行は午前7時丁度です！」

連絡してきたその隊員によって彼は作戦が決行される事を知った。

まあ、テレビであんな事を大々的に暴露されてはいつ自分達の下へも被害が及ぶか分からないから、さっさと決着をつけてしまおうという上の判断なのだろうと決行の知らせを聞いた瞬間、彼はすぐにそう思った。

恐らく彼以外にも少なからずの自衛隊員が、そう思っているだろう。

彼は知らせを受けてすぐにAH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターのコックピットに乗り込んだ。

出撃の指示があるまでコックピットで待つのだ。

現在、彼の乗るAH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターにはハイドラ70ロケット弾を装填したM261発射ポッドを二基、ガトリング砲1基、それに加えて対空ミサイルを計8発、搭載している。

普通、AH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターには対空攻撃能力は無いのだが、日本では空を飛ぶ荒魂に対抗する為に倒せないにしても荒魂を牽制する為にAH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターを改良して対空ミサイルを搭載できるようにしているのだ。

そして、彼の乗る機体はいつでも飛びたてる状態になっていた。

あとは出撃の指示があり次第、彼が操縦桿を引けば彼のAH-1Sコブラ対戦車ヘリコプターは飛び立つことが出来るのだ。

すると、コックピットの中で一足先に機体に入り込んでいた攻撃手の男、伊藤純一が操縦席に座った彼に話しかけた。

「お、どうだった？」

「作戦は決行だとき。時間は午前7時丁度だ」

「マジか」

「ああ、マジだ。まあ、あんなもんがテレビで流れたらそりやこうなるわな」

「お偉いさんも相当焦ってるに見えるなあ。でも、どっちにしろこれが俺達の初めての实戦ってわけか……」

「まあな……はあ」

彼は操縦席で計器を操作しながらため息をつく。

「どうした？」

伊藤純一は首を傾げた。

「いや……この作戦、成功するのかなと面ってな」

「ん？そりや成功するだろ」

「なんでそう言えるんだ？」

「だってそりやあーよ、こちとら今回の事件の為にかなりのへりを用意してんだぜ？攻撃へりだけでも、四十機はいるし輸送へりも同じくらいいるじゃんか。しかも空だけじゃなくて陸からも同時に23区に突入だし東京湾には海自がイージス艦までもつてくんだぜ？一方の相手のなんだつけ、えーつとギャ……ギャラ……」

「ギャラルホルン」

「そう！一方そのギャラルホルンとか言う二二六事件の真似事みたいな事やってる連中の戦力はCGSモビルワーカーとか言う装甲車か対空戦車に毛が生えた程度の装備をいくらか持つてるだけだろ？俺達、対戦車へり部隊を相手じゃ勝ち目無いって。ま、気を楽にしていこうぜ？」

「はあ……まったくお前はいつも能天気だよな」

「へっそれが俺のとりえだからな！」

「ふつまあ違いはないか……つと、準備、準備と」

彼は機内の時計を見る。

時刻は6時48分。

出撃まであと12分だ。

午前7時9分。

『こちら、中央集団。現在、部隊は府中市上空を飛行中。周囲に異常無し』

『こちら、左翼集団。現在、部隊は中央集団の左翼側の位置にて府中市上空を飛行中。同じく周囲に異常なし』

『こちら、右翼集団。現在、部隊は中央集団の右翼側の位置にて府中止上空を飛行中。同じく周囲に異常なし』

彼と相棒の伊藤純一が乗る愛機、AH-1Sコブラのコックピットには無線機を通じて隊長機から本部へと向けた通信の内容が流れていた。

ヘリのローター音が激しく鳴り響き通信からの声が聞こえる中、彼は操縦桿をしっかりと握り締め、窓の外やレーダーの反応に細心の注意を向けながらAH-1Sコブラを操縦していた。

今から僅か9分程前の午前7時。

彼を含めた自衛隊のヘリコプター部隊は予定通りに強襲作戦を実行する為に出撃した。

各飛行場や臨時ヘリポートから輸送ヘリや攻撃ヘリがほぼ同時に出撃し八王子上空で編隊を組み、今、これらの大部隊は市街地上空では恐らく初めてではないかと思うほどの大規模で東京の上空を革命謳うギャラルホルンが待ち受ける東京23区へと向けて前進していた。

今回のヘリコプター部隊の概要は極めてシンプルだ。

前衛に戦闘ヘリの部隊が付きその後方に輸送ヘリ部隊つくという内容だ。

彼の攻撃ヘリは中央の集団の左側担当だ。

そして地上からは戦車や装甲車を含めた自衛隊の部隊がヘリコプター部隊の後に続くように前進する。

その兵力はもはやギャラルホルンの総兵力を遥かに超える。

勝利は間違いない。

誰もがそう考えていた。

しかし……。

『ん？あれはなんだ？』

誰かが無線でそう呟いた。

『どうした6番機。何か見えたか？』

『は、はい……当機の前方に何か光るものが……』

その呟きは彼と同じ中央集団に属する攻撃ヘリからの通信だった。

その呟きを放った6番機は中央集団の中央のヘリだ。

「光るものだって……？」

彼は自分と同じ中央集団からの通信内容に機体の前方を凝視した。

視界にはただひたすら眼下の街と灰色の厚い曇り空がただ広がっている。

「レーダーにはなんに反応も……っ!？」

すると丁度、その時だった。

彼は機体前方部にそれを見つけたのだ。

ついさっきまでは明らかに無かったはずのそれを。

「なんだあれは……」

彼はそれがなんだか分からず呟いた。

遠くの方、前方の上空で何かが光って見えた。

それは反射光のようで何かが光っている。

『部隊前方に正体不明の飛行物体!!全機警戒せよ!!』

その存在に気がついた部隊の隊長が全部隊に警戒を命じる。

彼はもう一度レーダーを見る。

すると今度はさっきまで何も映っていなかったレーダーに反応が

弱いものの確実に何かの反応があった。

そして、その反応は空中で静止しているようで止まっている。

「おいおい！敵さんは航空機を持ってなかったんじゃないのかよ？」

伊藤純一が疑問の声を上げる。

「わからん……もしかしたら、航空自衛隊の基地を襲ったときにヘリか何かを奪ったのかも……」

「ヘリ？だがよ、ヘリにしてはレーダーの反応が小さすぎねえか？」

「とにかく！今は警戒だ！いつでも撃てるようにしておけ！」

「……あいよ」

伊藤純一は対空ミサイルをいつでも発射できるようにしておく。すると、その時だった。

『正体不明の飛行物体！当部隊へと向けて速度を上げて突っ込んできます！』

正体不明の飛行物体は中央集団のど真ん中へと向かって急激に速度を上げて突っ込んできた。

レーダーを見れば正体不明の飛行物体を示す点がどんどん中央集団へと接近しているのが嫌でも分かった。

彼はこの尋常ではない速度を見てミサイルかもしれないと思った。

『全攻撃ヘリに通達！対空ミサイルを有している機体は正体不明の飛行物体を撃墜せよ！』

隊長機より指示が入る。

「よし……行くぞ伊藤」

「おうよ」

そう言うと彼は操縦桿を操作して攻撃ヘリを中央集団の前列へと移動させた。

他の攻撃ヘリも自分のポジションへとつく。

今頃、伊藤純一は、対空ミサイルの照準を正体不明の飛行物体へと合わせている事だろう。

そして、命令は下った。

『全機、攻撃開始！撃て!!』

「対空ミサイル発射!!」

隊長機からの指示が聞こえた瞬間、伊藤純一は対空ミサイルの発射スイッチを押した。

攻撃ヘリの対空ミサイルの筒からミサイルが二発放たれる。

それは周りの自分達と同じ対空ミサイルを有した攻撃ヘリも同じで一齐に攻撃した。

発射された数発の対空ミサイルが音速で目標へと接近していく。

そしてレーダーにもその様子は捉えられた。

あと少しで命中する。

あと少し……あと少し……。

しかし、結果は予想は遥かに超えるものだった。

「な、なんだあれは?！」

正体不明の飛行物体は数発にも及ぶ対空ミサイルを異常な俊敏な動きを見せてミサイルを着弾寸前で全弾回避した。

遠くなのに回避したと分かったのはレーダーのミサイルが目標を通り過ぎた事と、遠くに見えるその物体が青い光の尾を発しながら縦横無尽に空を駆けたからだ。

そしてその物体はそのまま異常な速度で中央集団へと向かってきた。

この出来事に中央集団はパニックになった。

『な、なんなんだあの物体は!?!』

『ミサイルじゃないぞ?!』

『まさか戦闘機!?!』

レーダーの点が中央集団に見る見るうちに近づいていく。

それは視界の方も同じでさっきまでは光っている点にしか見えなかった物が段々その正体を現してきていた。

「ロボット……?！」

攻撃ヘリの望遠カメラがついにその姿を捕らえた。

望遠カメラの映像には白いロボットが映しだされていた。

まるで子供の時に見たロボットアニメに登場するようなロボットを小さくしたようなロボットだった。

彼がロボットの姿に啞然としているとまた通信が入った。

『ぜ、全機! 機銃、対空ミサイルの使用は問わん! 前方のロボットに対して攻撃を開始せよ!!』

隊長機からの焦った声が聞こえる。

するとその通信を皮切りに一斉に攻撃ヘリによる攻撃が始まった。

対空ミサイルを積んでいる攻撃ヘリはミサイルを発射したりその他の機体は機銃をロボットへと向けて乱射する。

しかし、全ては遅すぎた。

ドンという爆発音が発しられた。

こちらに接近してきていたロボットが全ての攻撃をかわして中央

集団へと突っ込んで着たのだ。

そして突っ込んだ瞬間に中央集団の中央のへりの集団が一斉に爆発する。

彼は何が起こっているのか全く理解できなかった。

彼はロボットを探そうとコックピットの外を見回す。

すると、ロボットはいつの間にか中央集団の上空に居た。

そしてそのまま、急降下を始めたかと思うと青い火の様な尾を背中
の翼の様なものから出しながら再び中央集団へと突っ込んでくる。

そしてそれは、彼の攻撃へりの隣を飛んでいたへりにも及んだ。

そのへりは一瞬の間にへりの後部を分断されバランスを崩して墜
落していった。

だが、彼はその時、何が起きたのかを理解した。

「け、剣……？」

彼が見たのは黄金の剣だった。

二刀の黄金色の剣を白いロボットは両手で持って、高速で移動しな
がらへりを切り裂いていたのだ。

それだけではない。

へりの回転翼を黄金の剣で切り裂きへりのバランスを一気に崩し
て撃墜したり、コックピットを潰したり、少し離れたへりに対して黄
金の剣を投擲して突き刺し撃墜したり、機体を切り裂いたりして次々
とへりを落としてしまったのだ。

「く、くそーなんなんだよコイツは!」

伊藤純一が叫ぶ。

伊藤純一の操作でガトリング砲が火を噴く。

しかし、当たらない。

白いロボットは中央集団の前方を駆け抜け抜け一度集団から離れてか
らU字を描くように再び中央集団へと向かってきた。

そして、今度の進路は彼と伊藤純一が乗る攻撃へりだった。

伊藤純一がやられまいとガトリング砲やミサイルを連続発射する。

彼はその光景を見ながら、もうダメだと思った。

なぜなら、そのロボットの二つの赤い瞳が光を放ち、獲物を狩らん

とする絶対的な強者の姿が攻撃ヘリのすぐそこまで着ていたのだから。

彼は目を瞑った。

「う、うわあああああああああああああああ!!!」

次の瞬間、彼と伊藤純一が乗る攻撃ヘリに強い衝撃が走った。

ガラスが割れる音と何かが潰れる音が彼の耳に響く。

そして、その次には強烈な浮遊感だ。

彼は死んだと思った。

だが彼は死んではいなかった。

彼が次に目を開くと、彼の視界にはボロボロになったコックピット。

原型を留めないほどに完全につぶれ赤い何かが大量に付着している伊藤純一の席だった。

彼の目の前に伊藤純一はいない。

彼は周囲を見回した。

割れたコックピットの窓の外には、市街地が広がっていた。

「うっ……ん……落ちた、のか……」

彼の攻撃ヘリは市街地に墜落していた。

彼がそれを認識した丁度、その時、上空の方から連鎖的に爆発音がした。

「……」

彼は空を見上げる。

すると、彼の頭上の空ではあの白いロボットが青い光の尾を引きながら高速の速度で大空を駆け巡り、その青い光の線上のヘリコプターが次々と爆発していった。

自衛隊が誇るヘリコプターが群がまるで七面鳥撃ちのように次々と無残な姿で墜落していった。

彼はその様子を見ながらこう呟いた。

「……………悪魔だ」と。



「なんだ……これは……」

「化物だ……」

私を含めたその場にいた全ての人々がそのテレビ中継に釘づけとなった。

テレビ画面を見るほとんどの者がその映像に戦慄し刀剣類管理局の司令室の全ての職員が呆然とその場に立ち尽くした。

その戦慄の生放送はつい先ほど突然、始まった。

生放送の始まりは、ギヤラルホルンの兵士から脅されたと思われる国民的ニュースキャスターがギヤラルホルンからの緊急生中継ですと言つて始まった。

ニュースキャスターは最初こう言った。

『え、えー……ぎゃ、ギヤラルホルンから、全国民に向けた緊急の生放送があるようです。えー、現場からの生放送の前にギヤラルホルンからの声明文を読みます。先に行つた、我々の忠告は残念ながらこの国の愚かな政治家に従う自衛隊には届かなかつた。その為、我々、ギヤラルホルンは大変遺憾ながら、我々がギヤラルホルンたりえる正義の絶対的な力によって正義の鉄槌を下すことにした』

中継の映像は自衛隊の作戦開始時刻からほんの僅かな時間しか経っていないかつた時に突然、テレビに映し出された。

現場からの中継で最初に映つたのは遠くからやって来る自衛隊のヘリコプターの大集団。

間違いなく出撃した自衛隊のヘリコプター部隊だ。

そして、その次に、それを待ち構える様に空を静止する白いロボットが映し出された。

そのロボットは両手に金色の剣を持ったまるでロボットアニメに出てきそうな形のロボットだった。

「あれは……バエル？」

私はそのロボットに見た瞬間そう呟いた。

見覚えがあり映像を見た瞬間、すぐにあの書類の図に書いてあったロボットの事を思い出した。

それは私だけではなく、獅童真希も此花寿々花も臯月夜見も、もちろん紫様も気づいた様子だった。

テレビに映し出されたそのロボットは青いジェットを背中ofブースターらしきものから放ち飛んでいる。

すると、しばらくしてそのロボットは突然静止状態から急加速しそのまま自衛隊のヘリコプター部隊に突っ込んでいった。

そのロボットが通った場所がブースターの青い光で尾を引く。

そしてその進路にあった自衛隊のヘリコプターは瞬く間にそのロボットに撃墜されていた。

まさにその光景は蹂躪の二文字が似合うものだった。

そしてそれから1分も絶たない間に映像に映し出されていた戦闘は終結した。

「ふっ……まさか、ここまでの代物だったとはな」

紫様が映像を見ながら不敵な笑みを浮かべる。

その戦闘は誰が見ても明らか結果だった。

テレビに映った空には白いロボット……ガンダムバエルが悠々と飛んでいるのみであり、その周囲の空には鳥一羽、存在しなかったのだ。

この映像でこの司令室の職員の殆どが全ての職員が呆然とその場に立ち尽くす状況になったというわけだ。

そして、各々の面々が様々な気持ちでその映像を見ている中、私はその映像に恐らくただ一人とり憑かれていた。

私は口にくわえていたポツキーを落とした。

「結芽？」

私の異変に気がついたのか獅童真希が私に声をかけてきた。

だが私は、それには反応しなかった。

だが、私は頭の中で歓喜していた。

なぜなら、あのバエルの戦いの動きを見てある事を直感的に感じたのだ。

「もしかして……お兄ちゃん？」

私は小さく呟いた。



「きやつ!？」

「ふっ……これで今日の試合は一回引き分け九回がお兄ちゃんの勝ちだね」

「むうー!!お兄ちゃん強すぎ!また勝てなかったー!」

「まあまあ、昨日までは引き分けもなかった事を考えればお兄ちゃんが結芽に超えられるのも時間の問題だよ」

私が剣術を始めたばかりの頃、私はお兄ちゃんによく家の道場で剣術を教えてもらった事がある。

私の剣術の流派は天然理心流。

一方でお兄ちゃんは二刀流の剣術を使っていた。

ただ、お兄ちゃんの剣術は日本の剣術ではなく西洋剣術のとある流派のものだった。

道場でのお兄ちゃんとの練習は日本の剣術流派と西洋剣術流派のぶつかり合い。

だから、当時の私にとってお兄ちゃんとの剣術の練習は本当にいい練習となった。

日本の流派にはない剣の動き方。

当時の私は同じ年や年上の刀使達と試合を行い、その殆どに勝利を収めていた。

しかし、それでもお兄ちゃんとの試合では私はなかなか勝てなかった。

だから、私はお兄ちゃんの剣術を調べてお兄ちゃんに勝とうと努力していた。

結局、私はお兄ちゃんに1勝するまでで病気で倒れちゃったけど……。

でも、私はお兄ちゃんとの練習のおかげで脳裏にお兄ちゃんの剣術の動きを焼き付ける事ができた。

だから、私は分かったのだ。

バエルが空を飛翔し自衛隊のヘリコプター部隊を薙ぎ払うその姿を見て、その動きを見て私は直感的に感じたのだ。

あれに乗っているのは……お兄ちゃんではないのかと……。

そう思ったのだ。



恐らく日本史上もつとも衝撃的な生放送が流され映像を見た日本全体がさらなる戦慄と困惑に包まれたその後、暫くの間は、日本中の役所には今流れた映像が本物なのかという問い合わせが殺到した。

しかも、それだけに混乱はとどまらず状況はどんどん悪いほうへと変わるばかりであり東京に近い住民が一刻も早く東京に近い場所から逃げだそうとするという動きも起こった。

特に東京の府中に近い町では自衛隊のヘリが墜落した影響で発生した爆発音や煙などを見たり聞いたりしていた為、その地域のパニックはかなり深刻だった。

こうした大混乱の中、結局、自衛隊は作戦の要であったヘリ部隊がほぼ壊滅した事を理由に、地上部隊の全てを後退させた。

この作戦には海上自衛隊のイージス艦も航空部隊、地上部隊の攻撃に合わせてミサイル攻撃を行う予定だったが、作戦が失敗した事を受けて海上自衛隊も護衛艦を退かせた。

こうしてギャラルホルンに対する自衛隊の反撃作戦は事実上、失敗したのだ。

その後、短時間の間に起こった事を端的に思い出すと、自衛隊は対地ミサイルを東京から離れた場所から撃つなどしてギャラルホルンに損害を与えようとした。

それだけではなく航空自衛隊の戦闘機も出撃し爆撃をしようとしたという。

しかし、結果は全て失敗したのだ。

あのロボット、ガンダム・バエルによって……。

そして、その後のギャラルホルンの声明はこうだった。

正義の鉄槌は下されたと。

そのあとこうも発表した。

全ての地方自治体、それに属する行政機関は今後、ギャラルホルンの指示に従い警察、陸上自衛隊、航空自衛隊、海上自衛隊などの全ての部隊も武装解除しギャラルホルンの指示に従うようにと。

まさにそれは最後通牒だった。



3月2日の午前8時半頃。

ギャラルホルンによって占領された東京23区の霞ヶ関の防衛省の庁舎の上層階にある会議室ではギャラルホルンに捕まった自衛隊幕僚や警察庁長官、そして、事件の日に偶然東京の警察庁に行っていた伍箇伝の鎌府女学院の学長、高津雪那もあつめられていた。

この会合の存在は事件後に明らかになった出来事である。

なぜ、この様な事が分かったのか。

それは鎌府女学院の学長、高津雪那が持ち込んだボイスレコーダーのその場にいた者達の証言によって分かったからである。

その内容はこうだ。

「こんな所に我々を集めてどういうつもりだ！マクギリス・ファリド！」

「高津学長、大きい声を出さないで頂きたい。今からその件についての話をするのです」

「おい！お前達は何も言わないのか！」

高津学長が席から立ち上がり机を挟んで向こう側の席に座る自衛隊の幕僚や警察庁長官を指差す。

「高津学長」

マクギリスがそう言うのと後ろに控えていたギャラルホルンの兵士が高津学長の肩に手をのせた。

「席におつきください」

「くっ……いいわ。話を聞いてあげましょう」

高津学長は肩に乗せられた手を振りほどくと席に着く。

「では、落ち着いた所で今後の話をしましょう。まず、本日私があなた方に集まって頂いたのは、我々、ギャラルホルンの名の下に日本国を再編する為の手伝いをあなた方にして頂きたいのです」

「なっ……」

マクギリスの言葉に自衛隊の幕僚や警察庁長官は啞然とする。

一方で高津学長はそれを鼻で笑った。

「ふんっ何を言い出すかと思えばマクギリス・ファリド！なにを馬鹿な事を。たかが反逆者風情に我々が手を貸すと思ったか！」

「確かにただの反逆者ならばそうでしょう。しかし、あなた方もその目でご覧になったはずだ。私が操るバエルの力の片鱗を」

「脅しというわけか」

「いいえ、これは脅しではない。あのバエルは我らギャラルホルンの科学技術の粋を結して作られた物です。高津学長はご存知ではない

とは思いますが、そちらのお二方は違うのでは？防衛省の制服組トップ、外山統合幕僚長。警察庁長官、大山坂城長官」

マクギリスはそう言いながら薄っすらと笑みを浮かべて二人を見る。

その様子に高津学長は違和感を覚えた。

「まさか……さつきから静かにしてると思ったら、まさか貴様ら、この反逆者とながらあったのか！」

「……………」

「……………」

高津学長の言葉に防衛省の制服組トップ、外山統合幕僚長と警察庁の大山坂城長官は深刻そうな顔で俯く。

「我々の計画に協力して下さった、あなた方ならその意味が良く分かるはずだ。バエルはその玉座に私が腰を掛けることを許した。これも紛れもない事実だ」

「ぐっ……………」

外山統合幕僚長と大山坂城長官は苦い表情をする。

「貴様さつきから何を意味の分からない事を言って……………」

高津学長はマクギリスが二人に対して話している内容の意味が全く理解できず、疑問の声を上げる。

すると、外山統合幕僚長が閉じていた重そうな口を開いた。

「マクギリス・ファリド准将……確かに私達はあなたの計画に賛同し協力しました。しかし、今回の行動はあまりにも独善的かつ性急ではありませんかな？我々に相談もなく……それに、そもそも本来の計画では計画の始動は5年後だったはず……それにバエルは象徴的な存在で留めておくと仰っていたではありませんか？」

「当初の計画ではそうでした。しかし、状況は変わったのです。我々が想定していたよりも折神家の力はここ数年で強大になりました。今やらなければ我々には失敗の道しかなかったのです」

「だ、だが、例えそうだとしても、個人がバエルを起動させるなどと……………」

「そうだ！バエルはAIによる自動操縦で動かす筈だったはずだ！」

大山坂城長官が突然声を荒げてマクギリスを指差す。

「確かにバエルの当初案ではAIによる操縦が決定していました。しかし、残念ながらバエルはAIによる自動操縦を受け付けなかったのです」

「な、なんだと?! そんな事が……」

「そんな事が現実起こったのです大山坂城長官。そもそも、バエルの技術は刀使用のS装備技術を発展させたものです。そのような機体が我々の予想すら超える結果をもたらすのは仕方ないのではないのでしょうか? どうせでしたら証拠の資料を後ほど部下に届けさせましょう。ぜひ、ご自身の目でご覧になって確かめるといい」

「馬鹿な……」

大山坂城長官は座席に力なく深く座り込んだ。

「しかし、結果はどうであれ、私がバエルを起動させた以上、あなた方は私に従わなければならない。それを拒否すればアグニカ・カイエル、ひいては新生日本国や刀使、ギャラルホルンという組織と国家そのものを否定することになる」

「し、しかし……このようなクーデターでは国民は……」

「ご安心ください。バエルを手に入れた私はそのような些末事で断罪される身ではない。それに、すでに彼の国も我々の技術提供を条件に革命には口を出さないと云っている」

「……………」

「……………」

「そもそも、我々が作り出したバエルはギャラルホルンの象徴たるアグニカ・カイエルが遙か昔に着ていた神聖なる鎧、バエルを我々の現代の科学技術で再現した物……そのような神聖なものにAIを搭載しようなどという考えが愚かだったのです」

マクギリスがそう言うのと外山統合幕僚長と大山坂城長官は言葉を失ったように黙り込んだ。

マクギリスは二人が静かになったところを見てその場を見回す。

「では、本題に移りましょう。あなた方二人には、現在抵抗を続けている警察と自衛隊への説得をしていたいただきたいのです。ギャラルホル

ンに従うようにと。あなた方の言葉ならば彼らも納得せざるをえないでしょう。それにあなた方の「ご友人」の戦力も念のためお貸し頂きたい。そして、高津学長」

「……なんだ？」

「今回、我々が行動を起こした時に偶然にもあなたはこの街にいらつしやった。私はこの出会いをただの偶然ではなく運命であると思っ
ています」

「それはこの私を馬鹿にしているのか？まんまと貴様の様な反逆者に捕まった私を！」

「そういうわけではない。先にも言ったように私はこの出会いを運命だと思っている。18年前の相模湾岸大災厄にてまさに英雄のご活躍された高津学長にお会いできたのですから。そこで私はあなたにも我々、ギャラルホルンに協力していただきたいと思っているのです」

「協力ですって？」

「ええ。あなたにはぜひ、ギャラルホルンに入って頂きたい。そうすれば、我々が主導する新生日本国では、あなたに刀剣類管理局の局長をお任せしましょう。その為にまず、あなたには折神家を説得し、折神家が保有する御刀をすべて、私に差し出していただく」

「なっ!?この私に紫様を裏切れというつもりか!？」

「悪い話では無いかと思いますか……」

「そんな馬鹿な話は断る！私を見くびるな!!」

「そうですか……それは残念です。では、あなた方はどうしますか？」

マクギリスは断ると言った高津学長に意外そうな表情もひとつ浮かべずにそのまま、外山統合幕僚長と大山坂城長官に質問をふった。

「……………」

「……………」

二人は暫くの間沈黙する。

そして、しばらくすると、外山統合幕僚長が口を開いた。

「マクギリス・ファリド准将……我々はバエルに敵対することはできない。しかし君の言葉に従うこともできない」

「わ、私も外山統合幕僚長の意見に賛同する……我々は今回あくまで中立の立場を取らせてもらおう」

「……どうやら、あなた方は状況を理解できていないようだ。今あなたは今回はと仰いましたが、この我々の計画が失敗すれば我々にもあなた方にも未来はないのですよ」

「とにかく……我々はバエルに背くつもりはない。だからこそ政府側にも手を貸すつもりはない」

「ふふふ、滑稽だなマクギリス！我々だけでなくお仲間にも嫌われてるとはな！」

外山統合幕僚長の協力できないという言葉に高津学長が笑い出す。

その一方でマクギリスは外山統合幕僚長が拒否をした事に不快感を覚えている様だった。

「バエルを持つ私の言葉に背くとは……」

マクギリスは明らかに不機嫌そうに呟く。

だが、それをよそに、高津学長はさらに言葉を続けた。

「ふつ、だが、それにしても面白い事が分かったな。外山統合幕僚長、大山坂城長官。まさか貴様らが反逆者に協力……いや、反逆者と同類だったとはな」

「……………」

「……………」

高津学長の鋭い言葉に外山統合幕僚長と大山坂城長官は視線を背ける。

「このことは全てが解決した後で、必ずや断罪されることになるぞ？覚えておくといいわ！」

高津学長が録音した内容はここで途切れている。



午後1時頃、刀剣類管理局の司令室に設置された警察と自衛隊の合同作戦本部。

そこでは紫様、それに加えて自衛隊のこの事件を担当している臨時の司令官が2人が他の司令室職員たちと共に緊張のテレビ電話会談を行っていた。

会議の主役はもちろん紫様と自衛隊の司令官の二人だ。

その一方で私達、折神家親衛隊四人は紫様の背後に控えていた。

そしてテレビ電話会談という事はもう一人、電波の向こう側に居る会談の主役が存在する。

会談の相手はもちろん、今事件を引き起こしているギャラルホルンだ。

トップ級の会談という事もあって向こうもトップが応じている。

そのトップというのは、やはり私のお兄ちゃんだ。

お兄ちゃんの姿は司令室のモニターにでかでかと映され、お兄ちゃんの着る派手なデザインの制服や、金髪の髪の毛、翠色の瞳、がくつきりと映し出されていた。

『……では、あなた方はあくまで我々の指示には従えないという事ですか?』

「当然だ!!そのような指示に従える訳がないだろう!!」

「そうだ!貴様の様な卑怯なテロリストなどに従えるものか!!」

『あなた方も、バエルの力を見たはずですが……それでも私に逆らうと?』

「くっ……」

『既にお気づきかもしれませんが、同盟国は私についた。つまり、あなた方の戦力は、あくまであなた方だけだ』

お兄ちゃんの高圧的な態度に自衛隊の司令官も言葉を詰まらせる。

その場面で私の隣に立っていた獅童真希、此花 寿々花、皐月夜見が小声で話していた。

「同盟国が私に付いたとはどういう意味だ?」

「恐らく……アメリカの事では?夜見さん、何か聞いていますか?」

「いえ、私は直接聞いてはいません。ですが、会談前に自衛隊の方々がアメリカが要請を断つたと話している所を聞きました」

「要請?」

「恐らく自衛隊はアメリカ軍へ今回の事件の対処に協力を求めたのではないのでしょうか。でも、頼みの綱に断れたという事でしようね。私もまだよく分かりませんが、恐らくあのバエルとかいうロボットの技術を狙っているのではないのでしょうか」

「なるほどな……」

すると、紫様がお兄ちゃんに向かって口を開いた。

「ふっ、貴様もすっかり俗物に成り下がったものだなマクギリス」

『紫様、あなたも私の指示に従う気はありませんか?』

「当然だ。愚か者に付き合うほど私も暇ではない」

『バエルを持つ私に背くとは……良いでしょう。では、我々ギャラルホルンの力を……バエルの力を見せてやろう』

ギャラルホルンによって行われた最後通牒を自衛隊や紫様は拒否した。

当然の事だとは思いますが、それから、数時間は何も起こらない不気味な時間が続いた。

しかし、事態は3月3日の夜7時頃。

私の誕生日当日に事態は急激に変化を迎えたのだ。

「その情報は確かなのか!?!」

獅童真希が司令室の職員に声を上げた。

それに対して司令室の職員は焦った様子で報告を続ける。

「はい!自衛隊の偵察衛星、並びに偵察に出していたドローンが東京23区を沿岸部沿いに神奈川県方面を移動中のギャラルホルンの大部隊を捉えました!」

「敵の目標は……」

獅童真希は少し考える。

そして、答えはすぐに出た。

「横須賀……いや、ここ鎌倉か！」

◇

端的に思い出すとこの時。

ギヤラルホルンは突如として東京を占拠していた部隊を二つに分けて進軍を開始した。

半分は東京に残りもう半分が鎌倉を目指して進軍した。

東京を包囲する自衛隊の部隊はこれと交戦。

しかし、この部隊にはお兄ちゃんが操るバエルがいて、自衛隊の包囲部隊は壊滅し突破。

ギヤラルホルンの部隊は進軍を続けた。

そして、私の誕生日、3月3日の午後7時頃。

鎌倉はギヤラルホルンによる猛攻を受けたのだ。

この時、鎌倉には刀剣類管理局の特別祭祀機動隊が全国から集められていて、さらに陸上自衛隊の部隊や近海にはギヤラルホルンが侵攻してくる前に横須賀より出港していた海上自衛隊の艦隊の一部部隊である護衛艦3隻が停泊していた。

陸上自衛隊は鎌倉外縁で戦車部隊を中心に防衛を行ったが戦車部隊はギヤラルホルンのモビルワーカーによる機動攻撃と上空からのバエルによる攻撃で突破されてしまった。

その後は航空自衛隊から戦闘機2機も出撃してバエルの撃墜に挑んだが、圧倒的な機動力をもつバエルに戦闘機は

落とされ、護衛艦による対空ミサイル攻撃も失敗し、そして午後8時頃、ギヤラルホルンは鎌倉の市街地に突入する事になったのだ。

特別祭祀機動隊や自衛隊とギヤラルホルンの部隊から発せられる銃声が交わる鎌倉市内。

この非常な事態に鎌府女学院の刀使も成績優秀者のみ戦闘に参加した。

もちろん学生も出撃しているのだから、私達、折神家親衛隊も出撃する。

そこで私は刀使の部隊と特別祭祀機動隊の部隊をそれぞれ1隊ずつ与えられ鎌倉市内に突入してきたギャラルホルン部隊の迎撃をする事になった。

そこで次々と現れるお兄ちゃんの配下の兵士達。

彼らは皆、黒い戦闘用のボディアーマーと頭部を覆うマスクをつけて完全のフル装備。

しかもモビルワーカーが何台も戦場に投入されていた。

でも、それでも私の敵ではなかった。

他の刀使達は荒魂ではない人を切ることに多少なりの抵抗を持っていたが、私はあまり気にしなかった。

事実、私は多くのギャラルホルンの兵士を切り捨てた。

でも、その時の私には焦りからくる苛立ちがあつたと思う。

自分の頭の上……鎌倉市の上空ではお兄ちゃんの乗るバエルが夜空ジグザグ模様の蒼い軌道を描いて高速で空を舞い、海や陸より放たれる何十発というミサイルを次々とかわし撃ち落としていく……。

この時、私の頭の中には、早くお兄ちゃんと戦いたい。

そして、勝って絶対に見返してやるんだ。

という考えしか頭になかった。

だから、お兄ちゃんがやられないか、ヒヤヒヤしていたのだ。

でも、状況は私のそんな心配など余所にギャラルホルンの有利と なっていった。

「燕様!!」

「ん?なに?私今、忙しいんだけど」

そう言いながら私は今しがた倒したギャラルホルン兵の体にとどめを刺す。

「本部からの緊急の入電です!」

「本部から?」

「はい！そ、それが……」

「なに？きつさと言ってよ」

「ほ……本部の最終防衛線が一部突破され賊軍の部隊が折紙家の敷地内に侵入したようです！それで、本部より燕様はすぐに本部施設の防衛に当たれと伝令が」

「はあ……こっちはお兄ちゃんの事で忙しいのに……もう……あつでも、本部に侵入されたって事は、もしかしたらお兄ちゃんも降りてくるかも……」

「あ、あの……燕様？」

伝令をした刀使が不安そうな表情を浮かべる。

「うん分かった。それじゃあ、ここの指揮はあなたに任せるね」

「ええ!?わ、私ですか!？」

「それじゃあ、あとよろしくー」

私はそう言うのと本部へと急いで向かったのだった。

午後9時半頃。

ギヤラルホルンの鎌倉市の中央部の部隊は刀剣類管理局が敷いた最終防衛線を突破。

一部のギヤラルホルン兵が刀剣類管理局の本部がある折紙家の敷地内へと侵入した。

私はこの部隊を迎撃するという目的の為に……いや、お兄ちゃんを倒すというただそれだけの目的の為にだけに折紙家の敷地内へと急いだ。

「ぐあっ!？」

「あ、あれは燕結芽!?例の親衛隊か!!」

「総員攻撃を集中せよ!!」

私は次々と放たれる銃撃を迅移でかわし、そのまま彼らにとっては

高速の速度で瞬時に切って行く。

「うわっ!？」

「こいつっ!？」

「……邪魔」

私は敵が体勢を整える前に一気に御刀でその体を切り捨てる。

すると、その時だった。

折神家の闘技場がある建物の方で青い閃光とともに爆発音がしたのだ。

私はすぐにそっちの方を振り向いた。

すると、丁度その時、自分の足元で倒れているギャラルホルンの兵士の無線機から声が流れてきた。

私はそれに気がつくとも無線機を拾い上げる。

『――総員聞いてくれ!こちらはライザ・エンザだ!今、ファリド准将
が折神家に突入した!我々の勝利は目前だ!これより我々も参る!
ファリド准将に続け!』

テレビで聞いた覚えのある声が無線機から聞こえた。

だが、私にとって重要な情報はそこではなく、さっきの爆発音はお兄ちゃんが降りてきた音だとはつきりした事だった。

私は無線機を強く握り締める。

「待っててねお兄ちゃん……私が倒すまで他のヤツに倒されちゃダメ
なんだから……」

私はそう呟くと爆発音がした方へと走っていった。

しかし、私はお兄ちゃんの所にはたどり着けなかったのだ。

お兄ちゃんがやってきた方へと向かった私を待っていたのはお兄ちゃんではなく……普通の色ではない青い色をしたCGSモビル
ワーカーだった。

『フアリド准将の邪魔はさせない!』

さつき無線機から聞こえたのと同じ声が青いCGSモバイルワーカーから聞こえてきた。

「もう・さつきから! なんなの!」

私はそれに対してここ数年で一番いらだった。

『私はライザ・エンザ! あなたは折神家親衛隊の燕結芽とお見受けする!』

「もうめんどくさい!」

私は早くお兄ちゃんの所へと行きたい一身から迅移を使ってCGSモバイルワーカーを攻撃した。

しかし、私の剣はその鋼鉄の巨体に防がれてしまう。

そして、攻撃を仕掛けてすぐにCGSモバイルワーカーは高速で移動をはじめた。

CGSモバイルワーカーは移動しながら私に向かって本来は荒魂用の武装である30mmマシンガンの弾を連射してくる。

『女性に銃を向けるのは気が引けるが……ここを通すわけには行かない!』

「ふざけないでよっ! 私は……お兄ちゃんと決着をつけなきゃいけないのに!!」

結論から言つてCGSモバイルワーカーとの戦いは私が勝利だった。

装甲には刀は入らないが機械の間接部分について行動不能にしたのだ。

私は青いCGSモバイルワーカーを停止させた後、すぐにまたお兄ちゃんの元へと向かったが、そこで待っていたのは、私を待ち構えるお兄ちゃんのバエル……ではなく、東の空へと飛び去っていくお兄ちゃんのバエルと広場で二本の御刀を持って立っている紫様だけだった。

広場を見ればどうやら激しい戦闘があったようで所々の地面が大

きくえぐれていた。

紫様とお兄ちゃんがここで戦っていたのだ。

どれだけ激しかったかはこの現場が物語っている。

しかし、それに私は参加できなかった。

つまり、私は間に合わなかったのだ。

「くっそっ！」

◇

その後、鎌倉市での戦闘には大きな変化が起きた。

ギャラルホルンの部隊が急に撤退を始めたのだ。

聞けばお兄ちゃんが去っていったのもそれが関係しているという。

私は正直、意味が分からなかったが、司令室に戻った時、その謎は一気に解けたのだ。

司令室に私達、折神家親衛隊が全員戻ると紫様は事の次第を私達に説明してくれた。

その話によると紫様は密かに綾小路武芸学舎に連絡を取り、刀使の部隊を編成してお兄ちゃんが鎌倉市へと侵攻してきたタイミングを狙って自衛隊の特殊部隊も含めた部隊を東京23区へと突入させて人質になっていた国会議員を国会議事堂地下の秘密通路から脱出させていたのだ。

いわば奇襲だ。

その為、東京のギャラルホルンは混乱。

しかも、紫様は自衛隊とも協力してその作戦とほぼ同時に地上からの戦力投入による東京23区への侵攻作戦を実施したのだ。

恐らく、鎌倉市の撤退が行われたのはバエルが居ない東京の状況が思わしくなくなってしまうからだと言うのは考えるのにたいして時間を要しなかった。

まさに、非の打ち所も無い見事な作戦。

ギャラルホルンが二つの部隊に分かれた隙を見て特殊部隊を突入させて国会議員や政府の要人を救出する。

これは全て紫様の作戦の賜物だった。

あとでこれを聞いた時はその場に居た全員が驚き、紫様の作戦に感服したほどだ。

その後、この事件の解決まではまさに電撃的に進むことになる。

◇

午前2時には自衛隊と警察の特別祭祀機動隊は東京23区外縁へと集結。

私達も輸送ヘリですぐに鎌倉から東京の集結地点へと向う事となり、向かった。

集結地点では作戦の説明がされて私達親衛隊には再び鎌倉の様に一人一人に刀使と特別祭祀機動隊の一般隊員の混成部隊の指揮を命じられた。

作戦はこうだ。

自衛隊の戦車、装甲車を中心とした部隊と刀使が前衛としてギャラルホルンに占拠されている霞ヶ関周辺へと侵攻し空からも航空自衛隊の戦闘機部隊を使ってバエルを足止めする作戦だ。

この作戦は午前2時半には開始された。

当初はギャラルホルンに敗退した自衛隊だけど本格的な戦車部隊を投入したため、バエルの援護を受けられない火力に劣るギャラルホルンのCGSモビルワーカーは圧されていた。

私はこの時最前線で戦っていたけど、この時、私の焦りはピークに達していたと思う。

なぜなら、目に見えてギャラルホルンの部隊がやられていくのが私の目に見えたからだ。

勝敗は決したといっても良い。

正直言ってお兄ちゃんがいつやられてもおかしくはない状況だった。

だから私は空を飛び回るお兄ちゃんのバエルを見て焦ったのだ。でも戦いの終盤。

それでもお兄ちゃんは生き残っていた。

お兄ちゃんは地上に降りて、地上戦を戦っていた。

私は真直ぐにお兄ちゃんのほうへと向かった。

ようやく、ようやくお兄ちゃんと戦える。

そう思つて。

でも、私はまたしてもお兄ちゃんと戦う事はできなかった……。

私はお兄ちゃんの近くまではたどり着くことができたのだが、私の行く手をギャラルホルンの刀使が数名で塞いだのだ。

そして、お兄ちゃんは私ではなく紫様を相手に戦いをしていた。

「ふっ……力だけは一流だなマクギリス・ファリド」

『バエルの剣撃を受け止めたか……流星は折神家の当主だ』

お兄ちゃんのパエルと紫様の戦いは熾烈を極めていた。

紫様の身長は163cm、一方でバエルの方は3m以上だ。

しかも紫様が御刀と写シを使っているとはいえ生身なのに対してバエルは完全に機械だ。

先ほどからお兄ちゃんの剣が当たった地面は大きくえぐれている。

でも、紫様はそんなお兄ちゃんが操るバエルの明らかに重い剣撃をバエルと同じく二本の御刀で防いでいた。

「だが、力のみでは私には勝てんぞ」

『迅移か！』

「そうだ！だが、それだけではない!!」

『くっ!?!』

紫様は巨大なバエルに対して迅移をしかけ連撃をバエルに与える。

だが、バエルはその強靱な装甲でそれを防いだ。

「さすがに硬いな」

『バエルに逆らう愚か者が……』

「ふつだが硬いだけがとりえでは……」

『私のバエルを愚弄するか……ならば、見せてやろう！折神紫、純粹な力のみが成立させる真実の、世界を!!』

お兄ちゃんと紫様の戦いは熾烈を確かに極めた。

私が見た限り紫様をここまで本気で戦わせたのは今の所、お兄ちゃんくらいだろう。

しかし、それでも最終的に戦いに勝ったのは紫様だった。

お兄ちゃんのバエルは剣を振るう力こそ強かったが、紫様の剣術はそれを殆ど無効化した。

刀使は物理的には非常に大きい荒魂の突進を御刀の力を借りる事で剣撃のみでそれをとめる事が出来る。

紫様はそれを上手く利用してバエルとの戦いをした。

紫様は戦いの終盤、バエルの間接部分に剣撃を与える事でバエルに大きなダメージを与えた。

私がああ青いCGSモビルワーカーを倒したのと同じ要領だ。

お兄ちゃんは最後、左腕と右足が動かなくなった状態にまで追い込まれ、逃亡した。

しかし、お兄ちゃんが東の空へと飛び立ったあと、自衛隊が奪還した防衛省内のPAC-3を使ってお兄ちゃんを攻撃したのだ。

一方で私はギャラルホルンの数人の手練の刀使と戦っていて勝ちましたもの、お兄ちゃんを追って飛んでいくミサイルとビルの向こう側で大きな爆発がするのをただ見ているしかなかった。

「く……そっそがああああああああああああああああああああ
!!!」

事件後、警察はマクギリス・ファリドの死亡を発表した。



日本を震撼させたマクギリス・ファリド事件。

この事件は結局、ギャラルホルンの敗北によって幕を閉じた。

事件に関わったギャラルホルンの関係者は全員が逮捕されギャラルホルンも組織解体された。

一時はギャラルホルンによって、民衆からの社会的信用を失いかけた日本政府だったが、紫様率いる警察によって事件を早期に解決したことで、改めてその力を世界に示し、民衆からの社会的信用も刀使が中心となって回復した。

しかし、この一連の事件によるギャラルホルンによる汚職等の暴露によって事件当時の政権及び与野党を問わない殆どの国会議員や役人は失職もしくは白日の下に曝された汚職行為によって逮捕された。誰にも等しく権利を与えられる国。

マクギリス・ファリドの目指した理想の一端は奇くしくも紫様を中心とした刀使達の手によって成し遂げられようとしている。

と、当時のテレビのワイドショーでは事件後によく言っていた。

現実はそのなにごくはないけど……。

まあでも、あの事件からもう既に2年の月日がたった。

今ではギャラルホルンのクーデターがまるでなかったかのように日本はいつも通りの日常を送っている。

ちなみに、お兄ちゃんの前近だった石動カミーチエ、全国放送を行なったライザ・エンザは現在も逃亡中だという事だ。

事件後暫くは私もお兄ちゃんと一戦もできないままお兄ちゃんが死んだ事に激しい怒りと憤りを持っていたが、今ではなんとか吹っ切りもついた。

居ない物はないで割り切るしかない……。

私は最初の目的に戻るだけだ。
私という存在が居た証明を、強い刀使と戦って焼き付けるのだ。

でも、あれから2年の月日がたった今でも私には時々思い出すことがある。

それは最終決戦を行っていたあの日の夜明け頃に起きたある出来事の事だ。

決戦終盤、ギャラルホルンの敗北が確定した頃の霞ヶ関での戦闘中。

その頃のギャラルホルンの兵士達は明らかかな状況の悪化に私達でも分かるほどまでに、士気が低下していた。

一部の兵士達は刀使が目の前にたっただけで降伏をしてきたほどだ。

私達はこのままこの戦いはギャラルホルンの敗北で終わる。

そう、思っていたその時だった。

『まだ革命は終わっていない!!』

突如として上空から霞ヶ関全域に聞こえるほどの大音量で声が流れてきたのだ。

その声は明らかにお兄ちゃんのものだった。

多くの者が声のする方、つまりは上空を見上げた。

敵味方関係なくだ。

すると、そこにはバエルが空中で青白いブースターの炎を出しながらホバリングしていた。

『諸君らの気高い理想は決して絶やしてはならない! アグニカ・カイエルの意思は常に我々と共にある!!』

見るとギャラルホルンの陣営の方では一部の兵士がバエルを指差して見ている。

『ギャラルホルンの真理はここだ! 皆、バエルの元へ集え!!』

お兄ちゃんの乗るバエルが黄金の剣を高く掲げる。

すると、その瞬間、ギャラルホルンの陣営から大きな歓声が上がっ

た。

その時、ギャラルホルンの兵士が喋っていた内容は私が聞き取れた範囲でこうだ。

「バエルだー」

「アグニカ・カイエルの魂ツ!!」

「そうだ!ギャラルホルンの……刀使の正義は我々にある!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!!」

ギャラルホルンの兵士達はこれまで士気が下がりに下がった所から、お兄ちゃんの演説を境に突如として再び士気が異常に上がった。

霞ヶ関のあちこちでギャラルホルンの兵士達からの雄たけびがなり響く。

それは先ほどまで負けそうだった者達のものとは思えない物だった。

それに対して私の隣に居た紫様はこう呟いていた。

「ふっ……この戦況で今だ、ハーメルンの笛を吹き続けるか。マクギリス・ファリド」

私はこのお兄ちゃんの演説とギャラルホルンの兵士達の歓声の中で、ただ空を見上げてお兄ちゃんのバエルを睨みつけていた。

この時。

この時私はこう思ったのだ。

事件が終わった今なら正直に認める事ができる。

お兄ちゃんは……やっぱり、すごかったと。

正直、私にはこんな事はできない。

ここまで、人をひきつける事はできない。

私は黄金の剣を高く掲げるお兄ちゃんとの、長い長い距離を感じたのだ。



でも、さあ……。

確かにあの時、お兄ちゃんは死んだ。

というのなら、私はお兄ちゃんへの嫉妬という感情と怒りを押さえ込む事ができた。

でも……。

でも、その死んだはずのお兄ちゃんが、今も……。

あの事件から2年がたった今も実は死んでいなく、生きていたとしたら私は……。

「そんなの押さえ込めるわけないよねー。お兄ちゃん……」

あの事件から2年の月日が経ち、私が紫様に命じられた任務。

それは紫様に反旗を翻す舞草なる反逆者の集団の本拠地を壊滅させる事。

その、舞草の拠点の地下にあった大きな洞窟。

海に繋がり、大きな潜水艦が停まっているその洞窟の栈橋で私は出会ってしまったのだ。

「まさか……生きてたなんてね。2年ぶりだね、お兄ちゃん……」

お兄ちゃんが操るガンダム・バエルに。

衛藤可奈美胎動編 その者の太刀

マクギリス・ファリド事件から2年後。



「ふあああ……ちよつと早く目が覚めちゃった……」

まだ朝日が昇らず、空が薄暗い中、私は目が覚めた。

皆はまだぐっすり眠っていて、私ももう一度寝ようとしたが、寝付けそうにもなかった為、私はこっそりと布団から出てる事にした。

制服に着替えてから部屋を静かに出る。

私、衛藤可奈美は今、姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん達と一緒に折神紫に反抗する舞草っていう組織の隠れ里の神社にやって来ている。

ここに来て今日でもう2日目だ。

ここまで来るまでには色々な事があった。

大荒魂と化していた紫様……折神紫を倒そうとする姫和ちゃんと出会って助けて一緒に逃げたり、警察に追われたり、伊豆へ行ったら

今度は親衛隊に襲撃されたり……途中には薫ちゃん、エレンちゃん達に会って仲間にもなった。

その後は折神紫に反抗する舞草っていう組織の潜水艦に乗って伊豆から脱出した。

ちなみに潜水艦が出てきた時はかなり驚いた。

潜水艦をこの目で見たのは初めてだったし、それにそれが薫ちゃん、エレンちゃん達も入ってる舞草のだって知るともう驚きすぎてどう反応すればよいか分からなかった。

その後はこの舞草の隠れ里に来て、20年前の荒魂大討伐、相模湾岸大災厄の真実とかを聞いて、それに私と姫和ちゃんのお母さんが関わっているって事も初めて聞かされた。

でも、まあ、そんなこんだで色々あったけど私と姫和ちゃんは今日も無事に生きている。

これを姫和ちゃんの前で言うってと姫和ちゃんが怒るかも知れないけど……。

正直、仲間が大勢いるって知って少し安心する。

私と姫和ちゃんだけじゃない。

同じ目的を持っている人たちがこんなにも大勢いる。

そう考えると今までのたった二人で逃げていた事を思えばこれほど心強い事はないと私は思った。

「そう言えば……ここにきて2日目だけど、この神社、ちゃんと見てもらった事ないなあ……よし、それじゃあ、ちよつと散歩でもしようかな」

私はそう決めると、神社の中を散歩する為に歩みを進めた。

本当は御刀の朝稽古をしようと思ったけど、今日は午前に舞草の人たちが稽古をしてくれるって言うていたから、あまり体力を使つてはいけないと思い、朝稽古は今日はしないことにした。

せっかく舞草の人たちが稽古を付けてくれるんだから、その稽古には万全の体制で臨みたかった。

私は神社の通路を進む。

「へえ……何の部屋だろ？ 仏像がたくさん……あれ？ ここって神社だよね？」

この神社はすごく大きかった。

ここに初めて来たときも、大きい神社だなあと漠然的に思っていたのだが、改めてこうやって歩いてみるとその広さを実感する。

流石は舞草の本拠地だけあって神社の敷地の広さはかなりのものだ。

その敷地内に舞草の施設がいくつかあるという感じになっている。

私は神社の建物を一周したり途中に紫陽花の花が咲いている綺麗な庭を見つけては庭の遊歩道を歩いて散策をしたりした。

「わあ……すごく綺麗……これなんて花かな……こんなに綺麗なら皆も呼べばよかったかも……って、いやいやいや、流石にこんな朝早くに起こしたら迷惑だよ……あははー」

朝の時間は最初、何をしようかなと迷っていたが、思っていたよりも私の心にゆとりをくれた。

これまでの張り詰めていた感覚が少し和らいでいくのを感じる。

そうして私は朝の時間をゆっくりとリラックスして過ごしているうちに時間はどんどん過ぎていった。

そして、時間の流れはついに、先ほどまで日が昇っておらず薄明かりだけだった空に朝日の光をよぶ。

「あっ……朝日だ」

私は朝日が差し込んできた事に気がついて朝日の方を見た。

山の向こうから出てきた朝日が昇り神社の境内をまぶしく照らしていく。

「そろそろ、戻ろっかな……皆に心配かける訳にはいかないし」

私はそう呟くと神社の庭から神社の建物の方へと戻る道を歩いていった。

◇

皆が居る部屋に戻る道。

その途中の神社の廊下で私は人影を見つけた。

「神社の人？」

私が見たのはその人物が神社の一室の部屋に入っていく後姿だった。

「でも、外国人ぽかったしフリードマンさんの知り合いかな？」

その人物は男の人だった。

後姿だけだが、白いジャケットの様な服を上羽織って下には白いズボンをはいていた。

そしてその肌は白くて髪の毛の色も金髪だった。

私はその人物が入った部屋の前に差し掛かると、その部屋の障子戸が少しだけ開いている事に気がついた。

私は少しだけその人物に興味を抱いた。

なぜなら、ここに来てまだ2日目、正確には今日で3日目だが、エレンちゃんのお爺ちゃんであるフリードマンさん以外には外国人の姿は見なかったからだ。

そして、先ほどの人物は明らかに外国人の様に見えた。

私は、悪いとは思いつつも、好奇心には勝てずに部屋の中を覗いてしまった。

部屋の中は灯りがついておらず外から見るとは暗く、辛うじて畳である布団と、テーブルの上に置かれたノートパソコンが見えた。

しかし、さっきの人物が何処にいるかは分からない。

「うーん……よく見えないなあ……」

すると、私がそう小さく呟いたその瞬間。

何の前触れもなく私が覗いていた障子戸が開いた。

私は突然開いた障子戸にビックリし顔を上げた。

「えっ……っわ、わあ!? あっえっとすいません! え、えと、あ、アイム、ソーリー!」

私はとりあえず謝った。

なぜなら私の前には先ほどの外国人の男がいたからだ。

障子戸を開けたのは先ほどの彼だった。

私は数歩後ずさる。

絶対に怒られるとそう思った。

当然だ、他人の部屋をじろじろと覗いたのだから。だが、彼は私を見て意外な反応を示した。

「美濃関の制服……」

「え？」

その外国人は流暢な日本語で私を見てそう呟いた。

「あ、えつと……日本語……」

「大丈夫だよ。私の国籍はこう見えて日本国籍だ」

「え？てことは日本人ですか？」

「まあそうなるね」

彼は私を怒らなかつた。

それどころか、彼は私に対して笑みを浮かべた。

私は彼が怒らなかつた事から少し冷静になり、落ち着いて彼の方を見ることにした。

彼は男の人には正直うとい私から見てもかなりのイケメンの顔たちだった。

年齢は見る限りでは20代か30代の間くらい。

日本人にはない翠色の瞳をしていた。

私は彼の顔をじつと見る。

目が綺麗だったとか、イケメンだからとかそういう理由ではない。ただ、それ以上に私の心の中では引つかかる事があった。

「あの……どこかで会った事ありませんか？私、あなたの事どこかで見たことがある気がするんですけど……」

私は彼の顔をどこかで見たことがある気がしたのだ。

どこかは思い出せない。

でも、そこまで昔ではない頃に見た事がある気がした。

「いや……私と君に面識はないはずだよ」

しかし、彼はそれを否定する。

「そうですか……ってあ、えつと、さつきはすいませんでした！勝手に部屋を覗いたりして……」

「ははは、大丈夫、私は怒ってないよ。私の様な者がこのような神社にいれば、気になって当然だろう。それにしても、君は朝早いのに元気だね」

「あ、それはその……実は早く目が覚めちゃいました」

「なるほど」

「あの一つ聞いても良いですか？」

「ん？なんだい？」

「もしかして、フリードマンさんの知り合いですか？それとも舞草の？」

すると、私のそんな質問に彼は表情を一瞬、曇らせた。

そして、右手を顎のしたにおいて一瞬考えるそぶりをする。

「……？」

「……なるほど。少し失念していた。ここに居る時点で君もこちら側の人間というわけか」

「え……？」

「君の質問に答えよう」

「え？あ、はい」

「まず、君はフリードマンの知り合いかと聞いたが、その質問の問いはYESだ。だが、私は舞草の人間ではない。まあ協力者ではあるがね」

「へえ、そうなんですか。私てつきりこの里に居るから舞草の人かと思いましたが」

「まあ、そう思っても仕方ないよ。ところで……私からも一つ良いかい？」

「あ、はい。どうぞ」

「私はここに長くいるが、君を私は見たことがない。君は美濃関の制服を着ているが君も舞草のメンバーなのかな？」

「あーえっと……どうなんですかね？あはははー……」

私は彼からの質問になんと答えたら良いのだろうかと悩んだ。

なぜなら、私はなりゆきで舞草にやってきたは良いものの、正式に自分が舞草の一員であるかは分からないからだ。

「じ、じつは……」

私は正直に言う事にした。

「私、なりゆきで舞草に助けてもらったんですけど、自分が舞草の一員かどうかって聞かれるとちよつと分からないです」

「なりゆきか……なりゆき……」

彼が急に神妙な顔をする。

「ふっ……なるほど、そう言うことか」

彼は急に思い出したように薄っすらと笑みを浮かべた。

「これは私の推測だが、君はもしかして噂の鎌倉で行われた御前試合で折神紫を襲撃したという生徒の二人の内ひとりではないかい？」

「え!? あ、あの……はい。そうです」

「やはり……君達の情報は聞いているよ。たった二人で折神紫を襲撃し、さらには親衛隊にも一歩も引かずに勇敢に戦っていたとね」

「ゆ、勇敢だなんて。私、友達を守りたくてそれで。それに私は友達を助けただけで私は切りかかってません」

私は急な褒め言葉に少し照れた。

しかし彼の話は止まらない。

「ん? どうやら私の入手した情報に少しだけ誤りがあったようだな。しかし、そんなに謙遜する必要はないよ。君達の話聞いた時は私も久しぶりに心が躍ったものだ。そこでなのだが」

彼は楽しそうに話す。

「どうだろう。ここで会ったのも何かの縁だ。挨拶がてらに私と一つ手合わせをしてみないか?」

「え? 手合わせですか?」

「そうだ。私もこう見えて武道には少しだけ自信があつてね。流石に刀使の様な試合は私は刀使ではない為出来ないが、ぜひ、通常の手合わせはどうだろうか?」

「え、えつと……でも、部屋みんな、もう起きてるかもしれないし……」

「やはりダメかな?」

私は彼の表情を見た。

私は断ろうと思ったのだが、彼は残念そうな表情をしていた。それを見て私は迷った。

でも、少しの時間ならと了承する事にした。

「分かりました。それじゃあ、一本勝負でどうですか？」

「良いだろう。では、向こうの方に道場がある。そこですとしよう」

「え？この神社に道場なんてあるんですか？」

「ああ。あるよ。この神社の庭があるのは分かるかい？」

「はい。さつき散歩もしましたんで」

「ならば、話は早い。庭に道があつただろう？紫陽花が咲いている場所だ。その道を真直ぐ山の方へと行くと今は使われていないが道場がある。道は行けば分かるはずだ。君は先に行つてくれないだろうか？私も準備をしたらすぐに追いつこう」

「えっと、はい。わかりました」

そうして私と彼はその場で一旦別れ、私は道場の方に、彼は部屋へと入っていった。

私は靴をもう一度履くと先ほどアジサイの花が咲いていた庭の道を進んだ。

先ほど来た時は神社周辺の散策ルートしか通らなかったが、私は彼に言われた通り、山の方へと昇るルートを進んだ。

ただし、山と言つてもそこまで険しい道というわけではなく、あくまで庭の延長線上にあり階段でしつかりと舗装されていた。

そうして階段を上っていくとすぐに少し開けた場所に出た。

「ここかな」

その開けた場所には和風の建物が一棟建っており、戸などは全て閉め切られて入るが風格は道場その物だった。

私はその道場の建物に近寄ると戸が開く事を確認して中へと入っていったのだった。

◇

約十分後。

「待たせたかな」

「あついえ」

私が道場で待っていると彼はそう言っただ道場に入ってきた。

ちなみにこの時、私は彼を待っている間に道場の閉め切られていた戸を開けて道場内の澱んだ空気を換気して朝日を道場内へととりこんでいた為、道場は明るく使える環境となっている。

私は彼がそう言っに入ってきた事を耳で確認すると入り口の方を振り返った。

見ると彼は見慣れない服装に着替えなおしていた。

彼は先ほど着ていた白いジャケットにズボンという姿ではなく、なんとというか、まるでスマートな宇宙服の様な服を着ていた。

その服は青系や白系の色でかためられている。

私はその服装を疑問に思った。

「あ、あの……その服は？」

「ん？ああ、これは特殊なスーツだ。素材は特殊な物を使用しているから通常の日本刀の攻撃くらいならば、怪我はしない。本来は別の目的があるのだが、今回の様な試合でも役に立つだろうと思ってね」

「そうなんですか……あ、えっと試合なんですか、この道場って摸擬刀とかって無いんですか？幾ら探しても見つからなくて……無いと試合が……」

「心配は要らない」

「え？」

「君はいつも通りその御刀を使用するといいい。君も使い慣れた剣の方が良いだろう」

「ええ!?!で、でもそれじゃあ……」

「なにも迅移や八幡力の業を使ってほしいとは言っていない。あくまでも普通の試合だ。それがただたまたま摸擬刀ではなく御刀であったというだけの事。それにさっきも言ったが、私が今着ているこのスーツは通常の日本刀による剣撃程度では容易には貫けない。だから安心していつも通りやってほしい。だが、君の方は写シは使ってほしい。そうすれば互いに全力に近い形で試合ができるだろう」

「は、はあ……えっとそれじゃあ、試合をしても良い……って事で良いんですよ、ね？」

「ああ、かまわない」

そう言うのと彼は手に持っていた剣へと手を伸ばした。

だが、私はその時、あることに気がついた。

「その剣……」

「ん？ああ、見るのは初めてかな？」

「あ、はい」

「そうか。これはヨーロッパの普通の剣だ。ロングソードという類の剣で、ただ見かけ通りのアンティークだがね」

「えっと、その……私、初めて見ました！もしかして、剣術も？」

私ははじめて見たヨーロッパの剣に少しテンションが上がりそれと同時に自然に声も上がる。

「私は10歳まではイギリスに居た。その頃から剣術にはそれなりに親しんでいる。ただ、西洋式の剣術だがね」

私は西洋式の剣術と聞いて胸が高鳴った。

私は剣術が好きなのだが、日本以外の剣術にも興味があつて中国の剣術などは本などでかなり調べたりしていた。

でも、ヨーロッパの剣術に関してはあまり資料が見つからず良く分からなかったのだ。

しかし、今、自分の目の前にいる人がヨーロッパの剣術を使うと知って私の好奇心は大きく刺激されていた。

「ふっどうやら、そちらも我慢の限界といった所かな？よし、では始めるでしょうか」

「はいー」

私と彼は互いに位置につくと一礼をしそれから私は御刀を彼はロングソードを互いに構えた。

「……………」

「……………」

静けさが場を支配する。

だが、次の瞬間、静けさは私の声によって破られた。

「はあ!!」

私は御刀を振りかぶって彼に向かって走っていく。

そして、御刀で彼に一太刀を入れる。

しかし、それは彼の剣によって防がれた。

「なかなかの剣だな!しかし!!」

彼は御刀の攻撃を受け流すと私を攻撃してくる。

私はそれを防御した。

その後、私と彼は攻撃、防御の交互に繰り返すように互いに太刀を入れていった。

その間私はずっと興奮していた。

私が見た事のない経験した事のない剣術が披露されていたからだ。

薙ぎ払いのタイミング、防御の方法、その立ち回りまで。

それらは私の好奇心をより大きくしていった。

私は久しぶりに試合でここまでの興奮を味わっていたのだ。

でも、そんな試合にも終わりは来る。

そして、それから暫くして試合の決着はついたのだ。

「はあはあ……」

「はあはあ……やはり、私の見込みは間違いなかったようだね。すばらしい腕前だ」

「そ、そんな事ないですよ……はあはあ」

私と彼は結局、試合を3本も取ってしまった。

1 試合目は引き分け、2 試合目は彼の勝ち、3 試合目は私の勝ちだった。

試合の結果は総合的には完全に引き分けだった。

「それにしてもすごい剣術でしたね!私、こんな剣術見るの初めてです!でも、少しだけ気になる事があるんですけど、なんていうか……」

「何が気になったのかな?」

「はい、剣撃を受けてる時に思ったんですけど、少しだけ動きというか構えが二天一流……ううん、流派までは良く分からないんですけど日本の二刀流の流派の剣術に似ている気がしました」

「これは驚いたな」

「え？」

「今ので気づいたか。凄まじいなその感覚」

彼はそう嬉しそうに言った。

「君の指摘は正しい。私は本来では二刀流の流派だ」

「やっぱりそうなんですわね！でも、それじゃあなんで一刀だけで？」

「残念ながら今はこれしかなくてね。やむ終えずという事だ」

「そうだったんですわね」

「そう言えば……」

すると、彼は急に思い出したように話し始めた。

「どうかしましたか？」

「いや、今更ながら君の名前をまだ聞いていなかったと思ってるね」

「そう言えば……そうなんですわね。私も聞いてませんでした」

私と彼はそう言い互いに顔を見合うと、おかしくなって小さく笑った。

あれだけの試合をしたのに互いに自己紹介も忘れていたなんてと思うと少しおかしかったのだ。

すると、彼は自己紹介をしようと提案してきた。

「良ければ君の名前を教えて欲しいのだが」

「良いですよ。私の名前は衛藤可奈美です！美濃関学院中等部二年生の13歳！」

「では次は私だな。私の名前はマクギリス。マクギリス・フアリドだ」

「マクギリスさんですわね！分かりました！」

「それにしても……衛藤可奈美か。衛藤……ふつまさかな」

「あの……私の名前になにか？」

「いや、私の知っている人物に少しだけ心当たりがある苗字だったのでね」

「え？私の事知ってるんじゃないんですか？」

「私が知っていたのは君と平城の子が事件を起こしたという事だけだよ。名前までは知らなかった。と、少し気になる事があるのだが、少し聞いてもいいかい？君の苗字は衛藤だが、お母さんはもしかして……藤原美奈都さんという人ではないかな？」

彼は真剣な表情で聞いてくる。

私はその質問に驚いた。

「え、えっと……はい、そうですけど……」

「っ！やはりそうか……」

「あ、もしかしてお母さんの知り合いですか？」

「いや、面識はないよ。ただ、ここ舞草に来て20年前の相模湾岸大災厄の真実に関する資料を見て知っていただけさ。なるほど。君は真の英雄の娘だったというわけか」

そう言うのと彼は笑みを浮かべる。

「そ、そんな英雄の娘だなんて！だって家は何処にでもあるような普通の家族ですよ？」

「周りから普通に見えるからこそ英雄と呼ぶに相応しいのだ。生まれや所属など関係なく己がただ力を研ぎ澄ます事で大荒魂を鎮める事ができた。これを英雄と呼ばないでなんと表現すれば良いのか。私には分からないよ」

「は、はあ……」

「娘である君の前で言うのは少し恥ずかしいが、正直言って私は相模湾岸大災厄の真実知った時、心が躍ったよ。たった3人で絶大な力を誇る大荒魂に挑みそしてそれを鎮める。確かにその結果は失敗かもしれないが、時間は時間稼ぎにしかなくてはいなかったのかも知れないが、私はまるでアグニカ・カイエルの伝説の一場面のようにだと思った」

「アグニカ？」

「ああ、そうだ。アグニカ・カイエル。世界を救った英雄さ」

「あの、そのアグニカ・カイエル？つてなん」

私がアグニカ・カイエルについてなんなんですか？と聞こうとした丁度その時だった。

道場の入り口の方から扉が開く音がした。

私と彼が入り口の方を見るとそこには一人の黒いスーツを着た男の人が一人立っていた。

「准将、お迎えにあがりました」

「石動か。もうそんな時間か」

「マクギリスさんのお知り合いですか？」

「ああ、私の部下だ」

私は黒いスーツを着たその人の顔を見た。

その人の顔の形は綺麗に整っており、髪の毛は肩まで伸びていた。髪の色は一瞬見ただけでは黒髪の様に見えたが良く見ると暗い色の茶髪だった。

私の第一印象は少し変わった人という感じだった。

すると、マクギリスさんが私の方を見た。

「衛藤可奈美。今日はとても有意義な時間を過ごさせてもらった。お礼を言うよ」

「お、お礼なんて！それに私も楽しかったですから！」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。それでは衛藤可奈美、またいずれ手合わせをしよう」

そう言うのと彼は笑みを浮かべて私の方に握手の手を伸ばしてきた。

それを見て私も笑みを浮かべる。

「あ、はい！その時はこちらこそよろしくお願いします！次こそは勝っちゃいますからね！」

私も握手の手を伸ばす。

そして私と彼はガツシリと互いに握手を交わしたのだった。



「あっちゃー思ったより時間過ぎちゃったな……皆もう起きてるかな……」

私は道場の閉じまりをしてから、あの石動って人からスポーツドリノクを一本貰ったのでそれを片手に小走りで神社の方へと走っていた。

小走りをしている理由は簡単だ。

実は三本の試合を取っている間にそれなりの時間が過ぎていて気がつけば皆がもう起きている頃になってしまっていたのだ。

私は神社の境内を進む。

「そういえば……やっぱ、あの二人どこかで見たことある気がするんだよなあ……」

私は道中そんな事を呟いていた。

ものすごく気になるとかそう言うわけではないのだが、随分前にマクギリスさんと後から来た石動さんを見たことがある気がしたのだ。

その疑問が私の頭の片隅でもやもやとしていた。

そして、そういうしている内に私は皆と泊まっている自分の部屋へとたどり着いた。

「そろーり、そろーり……」

私はそーつと障子の戸を開けるすると、丁度その時。

「おい、何をやってるんだ可奈美」

「ギクツ……あ、あはははー、おはようー姫和ちゃん」

私が後ろを向くとそこには私の仲間であり友達の十条姫和ちゃんが立っていた。

姫和ちゃんは私の後ろで腕を組んで呆れた表情で立っている。

「はあ……いくら驚いたとしてもギクツなんて本当に口に出すやつがあるか」

「あはははーごめん！」

「それで？何処に行ってたんだ？朝早くに」

「えーつとね実は……」

私はとりあえずさつきあつた事を簡潔に説明した。

「なるほどな。早く起きたから散歩をしてたら神社の中で見れない男を見かけてその男と話してそれから道場で試合をして戻ってきたというわけか」

「うん、大体そうだよ」

ちなみに私はこの時、マクギリスさんや石動さんの名前は出していない。

「まあ色々言いたい事はあるがまあ良い。さっさと行くぞ可奈美。全員神社の広場で待ってるぞ」

「あ、うん！分かった！」

私は姫和ちゃんと一緒に皆と朝の稽古をするために皆が待つ神社の広場へと移動したのだった。

◇

彼とのなんの変哲もない出会い。

しかし、私と彼の話はその日の夜に突然大きくなり始める。

私と姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん
の6人は夕飯を食べた後、神社の客間に呼ばれた。

さいしよはどんな話なのか気が気でなかったが、行つて見るとそこ
では折神朱音様、リチャード・フリードマンさんが居て私たちは軽い
話しをしていた。

「ふふふ、そうですか孝子さん達に稽古を付けてもらったのですね。
それはよかったです。この里に皆さんが来て今日で3日目ですが、ど
うですか？少しは落ち着きましたか？」

朱音様が私達に落ち着いた様子で聞いてくる。

恐らく私や姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃんに言っているも
のだとは理解できた。

朱音様は心配してくれているのだ。

「はい。おかげさまで」

姫和ちゃんがそっけなく答える。

「そうですか。それは良かったです。これまで大変でしたでしょうか？」

「それで、朱音様……私達を呼んだのはどのような用件でしょうか？」

姫和ちゃんは少しトゲがある言い方をした。

「ちよつと姫和ちゃん」

「……よいのです衛藤さん。彼女の我々への不満があるのは仕方ない事ですから。ですが、今日皆さんをお呼びしたのは本当に皆さんが落ち着いたのかそれをお聞きしたかったですからねです」

「では、何も用がないというのならなぜ、その男もこの場に居るのですか？」

姫和ちゃんはフリードマンさんを見る。

すると、次はフリードマンさんが口を開いた。

「私がここに居るのはただ単に、時間が空いていたからだよ。特段の事情は今はないから安心してくれ姫和くん」

「……そうですか」

「……………」

「……………」

気まずい……私はそう思った。

フリードマンさんにはこやかな雰囲気の話してくれたのだが、そのあと、会話が続かなかつた。

朱音様にいたっては私から見ても気まずそうな表情だ。

沈黙が始まって本当に僅かな時間が経過するがその沈黙の時間がすごく長く感じた。

私はこの雰囲気を変えられないかと話題を考える。

だが、それはすぐに無駄になった。

「まあまあ、そんなに警戒をしてお互い身がもちませんデスよ」

エレンちゃんがお得意の笑顔とノリで沈黙を破つたのだ。

「だが、ここに来てもう3日目だぞ？これでどうやって、折神紫をうつ

「というんだ！」

するとそれに対して姫和ちゃんが少し大きめの声で言う。

「姫和くん。勝負には挑むべき時と挑むべきではない時がある。今は折神紫を倒す為に準備をしている段階だ。従って今はまだ待つべきだと私は思うよ」

「それは……」

「焦る気持ちは分かります。ですが、十条さん今は私達を信じてください」

「……分かりました」

姫和ちゃんは不満げがありそうだが、なんとか頷いた。

「例を挙げるなら20年前の相模湾岸大災厄でも内容こそは全く違えど戦略級の作戦はしっかりと取られていたはずだからね」

フリードマンさんが相模湾岸大災厄を例に出して言う。

すると今度は舞衣ちゃんが声を上げた。

「戦略級の作戦？」

「ああ、そうさ。今日、君達が訓練をしていたのは、戦術級の訓練だ。言うなら目の前の戦いに勝つ為の作戦かな。戦略級はその上のランクだ。一つの大きな戦いをどうやって制するか。いくつかの戦術級の作戦の上にそれがあるんだ」

「なるほど……」

舞衣ちゃんはそう言うとか何か考え込む。

だが、その時だった。

私は今さっきの相模湾岸大災厄というフリードマンさんの口から出た言葉に、何の前触れもなく、ふと彼の事を思い出した。

彼が道場で私にくれた話を。

(私はまるでアグニカ・カイエルの伝説の一場面のようにだと思った)

あれって結局どういう意味だったんだろう……。

私はそう思った。

あの時、道場では結局聞けなかったのだが、そのせいか、私の心の中では、そんな疑問の気持ちはずっとモヤモヤしていて、それが今のフリードマンさんの言葉でこの気まずい雰囲気の中、私の心の中にモヤモヤが一気に溢れ出てきてしまった。

すると、私は気がつくとも意識にフリードマンさんに向かって小さく手を上げていた。

たぶん、今、この部屋に漂っている気まずい雰囲気をどうにかしたいとずっと思っていたのと、モヤモヤが合わさってできた行動だと自分と思う。

なんとか話題の方向性を変えようと思ったのだ。

それに私は彼、マクギリスさんが私に言ったこのアグニカ・カイエルという言葉の意味を知りたくて仕方なかった。

あの時、相模湾岸大災厄の話をしてきた時にでてきた言葉だから相模湾岸大災厄に何か関係があるのではないかと道場で聞いた時から私は思っていたのだ。

もしも相模湾岸大災厄に関係があるのなら、その戦いを戦った私のお母さんにも何か関係があるのかも知れない。

そう思うと私は本来ならまたマクギリスさんに会った時に聞こうと思っていたそれをこの場で聞かずにはいられなかった。

「あの……一つ聞いても良いですか？」

「ん？なんだい可奈美くん？どんな質問でもウエルカムだよ」

フリードマンさんが、にこやかに私を指す。

「その……もし関係なかったら、話を中断させて悪いと思うんですけど……」

「別に大丈夫だよ。なんでも聞いてくれ」

「えっと、相模湾岸大災厄で思い出したんですけど……アグニカ・カイエルってなんなんですか？相模湾岸大災厄になにか関係があるんですか？」

私は単刀直入に疑問をフリードマンさんにぶつけた。

「……………」

すると、私がこの質問をした瞬間、フリードマンさんと朱音様は一瞬驚いたような表情をした。

「……………え？」

そしてその次の瞬間には互いに表情を一気に険しくした。

二人は互いに顔を見合す。私はこの状況に何かまずい事を聞いてしまったのかと思い困惑した。

一方で私が話の流れ的にはまったく脈絡のない話を急に切り出した事にさつきまで気まずそうな雰囲気だった姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃんは気まずい雰囲気も忘れたように何だそれと言わんばかりに疑問を浮かべた。

特に姫和ちゃんに関しては「急に何の話をしているんだ？」と私に聞いてきた。

ただ、フリードマンさんや朱音様の表情が一気に険しくなった事を感じていた私は二人の方に恐る恐る声をかけた。

「えっと、あのすいません……………私何か聞いちゃまずい事でも聞いちゃいましたか？」

私がそう言うと朱音様が、無理に笑みを浮かべて私の方を見た。

「別にそんな事はないですよ……………えっと、衛藤さん、質問に質問で返す様で悪いですが、その話は誰から聞いたのか聞いても良いですか？」

「はい、えっと、朝、散歩をした時にフリードマンさんとは知人だつていう人に会ったんです。その人から聞きました。マクギリスさんからです」

私が正直にそう言うと二人の表情はますます暗くなる。

朱音様に関してはフリードマンさんに向かって「失念していました……………やはりあの方の部屋は別館にすべきでしたね……………」と小声で話しているほどだ。

「あの……………どうかしたんですか……………」

私は正直こんな事になるとは思わず困惑する。

「マクギリス……………どこかで……………」

私の隣で姫和ちゃんは考え込む。

見れば舞衣ちゃんもだ。

その一方でエレンちゃんと薫ちゃんは普通にしている。

だが、どこか何となくピリピリとした様子だ。

すると薫ちゃんが私の方を見る。

「お前……アイツに会ったのか？」

「え？あ、うん。朝、散歩してたら偶然見かけて。それで話をした後試合をしようって言われたから試合してたよ」

「だから朝、起きた時居なかったのか……変な事吹き込まれてないだろうな？」

「変な事？」

「おいおい気がつかなかったのか？アイツの名前聞いて分からなかったのか？アイツは……」

薫ちゃんがそう言おうとしたその時、舞衣ちゃんが話しに割ってはいる。

「……ね、ねえ可奈美ちゃん」

「え？な、なに舞衣ちゃん？」

「そ、その可奈美ちゃんが会った人のフルネームって分かる？」

「フルネーム？えつと……確か……マクギリス……」

「マクギリス……？」

「マクギリス・ファリドだったよ」

私がマクギリスさんのフルネームを言う。

すると、その瞬間、室内は一気に静まり返った。

そして、今度は姫和ちゃんが急に何かに答えを見つけた様な表情をして急に立ち上がった。

「なっ!?!マクギリス・ファリドだと!?!」

姫和ちゃんは立ち上がると同時に私に向かって驚いたような声を上げたのだった。

◇

「き、急にどうしたの姫和ちゃん？」

「どうしたじゃない！可奈美！本当にそいつはあのマクギリス・ファ

リドだったのか!？」

「あのとてどういう……」

「さすがに覚えているだろ!二年前の……事件は……」

「二年前の事件?なにかあったつけ?えつと……あっそういえば、東京で大きい事件があったような……」

私は思い出したように言う。

すると、その瞬間、私はある事を思い出した。

私は普段はニュースも新聞も全然見ないのだが、あの時は寮の中でなんだか騒ぎになっていて後からちよつと気になってテレビをつけたらニュース番組かなにかの特番である外国人風の男の人の顔写真が大きく映っていたのだ。

そこまで思い出して今日の事をまた思い出す。

彼の事を。

金髪に翠色の瞳を。

「あっ!!もしかして皆が言ってるマクギリス・ファリドってもしかして二年前の……」

これで一つ合点がいった。

どおりでどこかで見た事がある気がすると思ったのだ。

見たのは以前に会ったのではなくニュースで見ていたのだ。

「ようやく気がついたのか……かなり常識だぞ……」

「さすがはカナミンですネー!」

エレンちゃんは面白そうにいつも通り笑う。

「可奈美ちゃん……もう少しニュースとかちゃんと見ようね……」

そんな様子を見ていた舞衣ちゃんは私に向かって苦笑いを浮かべたままそう言った。

私は「あはははー」と苦笑いを返す。

だが、そこで私は一つの疑問を抱いた。

「あれ?でも……」

「いや、まてよ……」

姫和ちゃんも声を出す。

「だが、よく考えたら変じゃないか?マクギリス・ファリドは二年前に

マクギリス・フアリド事件を起こして事件の最中に死んだはずでは……その死人がなぜここに居るんだ？人間違いではないのか？」

私が思った事を姫和ちゃんが代わりに言う。

「そういえば……そうでしたね……それじゃあ、可奈美ちゃんが会ったのは別人？」

舞衣ちゃんがそう言ったちようどその時。

「残念だが、別人ではないんだな。これが」

その声は障子の戸を開ける音と共に聞こえてきた。

「真庭学長……」

姫和ちゃんが声が出た方を見てそう呟く。

みんなも同じ方向を見た。

声の主は今、外廊下から部屋の戸を開けた五箇伝の一角である長船女学院の学長、真庭紗南さんだった。

真庭学長はそのまま部屋に入ってくる。

「おー誰かと思ったら、うちの学長じゃねえか」

薫ちゃんが真庭学長にそう言った。

「よう薫。聞いたぞ？訓練でずいぶんしごかれてるらしいじゃないか薫」

「知ってるなら全部終わったらすしくらいは休暇くれよな」

「安心しろ。出世させてもっと忙しくしてやる」

真庭学長は笑みを浮かべながらそう言った。

「うい……」

それに対して薫ちゃんは明らかに嫌そうな声を出した。

すると、今度は私達全員の方を見た。

「3日ぶりだな。お前ら。どうだ？少しはこっちにも慣れたか？」

真庭学長は私達をリラックスさせようとしているのか普通のノリで私達にそう言った。

しかし、姫和ちゃんは険しい表情のまま真庭学長に向かって口を開いた。

「真庭学長……それよりもどういう事ですか？今あなたが言った別人ではないとは？」

それを聞いた真庭学長は何だかバツの悪そうな表情を一瞬して頭をかいた。

「はあ……」

真庭学長は一度、溜息をつく。

皆、真庭学長の方に注目していた。

「本題に入ろう」

そう言うのと真庭学長は一気に真面目な表情に変わった。

その表情は3日前、この隠れ里に来て二十年前の真実の話をした時と同じ真剣さだ。

私はなんだか緊張を感じる。

「朱音様、フリードマン博士、もうよろしいですね？」

「ああ、私は構わないよ。こうなつてはもう仕方ないだろう」

「はい。私も構いません。これ以上、彼女達に隠し事をする訳にはいきません……」

真庭学長は朱音様とフリードマンさんに確認を取ると二人は特に朱音様は思い詰めたように了承した。

それを聞いた真庭学長は何も言わずに頷くと私達の前に座った。

姫和ちゃんが真剣そうに口を開く。

「真庭学長……」

「まあ落ち着け十条。今から順を追って説明する。だが、その前に……」

真庭学長はそう言うのと僅かな間目を閉じてそれから意を決したかのように目をゆつくりと開くと先ほど真庭学長が入ってきた入り口の方を向いた。

「……う？」

皆がそれを見て何を思うのだろうかと思う。

真庭学長が声を出す。

「……入ってきてくれ」

その声はとても静かで落ち着いた様子だった。すると、その声に反応するかのように入り口の戸がゆっくりと開く。

そして一人の人物が室内に入ってきた。

「やあ、また会ったな衛藤可奈美」

知った声が私に向かって向けられる。

「あつ」

入ってきたのは彼だった。

彼は朝と代わらぬ服装をして同じ笑みを私に向ける。

私は彼の名前を呼ぼうとした。

だがその瞬間、だった。

「っ?! 貴様は!!」

「っ!」

姫和ちゃん、舞衣ちゃんは部屋の中に入ってきたその人物を見た瞬間、2人は驚くと同時に即座に立ち上がりその人物から距離をとると警戒したように御刀を抜いて構えた。

二人が御刀を向ける先には……見間違える事は絶対がない。

彼、マクギリス・ファリドが立っていた。

「姫和ちゃん!」

私は二人の行動に驚く。

一方で薫ちゃんやエレンちゃんはやっぱりこうなったかとも言いたいような表情をしていた。

御刀を向けられているマクギリスさんかというと、御刀を向けられているのに平然そうだ。

「……これはどういう事だ!? 本物のマクギリス・ファリドじゃないか!!」

「十条! 柳瀬! 落ち着け! ここは御刀を納めろ! 私が呼んだんだ! コイツと話をしていたらコイツが衛藤と朝に会ったとか言ってたからな。こうなっているんじゃないかと思ひ連れてきたんだ」

真庭学長が二人を制止する。

「しかし……」

姫和ちゃんはそう呟くが二人は数秒の沈黙の後に姫和ちゃん、舞衣ちゃんは互いを見合うと、しぶしぶ了承し御刀を鞘に納めた。

「分かった……」

「分かりました……」

部屋の中をピリピリとした空気が包む。

「ふっ、剣を下げてもらった事、感謝しよう」

マクギリスさんが、笑みを浮かべて姫和ちゃん、舞衣ちゃんに向かって言う。

「これはどういう事か、ちゃんと説明してもらえますよね……?」

「はあ……もちろんだ。順を追って説明しよう」

真庭学長が疲れた風に言う。

一方で姫和ちゃんの言葉に朱音様はさらに表情を暗くしたのを見逃さなかった……。



その話は真庭学長、そして後から入ってきたマクギリスさんが座布団を出して席に着くと始まった。

真庭学長、マクギリスさんの二人は朱音様、フリードマンさんの隣に二人並ぶようにして座る。

そして、部屋の中の空気は最悪だった。

「まずどこから話したのか……」

真庭学長がそう呟くすると、マクギリスさんが口を開いた。

「いや、本題に入る前に私の自己紹介をした方がよろしいのではないですか？ 真庭学長」

「……それもそうだな。良いだろう」

「では、諸君、もう知っているかも知れないが、私が2年前、この日本に革命を起こそうとしたマクギリス・フェアイドだ。薫君とエレン君と

はこれで直接会うのは8回目になるかな？」

「……そうなりますネ」

「そうだな……」

エレンちゃんと薫ちゃんの声が歯切れ悪くなる。

だが、マクギリスさんは相変わらず笑みを浮かべている。

ただしそれは不敵な笑みだ。

私はそこまでマクギリスさんを警戒してるわけではないのだが、その笑みに少しだけ怖さを覚えた。

マクギリスさんが、姫和ちゃんや舞衣ちゃんの方を見る。

「そして、君は十条姫和さんだったかな？衛藤可奈美から話は聞いている。そしてその隣は柳瀬舞衣さんだったかな？まあこれからよろしく頼むよ」

「……………」

「フツ……どうやらまだ警戒されているようだな」

姫和ちゃんはマクギリスさんを睨んだ。

「当然だツ！貴様は日本で一番有名なテロリストだぞ！！警戒しない方がおかしいというものだ！！そもそも、なぜ貴様が生きている！そしてなぜ、ここに居る！」

「……十条、落ち着け。それとマクギリス、それぐらいにしてもらおうか。話をこれ以上ややこしくしないでもらおう」

「どうやら怒らせてしまったようだ」

真庭学長がマクギリスさんに向かって静かにしかし、目に睨みを利かせてそう言うのとマクギリスさん口を閉じた。

「……それじゃあ、本題に入るぞ。お前らの疑問は分かっている。なぜ、こいつが生きていてなおかつ、この舞草にいるのか……そういう事だな？」

「はい。その通りです」

舞衣ちゃんが真剣な声で答える。

「では、今から順を追って話す。そうすればお前達でも話の筋書きだけは理解できるはずだ。筋書きだけ、はな……」

そう言うと、真庭学長はどこか遠い目をしながら語り始めた。

「全ての始まりは舞草の結成の頃にまで遡る……今から5年前の事だ。当初、舞草は朱音様や私、羽島学長、五條学長を中心に有志の刀使達が伍箇伝や民間から集まって結成された。しかし、当時すでに折神紫は刀剣類管理局の局長にまで昇進していて、もはや有志の刀使だけの力では状況を覆すには困難な状況に陥っていた。そこで、我々は政治的な面から折神紫に対して圧力をかける事を計画した。当時の政府の関係者とコンタクトを取ったんだ」

「政府にですか？」

舞衣ちゃんが真庭学長に聞く。

「そうだ。厳密には警察庁と防衛省だがな……当時はまだ警察や自衛隊の中にはまだ相模湾岸大災厄の真実を知っている者達が居たんだ。防衛省の制服組のトップ、外山之夫統合幕僚長。警察庁の長官、大山坂城長官だ。この二人は20年前の相模湾岸大災厄時でもそれぞれが現場指揮官として事件に対応していた。その為、我々の主張も概ね信じてくれた。これによつて我々、舞草は外山統合幕僚長と大山警察庁長官の協力という非常に心強い味方を得る事に成功した」

「それで、その状況でどこからこの男が出てくるんだ？」

姫和ちゃんが良く分からなそうな表情をする。

「ここからだ。だが、それを説明するにはまず、当時の政府内での勢力図を説明する必要がある。当時、刀剣類管理局を巡る派閥は政府内に2つ存在していた。一つは折神紫率いる折神家派。そしてもう一つが……」

真庭学長が言おうとしたその時だった。

「我々、ギャラルホルンだ」

マクギリスさんが口を開いたのだ。

「我々、ギャラルホルンは刀剣類管理局と立場を巡って水面下で対立し、ギャラルホルンは名目上は刀剣類管理局傘下の組織ではあったが、その実態は我々の政治的工作によつて刀剣類管理局の影響をほぼ受けない独立組織だった」

話について行けず私は疑問を口にする。

「え？でもギャラルホルンってテロ組織？だったんじゃないんですか

？」

「テロ組織ではないよ。元々は警察庁刀剣類管理局傘下の組織の一つだ。ギャラルホルンは元々、私が学生時代に作った組織でね。そこでの働きが警察庁に認められ正式に組織化されたのだ」

すると、そこまでマクギリスさんが言った所で姫和ちゃんが疑問を浮かべた。

「ん？それはおかしくはないか？さっき言っていたその派閥とやらが、ギャラルホルンと折神紫派しかなかったのなら、舞草はどちらに属していたんだ？」

「確かに……そうですね……」

舞衣ちゃんも疑問を口にする。

それに対して答えるのは真庭学長だ。

「……どちらでもあり、どちらでもないと言った方がこの場合は正しいな。我々は特定の派閥にはついていない。派閥はコイツの言った通りギャラルホルンと折神紫派が存在していた。一方で我々、舞草だが、我々はその目的上、秘匿された組織だった。折神紫にバレれば我々の画策は失敗だからな。だから当時はまだ折神紫派にも舞草の存在は知られていなかった。例えるならば舞草は……第三の派閥、だろうな」

「第三の派閥……」

沙耶香ちゃんが呟く。

「もちろん、派閥などという固まった物ではない。我々は別に刀剣類管理局の実権その物が目的ではなかったからな。あくまで折神紫の討伐が目的だった。そんな我々は普段は折神紫派の派閥に属す振りをして、裏では外山統合幕僚長と大山警察庁長官の支援を受けていたんだ。そのおかげで舞草はその勢力を拡大させた。当時の組織の拡大の勢いは、まさに近い将来には、折神紫を刀剣類管理局の局長から引きずり下ろす事ができると思ったほどにな」

「そんな勢いだったのらなせ……」

「十条、お前の言いたい事は分かる。ではなぜ、今も折神紫が刀剣類管理局を支配しているのか、だろ？」

「ああ……」

「それはだな……」

真庭学長が言おうとしたその時。

「……コイツのせいだ」

薫ちゃんが突然腕を伸ばしてマクギリスさんの方へと向けると指差した。

「え？…どういう事？」

私が薫ちゃんに聞く。

すると薫ちゃんも答えた。

「コイツが二年前に、例の事件を引き起こしたせいで舞草はぶっ壊れかけたんだ」

「どういう事？」

私はあまりにもピンと来ない為に聞き返してしまう。

それに対して真庭学長が答えた。

「……二年前、この男、マクギリス・ファリドが引き起こしたクーデター事件。マクギリス・ファリド事件の影響でギャラルホルンは組織解体。さらにクーデターを手引きした者、ギャラルホルンのクーデターに協力した者がほぼ全員逮捕された。そして、その中には外山統合幕僚長と大山警察庁長官もいた……これがどういう意味だかわかるか？この二人は実質的にはギャラルホルンに組したメンバーだった。そして、舞草の協力者もギャラルホルンに協力した罪で逮捕された者が多くでた」

「え？…でも……舞草は折神紫派の派閥だった……んですよね？」

「そうだ。刀使を中心としたメンバーはな……だが、逮捕された外山統合幕僚長と大山警察庁長官はギャラルホルン派の中核メンバーであった事がわかってる。そして逮捕された舞草の協力者は全て防衛省、警察庁の内部に居た外山統合幕僚長と大山警察庁長官に従う者達だった。舞草の実体としては事件前はギャラルホルンと折神紫、どちらの派閥にもまたいで存在していたんだ。だが、ギャラルホルン派閥の消滅によって結果として舞草の組織規模は縮小を余儀なくされた。資金面、人員面、政治面、全てにおいてだ。政治的影響に関して

は皆無となったと言っても良いだろう。しかも、さらに事態は悪化した。舞草の中で折神紫を支持する者達が現れたんだ。折神紫はギャラルホルンの蛮行を阻止した英雄だとな。現に折神紫は事件中、事件収束のための陣頭指揮を執っていた。これを賞賛する声が刀使だけでなく、当時は世間一般からも上がっていた。これによって舞草のメンバーはさらに少なくなつた。創設時は平城学館も舞草のメンバーだったんだが……しかし、平城学館は事件当時、運悪く刀使の部隊が東京に研修として来ていてな。事件に巻き込まれた事もあって、学内でギャラルホルンを打ち倒した折神紫を支持する者が大半を占めたんだ。岩倉学長もこの声を抑えることができず、結果として平城学館は舞草を離脱した……これによって事実上、組織としては最盛期の四分の一以下の規模にまで舞草は縮小したんだ」

「そんな事が……あれ？でもおかしくないですか？経緯は分かりましたが、その人が何故ここに居るのかの説明にはなっていない様な気がします……それにニュースでは死亡したって……」

「その点は私が説明しよう」

舞衣ちゃんが鋭い指摘に対してマクギリスさんが言う。

「確かに報道では私が死亡したと言われた。そしてそれは報道だけではなく警察や自衛隊も同じ見解だっただろう。しかし、実際は私は奇跡的に東京より脱出する事に成功していたのだ。そして、事件後、私はまだ捕まっていない同志達に連絡を取り一時的にかくまわれ、そこでギャラルホルンの組織再編をする事になった」

「だが、先ほど真庭学長がギャラルホルンのメンバーは逮捕されたと言っていただろうか？今の話を聞くと、逮捕されていない奴らが居る様にも聞こえるが……」

姫和ちゃんが疑いを持った目で聞く。

「良い質問だ十条姫和。確かに、残念ながら我々の主要な戦力やメンバーはその大半が逮捕されたと言って良いだろう。しかし、現実はそのうではない」

「どういう事だ？」

「実際に逮捕されたのは政府内のギャラルホルンの協力者と私と共に

革命に関わったギャラルホルン奥多摩支部、ギャラルホルン千葉支部のメンバーだ。ギャラルホルンには3つの支部がある。いや、あったか……二つは今言った支部だ。そしてもう一つが京都の今は無き私の母校でもある綾小路総合武芸学舎を拠点とするギャラルホルン京都支部だ。革命前、私は万が一、革命が失敗した場合の事を考えて京都支部には革命には関わらない様にと事前に指示を出しておいたのだ。むしろ、我々と敵対している風に装えとな。その結果、事件後、京都支部はギャラルホルンの解体と廃止に伴い支部も解散となったが、京都支部のメンバー自体は逮捕されなかったのだ」

「なるほどな……つまり残党か」

「ふっその通りだな。まさか私もこの予備プランを発動させる事になるとは考えてもいなかったよ。残党……虚しい響だ」

「だが解せんな。貴様らテロリストの残党が居るといふ事は分かったが、なぜ貴様がここに居る理由になるんだ？」

「それは……それは、私が説明します……舞草の創設者として責任は果たさねばなりません」

すると、朱音様が今まで黙っていたのに急に声を上げた。

しかしその表情は暗い表情をしたままだ。

その場に居る全員が朱音様の方を見る。

「……あの事件の後、舞草は空中分解寸前の状態にまで陥りました。今まで私達を支援してくれた人たちの多くが我々の元を離れていったのです……」

朱音様は悔しそうに語る。

「当時の私達は舞草を存続させる為に多くを模索しました。幾つかの企業にも支援を要請しました。しかしその殆どは交渉の時点で失敗し、辛うじて八幡電子株式会社だけは支援をしてくれる事になりましたが、それだけでは、もはや舞草は立ち行けない程にまで追い詰めら

れたのです。そんな時でした……八幡電子株式会社の方々からある提案を持ちかけられたのです……その提案とはある組織との組織協力案でした。その組織はある出来事がきっかけで組織の規模が大幅に縮小してしまった組織だったのです……」

「まさか……その組織というのは……」

姫和ちゃんが何かを察したように言う。

「そうです。八幡電子株式会社が紹介してきた組織というのは……ギャラルホルンの残党だったのです。彼らは私達舞草に対してギャラルホルンの残党と協力するように働きかけたのです。彼らも人員が足りずに困っていると……」

「そ、それは……」

舞衣ちゃんが驚愕したような表情を見せる。

舞衣ちゃんだけではない、その場に居る事情を知らない者達全員がだ。

ただ、私の方かというと未だに話がよく理解できていなかった為に頭の中で必死に理解しようと務めていた。

「皆さんはギャラルホルンがクーデターを引き起こした時、何故、戦力の少ない彼らが東京を支配する事ができたかその理由は知っていますか？」

「ああ……知っている」

「あれは忘れられません……」

姫和ちゃん、舞衣ちゃんが呟く。

エレンちゃんと薫ちゃんは何も言わないが二人が何を思っているかは雰囲気で分かった。

「皆さんもテレビを見ていたのなら分かるでしょう。あのおぞましい殺戮マシンを……」

朱音様が思い出したように殺戮マシンと言った、その瞬間。

「……おぞましい殺戮マシンとは言ってくれるな。折神朱音」

マクギリスさんが突然、不機嫌そうな声を上げたのだ。

マクギリスさんを見ると、さっきまでは何を言われてもずっと平然としていたマクギリスさんの表情が明らかに怒った様な表情をして

いた。

「まさか、それは私のバエルの事を言っているのではないだろうか？」

「その事を言っているのです。マクギリス・フェアド」

朱音様がマクギリスさんを睨みつける。

「おい、朱音様に対して口が過ぎるぞ。マクギリス」

さらに真庭学長もマクギリスさんに対して言う。

「あれをおぞましいと言って何がおかしいのでしょうか？刀使の技術を悪用し多くの人々の命を奪ったあれを」

「ギャラルホルンにおいてバエルを持つものは唯一絶対の力を持ちその頂点に立つのだ。バエルを持つ私はそのような些末で断罪される身ではない」

「その論理はあなた達だけではないですか！」

朱音様とマクギリスさんの応酬が続く。

二人はどうやら仲が悪いようだと思はされた。

でも、このままでは話が進まないと思い、私は小さく手を上げた。

「あ、あの〜……」

「え？ああ、すいません。お見苦しい所をお見せしました……」

「私も少々意地が出てしまったようだ。もうしわけない」

朱音様とマクギリスさんが皆に向かって謝る。

「い、いえ……それで、あの、バエル？つてなんですか？すみません、よく知らなくて……」

「それは……」

私の質問を朱音様が答えようとするが、それに対してマクギリスさんが横から出てくる。

その表情は私の目にはどこか嬉しそうにも見えた。

「バエルとは我々、ギャラルホルンがS装備の技術を元に我々の技術を結集して現代に蘇ったアグニカ・カイエルの鎧なのだ」

「アグニカ・カイエルの鎧？」

「そうだ。一応、アグニカ・カイエルについても説明するがアグニカ・カイエルとは今から数百年前、中世の時代のヨーロッパで多くの国々が荒魂によつて滅亡の危機に瀕していた時代に人類を救った英雄だ」

「ヨーロッパで荒魂が？でも荒魂は日本にしか居ないはずじゃ……」
私がそう疑問を言うと補足するようにフリードマンさんが説明した。

「……今はね。今では多くの者達は知らなくて当然かもしれないが、今から300年以上前のヨーロッパでは御刀と呼べる物が存在し荒魂も存在していたという事は考古学でも伝承でも現代に伝えられているんだ。ただし、威力の高い鉄砲の出現等によって無くなって完全に廃れてしまったがね」

「補足ありがとうフリードマン博士。今の説明にもあったとおりヨーロッパにも荒魂や御刀に類似した物が昔は存在していたんだ。しかし、今では荒魂など、ヨーロッパには何処にもいない。伝承によれば一時は荒魂の軍団まで現れたという……だが、今は一匹たりとも存在しないそれは何故か？理由は簡単だ。英雄アグニカ・カイエルを筆頭とした者達が荒魂を打ち払ったからだ。そして、そのアグニカ・カイエルが身に着けていたという鎧、それこそがバエルなのだ。ただし、私の持つバエルは残念ながらオリジナルではなく現代の技術を使って蘇らせた言わば、複製品だがね」

「え、えーっと……」

私がいきなりのマクギリスさんの熱い説明に少し困惑していると、朱音様が割って入った。

「衛藤さん、気をつけてください。この方はこの日本にアグニカ・カイエル伝説を流布しそれを基にしたアグニカ・カイエルの思想をも広め多くの人々を先導して事件を引き起こしたのです……だいたい脱線してしまいましたね。では、話を戻しましょう」

朱音様は話を仕切りなおす。

「先ほど、例のロボット、バエルはS装備の技術を基にしましたと言いましたね。そして皆さんには一つ思い出して頂きたいのです。S装備を開発している企業の名前を……」

姫和ちゃんがハツとした様な表情を浮かべる。

それは舞衣ちゃんもだ。

「八幡電子株式会社……」

姫和ちゃんが言う。

「そうです。私達が独自に調べた所によると、八幡電子株式会社はギャラルホルンの研究に過去に積極的に関わっていたことが分かっています。恐らく繋がっていたのでしよう。今思えば、もっと慎重になるべきでした……つまり、私達が八幡電子株式会社から支援を受けられる事ができたのは……」

「そうなるべくしてなった……という事ですね」

「はい、この方は違うとは主張はいますが我々はそう考えています。ですが、追いつめられていた私達としては、もはやその提案に乗らざるを得なかったのです……皆さんの思っている事は分かります。例えその目的が大荒魂の討伐であったとしても、テロリストと協力するなど、許される事ではありません」

みんなも当然そんな雰囲気を出す。

「ですから私達はテロリストと協力せざる終えないのなら、圧倒的に資金面で劣勢である我々に対して資金面で優れているギャラルホルン側に対し方が一の為の保険として人質を要求したのです」

「人質……」

物騒な言葉に私は生唾を飲む。

「それではその人質というのは……」

姫和ちゃんがマクギリスさんの方を見る。

すると、マクギリスさんは笑みを浮かべた。

「そうだ。その人質というのは私だ。こちらとしても、組織の規模が縮小し肩身が狭くなっていたのでね。今回の協力量には互いが協力し合うという事で両組織の維持や規模の拡大が可能というメリットがあった。しかし、メリット以上に舞草側のデメリットは大きいだろう。万が一、この情報が外に漏れた場合には舞草の存続が危うくなるのだからね。場合によっては折神紫をうつなどという事は言っていられなくなるだろう。だからこの私が直接、人質となったんだ」

マクギリスさんの言葉に朱音様は目を細める。

「心配しなくても朱音様、我々はあなた方の情報をリークする気はありませんよ。もはや我々は一心同体だ。それに、人質であるという理

由を抜きにしても、私個人も折神紫を倒すという目的に変わりはない。それが大荒魂であるのならなおさらだ。大荒魂を討ち、バエルの持つ力を示さねばならない」

「あなたに一心同体などと言われるいわれはありませんね」

「ふつどうやら機嫌を損ねてしまったようだ」

朱音様が私達の方を真剣なまなざしで見ると見る。

「皆さん……これが私達、舞草の今の現状です。理解してほしいとは言いません。むしろ正義のあり方としては間違っていると言われてもしかたありません。しかし、現状では舞草以外には折神紫を倒そうという組織が存在しないのです。ですので、皆さんにはもう一度よく考えて頂きたいのです。本当に私達に協力しても良いのか悪いのかを……明日、いえ明後日にもう一度返事を伺います。それと、今まで隠していた事をお詫びします」

朱音様の話はこれで締めくくられた。

しかし、話の内容が内容なだけに、みんな黙り込んでしまった。

エレンちゃんと薫ちゃんに関しては何となく事情をすでに知っていたと思う。

朱音様が最後の話をした時は本当に悔しそうな後ろめたそうなそんな表情をしていた。

恐らくその悔しそうな後ろめたそうな感情は私達に向けられているものだと思っすらと感ずいた。

そんな沈黙がずっと続くかと思っただけの時、最初に口を開いたのは姫和ちゃんだった。

「……私はどんな手を使っても折神紫を討つと決めた。私は折神紫を討てるのなら私はお前達が何をしようが、してようがどうしても良い」

「わ、私も姫和ちゃんに付き添います」

姫和ちゃんに続くように私も言う。

すると朱音様は私と姫和ちゃんの方を見る。

「本当にそれでよろしいのですか？」

「私は……姫和ちゃんに最後まで付き合おうってきめたんで」

「可奈美……」

姫和ちゃんが私を見て眩く。

朱音様はそんな私達を見て何も言わずに目を瞑って頷くと今度は舞衣ちゃん、沙耶香ちゃんの方を向いた。

「あなた達はどうしますか？」

「私は……すいません。少し考えさせてください……」

「私は舞衣と一緒になら」

「わかりました。柳瀬さん糸見さん、私達はあなた達の答えが例えNOだとしても、あなた達がここに居る間の身の安全は保障するので安心してください」

「わかりました」

舞衣ちゃんと沙耶香ちゃんの答えを聞いてこの日の朱音様達と私達との会話は終わり、私達6人は自分達の泊まっている部屋へと戻ったのだった。



その後、結局、部屋に戻っても一言も喋らなかつた私達はそのまま朝を迎える事になった。

恐らく皆、真剣に色々考えていたんだと思う。

だって私も色々考えていたんだから。

朝、私はまた昨日の朝の様に早めに起きると制服に着替えると、皆を起こさないようにこっそりと部屋を出て行った。

だが、昨日とは違うのは昨日は目が早くさめたからだだったが、今は

自分の意思で早く起きていた事だった。

まだ日も昇りきっておらず朝霧がたちこめる中、私は神社の外廊下を歩いていく。

「ここには居ない……どこだろう？」

私はそんな事を呟きながら外廊下を歩く。

途中からは靴を履いて庭に出た。

そこから庭を歩いて神社を半周するように今度は神社の正面へと向かう。

すると、私はそこで彼を見つけた。

彼は神社正面の賛同の真ん中に立ち鳥居の方向を向いて後ろで腕を組んで立っていた。

私は彼の元に近寄る。

すると、最初に話をしてきたのは彼からであった。

「ふっ……まさかあの話の後に君の方から私の元に来るとは思わなかったな」

「マクギリスさん……」

私は彼、マクギリスさんに向かって言う。

すると、マクギリスさんはいつもの笑みを浮かべたまま後ろを向き私の方を見た。

「あの、ひとつ聞いても良いですか？」

「ああ……なんでも聞いてくれてかまわない」

私は昨日の話の後からどうしても聞きたい事があった。

「どうして、あんな事をしようと思ったんですか？」

私はマクギリスさんに聞く。

昨日の夜、私は寝る前に舞草の人に貰った携帯でネットでマクギリスさんが起こしたというマクギリス・ファリド事件について調べたのだ。

案の定、マクギリス・ファリド事件と検索するとすぐにマクギリス・ファリド事件を扱ったサイトを沢山見つける事が出来た。

私はいくつかのまとめサイトやウィキで事件の事を詳しく知った。

東京で起こった事、鎌倉で起こった事。

そして、マクギリスさんや朱音様が言っていたバエルという物の事も調べた。

動画サイトを見ればバエルの戦闘する様子も映っていた。

沢山のヘリコプターがバエルに切られて落とされていく様子……。墜落したヘリコプターで炎上する町の様子……。

マクギリスさんが操る二刀流の白い悪魔を。

それを見ると私は分からなくなった。

道場で私とマクギリスさんと切りあつた時、彼の太刀からは一切の曇りは感じられなかった。

だから私もやってとても楽しかった。

でも、昨日、バエルがヘリコプターを落とす動画を見てから私は分からなくなった。

動画に映っている物を操っているのが本当に昨日の朝に自分と剣を交えた人物だとは思えなかったのだ。

「どうしてとは？」

「私、あの後、調べました。なんであんな事件を起こしたんですか？」

「事件……か。ふつ確かに事件だな。虚しい響だ。私が革命を成功させていれば、事件とは呼ばれず我々の勝利であつた筈なのだが……まあ良い。君の質問に答えよう衛藤可奈美。そうだな……昨日話したアグニカ・カイエルの話は覚えているかな？」

「はい」

すると彼はおもむろにポケットから一冊の緑色の本を取り出すと私に渡す。

「これは？」

「アグニカの伝記さ。私は彼の様に……アグニカが目指した理想に共感したのだ。生まれや所属など関係なく、己が力を研ぎ澄ますことで、この退屈な世界に嵐を起こすことができる……純粋な力のみが輝きを放つ真実の世界を……そんな世界を見たかったのだ……ふつ……しかし、あの時は失敗してしまつたがね。それに……」

マクギリスさんはどこか遠くを見て言う。

「それに……？」

「それに……私は」

マクギリスさんが何かを言おうとする……しかし、その時。

「あの時はという事はまだ、諦めていないという事だな」

知った声が後ろの方から砂利を踏む足音と共に急に聞こえる。

私はその声の主がすぐにわかった。

「姫和ちゃん!？」

「お前が出て行くのを見かけてな。ついてきたというわけだ」

姫和ちゃんが私を見ていう。

「十条姫和か」

「そうだマクギリス・フアリド。質問に答えてもらおうか」

「愚問だな。私の目的は変わらないよ。しかし、今の私は君と同じだ

よ十条姫和」

「私と同じだと?」

「そうだ。確かに私は2年前、革命を起こした。そしてそれは今でも諦めてはいない。しかし、だ。今の私の優先目標は折神紫だよ。しかも、それが大荒魂であるというのならなおさらだ。私は折神紫を討ちバエルの力を世界に示す。そうすれば純粋な力のみが輝きを放つ真実の世界を証明する事ができるのだ」

「貴様の言っている事はどうでもいいが……そうだな。昨日は取り乱したが、私はどんな手を使ってでも折神紫を討つことだ。その為なら、舞草であろうが、なんであろうが、私はなんでも利用する」

「姫和ちゃん……」

私は姫和ちゃんを複雑な気持ちで見つめる。

「ふつやはり君達は英雄の娘だな……では、そんな君達に私から提案させてもらうとしよう」

「提案だと?」

「そうだ」

マクギリスさんは楽しそうに言う。

「どうだろう。まだ恐らく舞草は動かないだろう?ならば、だ。衛藤可奈美、十条姫和。私と模擬戦を試してみないか?」

マクギリスさんからの突然の提案に姫和ちゃんが怪訝な表情をす

る。

「なぜ貴様と模擬戦をしなければならんだ？」

「君達は重要な点を見落としているようだ。昨晚、君達はどんな手を使ってでも折神紫を討つと言った」

「私は言っていないですが……」

私は苦笑いを浮かべて二人に聞こえないくらいの小さな声で言う。
でも姫和ちゃんには聞こえていたようで姫和ちゃんが私を横目で睨んでくる。

「私は2年前、バエルで折神紫と2回に渡って戦っている。残念ながら私はあの時、圧倒的な力を持つバエルをもつてしても折神紫には勝てなかったが……しかし、私は2年前、多くの刀使や自衛隊を倒している。折神紫を討つと言っている君達だ。ならば、この意味は分かるだろう？」

「つまり……貴様を倒せないようでは折神紫には勝てないという事か……」

「そう言うことだ。で、どうかな？」

「……いいだろう」

「姫和ちゃん!？」

「それが折神紫を倒す事に繋がるならな……」

「それでこそだよ十条姫和。それでは……そうだな、今日は流石に私の方の準備が出来ん。明日はどうだろうか？都合がよければ明日の夜、8時……いや、9時ごろに道場に来たまえ。場所は衛藤可奈美が場所を知っている。私はそこでバエルを用意して待っているよう」

「分かった」

「それでは私はこれから用があるので失礼する。衛藤可奈美」

「え？あ、はい」

「君の先ほどの質問にはまたいずれの機会に答えよう」

「あ、はい……」

そう言うときマクギリスさんは、そのまま神社へと戻っていったのだった……。



翌日

夏祭り・夕方

日が山向こうに沈み里全体が茜色からさらに暗い色へと変り始めた頃。

夏祭りで盛り上がっていた里のあちこちでは、路上に松明の火の灯りがそこかしろに灯り半ば幻想的な光景を作り出していた。

私は一緒に祭りの屋台を周っていた姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃんの私を含めた6人で神社へ向かう通りを一同浴衣姿で歩いていた。

二日前はかなり重い話をして皆の空気も澱んでしまっていたが、日を一日挟んだ事やお祭りのおかげで皆、大分、和やかな雰囲気になった。

一番気を張っていた姫和ちゃんも何らかんら言ってお祭りを楽しんだ様だ。

といつつ私もなのだが。

「エレン、そろそろ時間だ」

「そうですね」

先頭を歩く薫ちゃんとエレンちゃんが急にそんな会話をし始める。「かなみん、ひよよん、あと、まいまいと、さーやにも見てもらいたい物がありマース」

「ん？なんだ？」

「グランパが今日の祭りのメインイベントに招待したいそうデース」

「メインイベント？」

そんな会話をしつつ私たちは神社の社への階段を上っていく。

すると、一番上についたとき、私たちの目の前に飛び込んできたのはメラメラと燃える木の柱だった。

それは神社の広場の真ん中に置かれ、周りの人達から注目を得ていた。

「きれい……」

舞衣ちゃんがそれを見て眩く。

私たちがその柱のそばでその光景を眺めていると。

「あつ！姫和ちゃんと可奈美ちゃんみーつけた」

聞いた事のある声が背後から聞こえた。

「え!？」

私は突然の事に驚きの声を出す。

なぜなら、私たちに声をかけてきたのは。

「累さん!？」

私たちに声をかけてきたのは姫和ちゃんと一緒に二人で追っ手から逃げている時に東京で私と姫和ちゃんをかくまってくれた元刀使の恩田累さんだった。

「元氣だった？二人とも」

累さんは手を軽く振りつつ、笑顔を私たちに向けてきた。

私はそれを見てすぐに累さんに駆け寄った。

「累さんこそ大丈夫だったんですか!？あのあと……」

私がそう言うのとそれに対して薫ちゃんが答える。

「大丈夫なはずないだろ」

「るいっぺは逮捕されてたらしいですよ？折神紫襲撃事件の容疑者の

一人として」

「ええ!?それって……やっぱり私たちが押しかけたせいで……」

「あく気にしないで。羽島学長が手を回してくれたからすぐに釈放されたのよ」

「そう……だったんですか……」

累さんは軽い事のように冗談話を言うかのように笑みを浮かべたまま言った。

すると。

「私を忘れてもらっては困るな」

もう聞き馴染みの声が累さんの後ろから聞こえる。

それはマクギリスさんだった。

だが、昨日までのマクギリスさんとは少し違っていて昨日までは着ている服装は私服だったのだが、今日の服はなんだか、白、金、青色で構成されたすごく派手な。

まるでコスプレの衣装のような服装を着ていた。

すると累さんはまるで私たち接するのと同じ様にマクギリスさんの方見た。

「あっこれはどうも。ご無沙汰です中将。もちろん声をかけてもらった事は感謝しています」

「ふっ……ああ、そうか。だが、直接会うのは3年ぶりだったかな?」

「ええ、そのくらいにはなりますね」

累さんとマクギリスさんは親しそう会話する。

すると姫和ちゃんは小声で薫ちゃんとエレンちゃんの方に話しかけた。

「おい、あの二人はどういう関係なんだ?」

「あれ?ひよよんは知らなかったデスか?るいつぺは今は舞草のメンバーですけど、昔はギャラルホルンのメンバーだった事があるんです。でも結構信用できますよ」

「はあ!?!」

姫和ちゃんが素っ頓狂な声を出した所で累さんは私たちの方を向いた。

「あーごめんね。ちよつと久しぶりで話こんじゃって。えつと、あなただ舞衣ちゃんね？それと、沙耶香ちゃんはお久しぶり〜」

「え？沙耶香ちゃんは知り合いなの？」

「襲った。あの人の家を」

「ええ!？」

姫和ちゃんが素つ頓狂な声を出したと思つたら今度は舞衣ちゃんだ。

ちよつとなんだかおかしくて私は小さく笑つた。

「さ。じゃあ行きましようか。呼ばれてるんでしょ？あなた達も。

ファインマンに」

「え？という事はマクギリスさんもですか？」

私はようやくマクギリスさんに話しかける。

「ああ、その通りだ。一応私も関係上、参加する事になっているからね」

「そうなんですか……あの……一つ聞いてもいいですか？」

「なんだい？」

「その格好は……」

「これは」

「それはギャラルホルンの正式な制服だよ」

マクギリスさんが答えようとした瞬間に横から累さんが答えを言ってしまう。

だが、これで疑問も解決だ。

「あーそうだったんですか」

「やつぱり可奈美ちゃんもそう思うよね？派手すぎるよねえこれ。私も前に言ったんだけどねえ……って、ほら、さっさ、みんなファインマンも待ってるし行こ行こ」

「そんなに派手か……?」

マクギリスは累さんの派手という言葉に反応していたが、私たちは累さんに急かされる形で神社の舞台の座布団がおかれている席へと向かったのだった。

マクギリスさんとはという後から入って来て累さんの隣の開いて

いる席に座った。

私たちが席に着くと続々と開いている座布団の席にも人が集まり始めた。

その中にはフリードマンさんも居て、私たちは最前列から2番目の席で一緒に座った。

それから、十分ほど後だろうか。

神社で儀式が始まった。

「孝子さんと聡美さんだ！」

私は小声で言う。

儀式では舞草の刀使で昨日や今朝、稽古をつけてくれた孝子さんと聡美さんがいつもの長船女学院の制服ではなく巫女装束で御刀を持って舞を踊っていた。

その奥の祭壇では神主さんが御神体の側で儀式を行っていた。

それに朱音様の姿も端のほうに見える事ができた。

神主さんが祭壇の扉を開ける。

「あれが御神体？何が入っているんだろう？」

私はその様子を見てこのような儀式に訪れれば一度は誰もが気になるであろう疑問を口にする。

その答えは私の隣に座っていたフリードマンさんが答えた。

「ノロだよ」

「え？」

「折神家に回収されていないノロがまだ存在していたのか……」

姫和ちゃんも驚いている様だ。

「驚いた？数はだいぶ減ったけど、この国にはまだこんな風に、ノロを奉る社が幾つかあるんだよ？」

累さんがフリードマンさんを挟んで教えてくれる。

「奉る……」

「そう。丁重に敬い奉るんだ。可奈美君はそもそもノロがどのようにして生まれるのか、知っているかい？」

「え、えっと……」

「御刀の材料。珠鋼を精錬する工程で不純物として分離される」

私が答えに困っていると舞衣ちゃんが後ろから助け舟を出してくれた。

「さすが、舞衣君だ。御刀になる程の力を持つ珠鋼から分離されたノ口は御刀とほぼ同等の神聖を帯びている。今だ人の持つ技術ではこれを消し去る事はできない」

「でもそのまま放置しちゃうと荒魂になっちゃっちゃうから折神家が管理してるって」

私は学校で教わった事を思い出しながら喋る。

「うん。不正解だな」

フリードマンさんは残念そうに言う。

「ううえい!?あつ……」

予想外の反応に私はつい大きな声を出してしまった。

儀式を行っている朱音様や周囲の人からの目線を浴びる。

「少し場所を変えようか」

それを見てフリードマンさんはそう言った。

累さんも苦笑いを浮かべていた。

私はさすがに恥ずかしくて顔が熱くなるのを感じたのだった。

そして屋外、火の燃えている柱の近く。

私たち一同はそこに集まっていた。

そこで私たちはフリードマンから話を聞いていた。

「かつてノ口は全国各地の社でこんな風に祭られてきた。それを今の様に集めて管理する様になったのは明治の終わり頃だね。主に経済的な理由から社の数を減らしたかった当時の政府が合祀を進めていったんだ。当然そのままではノ口はスペクトラム化し荒魂になってしまう。そうならない様に当時の折神家がノ口の量を厳密に管理していた。でも、戦争の足音が大きくなるにつれ、軍部を中心にノ口の軍事利用を声が高まりましたががはずれてしまったんだね」

フリードマンさんのメガネは燃えている火のせいか反射する光のせいでその下の目を見ることはできなかった。

難しい話けど深刻な、重要な話をしている事は私にも伝わった。

「軍事利用……」

姫和ちゃんがそう呟く。

「ノロの持つ神聖。つまり、隠世に干渉する力を増幅させ、まさに君たち刀使にのみ許された力を解明し戦争に使うとしたのさ。だが、当時の日本軍はこれを解明することはできず結局前大戦でも使われる事はなかった。しかし戦後、米軍が研究に加わった事でノロの收拾は加速した。表向きは危険なノロは分散させず、一箇所に集めて管理した方が安全だと言って日本中のノロが集められていった。しかし、思わぬ結果が待っていた。ノロの結合。スペクトラム化が進めば進むほど彼らは知性を獲得していった」

「それって、ノロをいっぱい集めたら頭のいい荒魂がでいあがったって事ですか？」

「ねねー！」

私のその質問に後ろで薫ちゃんの肩に乗る、ねねが得意げな表情をエレンに向ける。

「あは、簡単に言えばそう言うことだね。今や、折神家には過去に例が無い程膨大な量のノロが溜め込こまれている。それが……」

「タギツヒメの神たる由縁か……」

フリードマンさんの結論を姫和ちゃんが納得したように言った。

「問題はそれだけではないわ……」

するとそれに対して累さんがいつにもない程真剣そうな表情とトーンで言った。

「もしもその大量のノロが何かの弾みで荒魂に……いえ、大荒魂になっちゃったら、もう私達にコントロールするすべは無いの」

「あの相模湾岸大災厄の様にね……」

「どういう意味だ」

フリードマンさんの口から出た相模湾岸大災厄の単語に姫和ちゃんが反応する。

「あの大災厄はノロをアメリカ本国に送ろうと輸送用のタンカーに満載した結果起きてしまった事故……つまり人の傲慢さが引き起こし

た人災だ」

フリードマンさんが重い事を言うように語尾を強くして語った。「彼らの眠りを妨げてはならなかった……ノ口は人が御刀を手にするために無理やり生み出された言わば犠牲者なんだ。元の状態に戻す事が出来ないのならせめて社に奉り安らかな眠りにしてもらおう。それが今の所我々にできる唯一の償いなんだ」

「犠牲者？荒魂が？」

姫和ちゃんが眼光を鋭くして言う。

「それじゃあ、私達がやってきた事って！」

舞衣ちゃんもだ。

それぞれが声を上げる。

「刀使たるもの、御刀を使い荒魂となってしまうたノ口を払い鎮める。その行いはちゃんと人を救ってきたわ。でも……」

「刀使の起源は社に勤める巫女さんだったそうだね。荒魂を切る以上、その巫女としての勤めも君達はちゃんと受け継いでいかなきゃならないって事さ」

こうしてフリードマンさんの話は終わった。

私達はこの学校で教わってきた事を根底からひっくり返す様な衝撃的な話に誰一人口を開かなかったのだった。



そして、この話はかなり後で累さんから聞いた話である。

私達がフリードマンの話聞いて、分かれてから累さん、フリードマンさん、朱音様、マクギリスさんの四人は神社の離れで話をしていたそうだ。

「彼女達の様子はどうでしたか？」

「さすがに堪えた様です」

「そうでしょうね……」

「伍箇伝すら、折神紫によって歪められた事実を教えてきた。そう簡単には受け入れられないでしょうな。特に舞衣君は優等生ですから」「受け入れてもらわなければなりません。刀使であるのならなおさら」

「彼女達はどうするでしょうか？」

「わかりません……ただ、どのような決断をしようとも、私はそれを尊重したいと思います」

「それも、我々舞草の勤め、ですな」

「それはどうか」

累さん、フリードマンさん、朱音様の話は綺麗にまとまったと思っただその時。

障子に軽く背中を預けて縁側の方に立っていたマクギリスさんが口を挟んだ。

「……どういう意味ですか？」

朱音様が怪訝な表情をする。

「ふっ……これは君達、刀使のあり方に関する問題だ。だから、私は極力口を挟むつもりは無い。しかし」

そう言うマクギリスさんは真剣な表情で3人を見た。

「ただ伝統にすぎない。それで果たして良いのかと私は思うよ。フリードマン博士。あなたは彼女達にノ口の軍事利用に関して反対の立場をとった。と私は解釈している。それで間違いないかな？」

「ああ、それで問題ない」

「朱音様と累には聞かなくても答えは決まっているだろう。だが、ここはあえて私の意見を言わせてもらおう。私はノ口の軍事利用……軍事を含めた技術革新こそが、刀使の未来を切り開く物だと確信して

いる。例えば今回話題になっているノロの刀使への投与も私個人としては大した問題ではないと思っっている。むしろ医療分野での研究が深まるのなら進めるべきだ。それで救える命もあると……私は思う。その点だけで言えば私は折神紫の現在の方針には賛成の立場だ。しかし、たった一カ所にノロを集めるのだけは危険すぎると思うがな……」

「あなたは刀使では無いからその様な事が言えるのです。ノロを体内に投与するなど刀使としてあるまじき行為です」

「折神朱音。いや、あなた方には問題の本質が見えていない様だ」

「それはどういう意味ですか？ 准将」

「累さんも怪訝な表情をする。」

「君達はそもそも御刀とはノロとは何だと考えている？ フリードマン博士。あなたは先ほどノロを神聖なものだと言った。しかし、それは断じて違う。この二つは現状ではただ単に危険な物質にすぎんよ」

「……」

「近年、荒魂による民間人や刀使の被害者は少なくなっている傾向にある。これは何故か？ それは折神紫による技術革新によって荒魂に対する素早い対処が可能となったからだ。これを否定する事はできない。しかしだ。それでも刀使には毎年の様に死者は出ないとしても重軽傷者が非常に多い。私の知っている限り、ここ最近で最も大きな被害は長船女学院の笹野美也子という生徒だろう。彼女は荒魂との戦闘で右目の視力と左腕の自由を失っている。君達もこの一件は知っているはずだ」

「それは……」

「朱音様が暗い表情をする。」

「この様な事件はなにもこれが始まりではない。過去に遡れば折神紫体制以前では死者までが数年に一度のペースで出ていた。珠鋼やノロの軍事利用、医療などの技術革新が進めばこの様な被害は最小限に抑えられるだろう」

「それが貴方のバエルだとも言うのですか？」

「ふっ……その通り、と言いたい所だがそれでは60点だな。では、よ

り現実的な話をしよう。累、近年刀使の数は全国的にどの様に推移しているのか知っているかな？」

「え？確か……若干減少傾向にあったと思います」

「その通りだ。近年の少子高齢化の問題は刀使にも無縁ではない。刀使は人気の職種だ。今はそれで何とか持っているが、今後、十年二十年三十年ともなれば話は全然違う物となるだろう。ただでさえ、刀使になるには御刀の適正がなければならない。果たしてその時代の刀使は現在の戦力を維持できているのだろうか……恐らく現行を含めて君たちの主張する旧来の体制では維持は不可能だろう。ではその時代の刀使達の犠牲者は一体どれだけの数になるのか。考えるだけでも恐ろしい事だ。恐らく刀使だけではなく民間人の犠牲者も増える事になるだろう。だから、私はそれを可能な限り少なくするには珠鋼やノロの軍事利用、医療などの技術革新が重要だと考えている」

「確かに君の言う技術革新自体には反対はしないよ。でもね、私は君が作ったバエルの様な危険な兵器を生み出すような軍事利用やノロを人間の体内に入れるような行為は倫理的な観点からもすべきではないと考えているよ」

「それによって救える命があるとしてもかね？」

「そうだ。人間には越えてはならない一線がある。それに、君は先ほど、ただ伝統にすぎると言ったね？では君のギャラルホルンはどうなんだい？ギャラルホルンも同じではないのかな？アグニカ・カイエルの思想に妄信し、バエルを信仰するその様は私から見れば刀使……いや、比べるのもおこがましいね。時代錯誤も良い所だと私は思うよ」

フリードマンさんがマクギリスさんの言葉に反対を示しさらに皮肉をこめて言う。

マクギリスさんは不機嫌そうな表情をした。

「……フリードマン博士。あなたは何か勘違いをしている様だ」

「ほう。勘違いというのであれば、どこが勘違いなのかを指摘してほしいね」

「荒魂に関して言えば三百年前、欧州で荒魂が引き起こした厄災戦と呼ばれる戦争でアグニカ・カイエルは思想や出自に関係無く多くの者

達から支持を集め、荒魂と戦いそして勝利した。その彼は荒魂を葬るべき存在であるとした。崇め奉るものではないとね。彼は荒魂を滅びるべきものだとして、彼や彼の下に集まった人々は純粋な力のみによつて欧州から荒魂を根絶させたのだ。私は人間にとつてただ有害であるのなら荒魂は根絶すべきだと考えている。かつて欧州において成功した事が現在の我々にできない筈はない。その点では、あなた方と我々の思想は対立していると言える。だが、ギャラルホルンは荒魂だけに固執する組織ではない。我々は新たな世界を作る為に行動している。アグニカ・カイエルは生まれや所属など関係なく己が力を研ぎ澄ますことでこの退屈な世界に嵐を起こす事ができる世界を提唱した。このアグニカの思想はその後の欧州世界の秩序の基礎を築き上げたと言つても良いだろう。フリードマン博士、今の日本はかつての欧州と似ているとは思わないか？荒魂が闊歩し、なおかつその社会では多くの歪が生まれている。多くの人々はその歪に気づいていないが、その歪は確実に広がっている。いや、歪みに関しては日本だけではない。アグニカを失い三百年がたった世界中の様々な国々でただ力を持つだけの者達が弱者を虐げている。この状況を打開するには我々は原初に絶ち帰らねばならないのだ。アグニカ・カイエルの魂に」

「それを時代錯誤だと言っているのだがね……世界を本当に変えたいのであればアグニカ・カイエルや遺跡荒らしをしてバエルを持ち出すべきではないよ」

「はあ……フリードマン博士の言う通りです。なぜ最後にアグニカ・カイエルが出てくるんですか……」

朱音様は溜息を吐くと頭を押さえる。

するとマクギリスさんは笑みを浮かべた。

「ふっ……やはり、君達と私は進む道が違うようだな」

そう言うマクギリスさんは縁側の方へと向き3人に背を向けた。

「私は折神紫を倒すまでは君達には協力しよう。しかし、本来の契約通り、この一件が終わった後は協力関係は破棄させてもらう」

「ええ、改めて言われなくても、もともとからそのつもりです」

朱音様ははつきりとそう言った。
そして、マクギリスさんはそれを聞くと累さんにまた明日会おうとだけ言つて部屋を去つていったという。
この話を聞いた時はやっぱり朱音様とマクギリスさんは仲が悪かつたんだなと思つた。



「お前も着替えたのか」

姫和ちゃんは私を見てそう言った。

私はあのフリードマンさんの話のあと、制服に着替えると縁側の所でひとり座つていた姫和ちゃんに近づいていつていた。

そして姫和ちゃんの隣に座る。

「楽しかったね。お祭り」

「ああ……」

「お母さん達も一緒に居たりしたのかな？」

「どうだろうな……」

「……」

「……」

「可奈美……ん？」

長く感じた無言の後に姫和ちゃんが私に何かを言いかける。

だが、その時。

「……小鳥丸」

「千鳥も……」

私達の持つ御刀、私の千鳥、姫和ちゃんの小鳥丸が共鳴を始めた。それを見て私はなんだか笑みがこぼれ出る。

「運命……だったのかな？お母さん達が手にした御刀を持つ姫和ちゃんと私が出会ったのは」

「……」

私の言葉に姫和ちゃんは答えず神社の庭の方を見る。

「行ったのかもな」

すると急に姫和ちゃんがそんな事を言い始めた。

「え？」

「お祭りだ」

姫和ちゃんが笑みを浮かべる。

「お前の母親と私の母と一緒に」

「うん。きつとそうだよ」

私達二人は互いに笑みを浮かべたのだった。

ちょうどその時。

「あつ花火だ」

「そうだな」

里の方から花火が上がった。

色とりどりの花火が夜空に咲き誇る。

私と姫和ちゃんはその光景をただ何も言わず、とはいっても一緒に居てなんだか楽しくほかほかとした温かい感情で見っていたのだった。

◇

午後7時半過ぎ。

私たち一同は朱音様やフリードマンさん、累さんがいる部屋にやって来ていた。

その目的は二日前に考えておくようにと言われていた舞草に協力

するかしないかの答えを話すためだ。

「では、あなた達は我々と行動を共にすると言うのですか？」

朱音様が私たちに聞く。

「はい。前にも言ったとおり、歪みを正し刀使を本来の役目に戻すのであれば目的は同じです。私はその元凶、折神紫を倒す」

姫和ちゃんが朱音様にしっかりと筋の通った答えを言う。

折神紫の部分は語尾を強くして。

しかしこれに対して、朱音様は少し心配そうな表情をして隣に座るフリードマンさんの方を見た。

「優秀な刀使が増えるのは喜ばしい事だと思いますが？」

「あなたは……」

朱音様は一瞬溜息交じりに小さく呟く。

そして一瞬の間において朱音様は私達の方を見た。

「そうですね。気持ちは分かりました。舞草はあなた達を歓迎します。ただし……」

朱音様が真剣な表情で歓迎の言葉の後に何かを言おうとする。

しかし、その時だった。

「大変です!!」

廊下のほう側のふすまが突然、勢いよく開かれ孝子さんがそう言って部屋に入ってきた。

「何事だ」

するとその瞬間にフリードマンさんの表情が強張り強い口調で孝子さんに聞いた。

それに対して孝子さんは焦った様子でこう言った。

「特別祭祀機動隊が里に踏み込んできました!」

「なんだと!」

「なんて事……」

孝子さんの発した言葉にフリードマンさんは驚愕した表情を浮かべ、朱音様も信じられない様な表情をしたのだった。

私はこの時、大変な事になるとすぐに直感で感じた。



『こちらは、特別機動隊です。この地域は特別災害予想区域に指定されました。我々の指示に従い、速やかな行動をお願い致します——』
私たちが神社の建物の外に出るとそんな拡声器で呼びかける男の
人の声が響いていた。

私たちは途中、累さんとも合流すると急いで神社の広場へと向かう。

この神社は山の上に作られているから里で何が来ているのかを見渡す事ができるのだ。

私たちがそこに到着すると、私たちよりも先にその場所に立っている人がいた。

腕を後ろで組んで背が高く金髪の髪に派手な服装を来た彼。

マクギリスさんだ。

「君たちも来たか」

「准将！ いったい何が!？」

累さんがマクギリスさんに聞く。

私たちが焦っている一方でマクギリスはいつもとは変わらない雰囲気だ。

「それは直接見たほうが早いだろう」

マクギリスさんはそう言うとき里のほうを見た。

私たちもマクギリスさんの立っているあたりに着くと里のほうを見渡す。

すると、そこには衝撃的な光景が広がっていた。

お祭りの出店が出ている通りでは警察の機動隊が舞草の刀使たち
対峙していたり、刀使たちが機動隊に銃を向けられ逮捕される光景が
広がっていたのだ。

「折道家!？」

「荒神じゃなさそうだな……」

「ねー……」

そのあまりの光景に姫和ちゃんは驚きの声を上げ、薫ちゃんも、ねもまずそうに言う。

「我々は既に罪人扱いというわけか……」

フリードマンさんも厳しい表情で言う。

「でも……どうしてこの里の場所が……」

「方法など幾らでもあるさ。だが、今はそんな詮索をしている場合ではないだろう」

「貴方の意見に賛同するのは癪ですが、その通りです。今はそんな詮索をしている場合ではありません」

累さんの疑問にマクギリスさんと朱音様が答える。

「この里に居る人間を全員拘束しようかと?」

「だろうね。その上で舞草に関わる人間を選別し逮捕するつもりなのだろう。さて、いかがなさいますか?」

エレンちゃんにそう言うと言おうとフリードマンさんは朱音様にそう聞く。

「ここで捕らえられる訳にはいきません」

「では、戦略的撤退といきますか」

「撤退ってどうやってデスカ?」

「この調子だと難しいかもしれないが、潜水艦だろうな。あれの所属はアメリカ海軍のままだ。警察組織の彼らが手を出せる相手ではない。よろしいですか朱音様?」

「ええ」

朱音様がそう頷くとフリードマンさんはすぐに手を一回叩いた。

「決まりだ!」

「了解です。では、二手に分かれましょう。私たちは朱音様達を棧橋へ」

「私は残っている刀使達を集めてここで迎え撃ちます」

フリードマンさんに米村さんと、小川さんがそう言う。

「聡美、あとは任せた」

「ええ!」

そう言うと言おうと小川さんは走っていった。

その様子を見て私も何かをしなくちゃと思った。

「あの、私達は？」

私ははつきりとフリードマンさんにそう聞く。

するとその質問には米村さんが答えた。

「お前達は私と来い！エレンと薫もだ！」

「では、そうと決まれば行動だ！」

フリードマンさんがそう言うのと私達は皆頷き、移動を始めた。

ただひとりを除いて。

私はそれに気がつくとすぐに口を開いた。

「あっ！皆、ちよつと待って！マクギリスさんはどうするんですか!？」

「あっ忘れてました」

私の言葉に一同は立ち止まり朱音様からは失念していたと声が漏れる。

「君達は先に潜水艦へと向かうと良い。私はバエルをとりにかねばならない。栈橋で合流を。間に合わなければ出港してかまわない」

「わかりました。ではそのように」

マクギリスさんの言葉に朱音様はそう返すと今度こそ全員で行動し始めたのだった。

マクギリスさんは道場のほうへ。

私達は潜水艦へと向かった。



「こんな抜け道が……」

姫和ちゃんが洞窟の中でそう呟く。

「ここは大昔の水軍の拠点のひとつだからね。いざと言う時の備えは万全だ！さあ行こう！」

私達は、洞窟などの抜け道を通って岩で断崖絶壁となっている海岸線に作られた小さな道を進んだ。

洞窟を進んだ後はロープでその細い道に下りたりして私達は十数分くらいたつた後だろうか？

私達は潜水艦が留まっている海に面した広い洞窟内の栈橋のすぐ側にいた。

しかし……。

「やはり既に手がまわされていたか……」

孝子さんが、岩の陰から少しだけ顔を出して栈橋のほうを覗き込み小さく言う。

「撃つてくるデスか？」

「たぶんね。ほら、見てごらん」

フリードマンさんが冷静に状況を説明する。

「彼らはスペクトラムファインダーを装備しているだろうか？ 舞草の構成員は人間だよ？ 摘発するのにあんな物が必要だと思うかね？」

「じゃあ……」

私は良くわかつては居ないものの感覚で何となく察しがつく。

「伊豆での事を思い出して下さい。目の前に荒魂がいたというのにスペクトラムファインダーはピクリとも反応しませんでした」

「まさか、官給品に細工を？」

エレンちゃん言葉に舞衣ちゃんが答えそれをフリードマンさんに向かって言う。

「恐らくそうだろう。アレはS装備同様、折神家から齎された技術で作られた物だ。今なら、そう。御刀に反応するように設定されている、といった所か」

フリードマンさんがそう言ったちようどその時。

潜水艦の前に陣取る機動隊に動きがあった。

「荒魂の反応複数あり！ すぐ近くです!!」

「気をつけろ！ 総員警戒!!」

機動隊が一齐に私達の隠れている方向を見てくる。

「っ!？」

「このままだと、我々は荒魂として処理されるぞ！」

フリードマンさんが焦った口調で言う。

「荒魂が……！人を荒魂呼ばわりするか!!」

姫和ちゃんが怒りのこもった声で言う。

「くっそ！行くぞ!!」

孝子さんが御刀を握って警官隊に突撃しようとする。

「お待ちなさい」

だが、それを朱音様は冷静な口調で止めた。

「彼らは命令に従っているだけです」

「わかっています」

孝子さんは朱音様にそう言われると冷静になった様で一瞬気がついたように言った。

そして孝子さんは岩陰から出て行くと銃を持った警官隊の方へと走る。

その警官隊からは。

「本当に刀使が荒魂に!?!」

「う、撃て！あれは人ではない！荒魂だ!!」

困惑の声がこちらにも聞こえる。

だがしかし、次の瞬間には耳が痛くなるほどの銃声が洞窟内にこだました。

ズダダダダダと銃声が始まる。

孝子さんと、私達と一緒にしてきた舞草の刀使2人も警官隊へと一気に切り込む。

警官隊の盾を装備した人たちの上を飛び越え3人は御刀で警官を何人も峰打ちで気絶させていく。

だが、その時。

銃声とは違うズガンという思い音が響いた。
瞬間。

「ぐわっ!?!」

舞草の刀使の一人の胸の部分に矢が刺さる。

警察が使用したのは特殊なボウガンだった。

「っ!?!写しをはがすな!」

孝子さんはその刀使を仲間の刀使と抱えつつ一旦、私達が隠かれる

岩陰へと下がると矢を受けた刀使を運ぶ。

そこまで来ると私と舞衣ちゃんが手伝い岩陰に矢を受けた刀使を隠した。

孝子さんは一旦下がり、もう一人の刀使が戦闘を継続する。

「気をつけて！」

「しつかりしろ！今、写しをはがせば生身の体に矢が残る！」

そう言うのと孝子さんは刺さっている矢を持った。

「少し痛むぞ……」

「やって！」

負傷した刀使が痛みをこらえて言う。

「いくよー！」

そういつた瞬間に孝子さんは矢を引き抜いた。

矢が刺さっていた刀使は矢が抜けた瞬間に力尽き写しが消え、気絶する。

「これって……！」

「刀使の動きを封じる為の武器だろうね……！」

舞衣ちゃんは刺さっていた矢を見て驚き、フリードマンさんは語尾を強めてそう言った。

「姉さまが……こんな物まで用意するなんて……！」

そしてそれは朱音様も同じ……いや、もつとも驚愕していたの朱音様だった。

信じられない、まさにそういった表情を朱音様はしていたのだ。



それから孝子さんと、舞草の刀使の人による警官隊との激しい戦闘は最終的に孝子さんが矢の攻撃を胸に受けつつも辛うじて勝利を収めた。

ただ、警官隊と同様に私達についてきた舞草の刀使の人も警察から

の激しい攻撃で写しは剥がれすでに気を失ってしまっていた。

だが、このタイミングは脱出の唯一の時だった。

一番長い荷物、つまり御刀の柵々切丸を持つ薫ちゃんが先に潜水艦に乗り込み物資搬入用のハッチへと急ぐ。

「朱音様！お早くー！」

「すみません」

孝子さんがそう言うのと朱音様を先等にフリードマンさん、累さんの順で栈橋を渡って潜水艦へと乗り込む。

「衛藤、柳瀬はやくしろー！みんな乗り込めー！」

次は私達だ。

私達は続々と栈橋を渡って行く。

全ては順調に行っていると思っていた。

しかし……。

「ふふふ……」

先ほどまで警官隊から隠れていた岩陰のそばで一人の少女が不敵な笑みを浮かべていた。

よく見れば、御前試合の時に見た娘だ。

孝子さんはそれに気がつくのと栈橋へと向かっていた足を止める。

「舞衣ちゃん早くー！」

「うんー！」

私は潜水艦のハッチの所で最後に渡ってきた舞衣ちゃんを待っていた。

だが、孝子さんが動くこうとしない事に気がつく。

「先にいけ……朱音様を頼む！」

「孝子さん!？」

舞衣ちゃんも声をあげる。

そしてそのほぼ同時に潜水艦はゆっくりと動き始めた。

「あーあ。間に合わなかったかーぎーんねん」

「……神社に居た刀使はどうした？」

そう言うのと孝子さんは御刀を構える。

「刀使ー？あれがー？ぜーんぜん手ごたえ無かったんだけどー？あつ

でも、この御刀持ってた人はちよつとはマシだったかな！」

そう言うと少女は一本の御刀を孝子さんの方へと投げる。

「聡美……」

「やるのー？そんな状態で？待っててあげるからその矢抜いたら？」

そう言うと少女は楽しそうに写しをはる。

「なんなら手伝ってあげようか？」

少女は挑発的な事を笑みを浮かべたまま言う。

「必要ない……荒魂に頼っているような刀使に負けはしない!!」

聡美さんは弓を抜くとそう少女に言い放つ。

すると少女は、途端に不機嫌そうな顔をした。

「……あつそ」

「っ!？」

瞬間、少女は迅移を使って聡美さんに近づくと聡美さんを御刀で突き刺した。

「ぐわあああああ!？」

少女は物凄いスピードで聡美さんを切っていく。

「聡美さん!!」

「あの娘、すごく強い……」

舞衣ちゃんが声を上げ私は少女の剣撃に驚く。

すると、潜水艦のハッチから姫和ちゃんが上がってきた。

「おい！お前達早く中へ入れ!!」

姫和ちゃんが私達に言う。

だが、姫和ちゃんが上に上がってくるまでには聡美さんと少女との戦いは終わっていた。

少女は聡美さんに御刀を突き刺すと怒った様子で何かを言う。

だが、それがなんなのかは、もうそこから潜水艦が離れている為に聞こえない。

すると、少女は突き刺していた御刀を抜き聡美さんの写しが剥がれた事を確認すると今度は私達の方を見た。

その瞬間に私達は気づく。

まだ、潜水艦は出港したばかりで刀使ならば棧橋を使わなくても飛

び乗れる距離に居たのだ。

少女と私の視線が合う。

そして少女は笑みを浮かべた。
来る。

私が……いや、恐らく姫和ちゃんも舞衣ちゃんもそう思った。

しかし、その時だった。

突然、突風が巻き起こったのだ。

上の方から強い風が吹き私達三人と少女の髪を舞い上げたのだ。

そしてその突風と共に奇妙な聞いた事のない音が響いた。

何かが勢いよく噴射されている様な音を私達はその音がする方向を向いた。

そこには……。

『どうやら、少し遅かった様だな』

拡声器で喋ったような機械を通して聞こえる声が洞窟内に反響する。

「マク、ギリス……さん？」

私は眩く。

そこには……。

「あ……あれは！」

「まさか……！」

姫和ちゃん、舞衣ちゃんが私と同じ方向を見て驚いた様に言う。

そこには、私達の上、厳密に言えば洞窟の海側の、少女がいる船着場側の方寄ってそれは突然上方より現れた。

二つの翼から蒼い光を噴射しながら強烈な風を巻き起こしながら現れたその巨体。

大きさは三メートル……四メートルくらいだろうか？

人型で、背中に生えた翼から光を噴射しその白銀色の巨体を浮かばせている。

両手には金色に輝く二刀の大きな剣を持ち、そして。

そして、私達を見下ろす様なその人型の頭部分の目からは赤い光がまるで獲物を獲たかのように光っていた。

その外見はどうみても、ロボット。

でも、その威圧感は悪魔や天使とも言って良いとも思えた。

それは洞窟の海側の出口の上からまるで落ちて来るかのように。

かといってそのまま落ちるといいう意味ではなく途中、途中で背中への噴射している青い光を調整しながら降りてきていた。

間違いなかった。

そのロボットは私達がぼうっとと見ている間に少女と対峙するように船着場へとガシヤンと重い音を立てて降り立つ。

その間、3秒あるかないか。

間違いないこのロボットは……。

「ガンダム・バエル……」

私はそのロボットの名前を呟いた。

間違えるはずがなかった。

「……………」

私達が気をとられていると。

そのロボット。

ガンダム・バエルから再び話しかけられた。

つまり、それを操縦するマクギリスさんからだ。

『衛藤可奈美』

「あっ……は、はいー」

急に話し掛けられて私は内心ビククリする。

本当にマクギリスさんがあの中に居るんだなあと思った。

『ここは私が時間を稼ごう。緊急時のマニュアルに従い、後ほど合流ポイントで合流する。そう、折神朱音に伝えてくれ。さあ早く君達は潜水艦の中へ』

「わ、分かりました！」

私はそれを聞くとまだ呆然と見ている姫和ちゃん、舞衣ちゃんに呼びかけて潜水艦の中へと入る事にした。

「あ、ああ……そうだな」

「さあ、舞衣ちゃんも！」

「う、うん！」

そう姫和ちゃんの返事を聞くと姫和ちゃんから先にハッチの梯子を降りていく。

それを確認すると私は次に舞衣ちゃんを先に潜水艦の中へと入らせた。

そして最後に私がハッチの中へと入る。

私はハッチを閉める前にもう一度だけ、マクギリスさんの乗るバエルの方を見た。

もう潜水艦は洞窟から最後尾が完全に出了た状態だ。

だが、その後ろではバエルと少女が対峙している。

でも、なんだろう……。

「おい可奈美！はやくハッチを閉めろ！」

「う、うんーごめん……」

私は姫和ちゃんに言われ潜水艦のハッチを閉める。

私の心になにか引つかかった所があった。

マクギリスさんのバエルと向かい合っていた少女。

少女も私達のように驚いていた様にも見えたのだが……。

私の目には私達の驚愕の感情とはどこか違う……なにか特別な感情も籠っていた様に見えたのだ。



翌日。

『あっ！ただいま美濃関学院に警察が突入しました！繰り返します！美濃関学院に警察が突入しました！』

そんなテレビが全国に一齐に速報として流れていた。

私と舞衣ちゃんが通っている私達の学校に警察の人達が次々と入っていく……。

悪夢でも見ているかのような現実離れた光景だ。

『各県警は大規模テロ関与の疑いで、伍箇伝の長船女学園と美濃関学院に強制捜査に入りました』

テレビの女性アナウンサーがそう伝える。

その番組のテロップはこうだ。

速報。

長船だけでなく、美濃関も関与？

伍箇伝テロ関与の疑いありか？特別機動隊により強制捜査。

『当局によりますと、両校共に刀使による戦闘部隊を編成し、テロ行為の準備を進めていた疑いです。警察は複数の学校関係者の身柄を拘束し現在、取調べを行っています。なお、警察はこの事件について深く関与していると思われる折神家関係者の女を重要参考人としてそ

の行方を追っています』

中にはこんなテロップを使っているニュース番組もあった。
速報。

長船と美濃関が大規模テロ関与の疑い。

ギャラルホルンの再来か？

いずれにせよ日本中の多くの人々が不安そうにこのトップニュースを注目していたのだった……。



舞草の隠れ里から潜水艦に乗って脱出した私たちは、その後、時間にして夜が開けるまで海の底で時間を過ごした。

でも、その間に一度だけ海の上に一回だけ浮上して、マクギリスさんのバエルと合流しバエルを潜水艦の中に回収したりもした。

潜水艦の中では皆が落ち込んだ雰囲気だった。

特に薫ちゃんやエレンちゃんの落ち込みようは端から見ても分かった。

二人は何も言わなかったがそれでもそれは伝わってきたのだ。

それもそうだろう。

なにせ二人は私たちよりも長く舞草に関わってきたのだから。

そして、私たちは潜水艦のこじんまりとした家具などが一式置かれている部屋で私、姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん、累さん、朱音様と一緒に状況の確認をしていたのだっ

た……。

「……長船と美濃関が？」

「平城も警察によって封鎖されたそうです」

累さんの報告に朱音様は信じられないといった様な深刻な表情をしていた。

累さんの言葉にも事態の深刻さがにじみ出る。

「うちの学長は！」

「……」

私の隣に座っている薫ちゃんが珍しく語尾を強めて累さんに聞くと、累さんは無言のまま首を横に振るう。

「……」

累さんの答えに薫ちゃんは俯いた。

いつもなら絶対にこんな薫ちゃんは見れないだろう。

それだけ事態が悪化している事を表しているのだと私も分かった。

「孝子さん達どうなったんだろう……」

舞衣ちゃんが呟く。

だが、それに答える声は存在しなかった。

すると、丁度その時、思い鉄の扉が開く音がしてフリードマンさんが入ってきた。

見るとその後ろにはマクギリスさんの姿も見える。

「各地に潜伏中の舞草のメンバーも皆、折神家の監視が強化されて身動きが取れなくなっているようだ。一気に窮地に追い込まれたねえ……だいぶ前から仕組んでいたんだろう」

「どうして里の事が知られていたのでしょうか」

フリードマンさんがやられたという表情で言ったあと、累さんが聞く。

「舞草内に内通者がいた痕跡はないし、あの里の情報は地図やネット、衛星からもリアルタイムでデリートし続けているからね。知られていたというより、何らかの方法で見つけたんだろう。もしかすると、我々の今の位置も筒抜けかもしれないな」

「まさか……」

フリードマンさんの話を聞いた朱音様は真っ先に疑いの目をマクギリスさんの方へと向ける。

すると、マクギリスさんは壁に背を預け腕を組んだ状態で言った。「ふっ……その様な詮索は不要だよ折神朱音。私は今回の件には何もからんでいない。むしろテロリストである我々が公的機関の裏組織である君たちを裏切るメリットがないからな」

「はあ……そうですよね」

朱音様も分かってて言ったのだろう。

疲れた様のため息をはいて言う。

「私はフリードマン博士の仮説には賛成しよう。だが、恐らくこの潜水艦の位置がバレている可能性はほぼゼロに等しいだろう」

「なぜそう言えるのかね？」

「この潜水艦の所属はアメリカ海軍だ。つまり、この潜水艦の位置が折神紫にバレているのであれば、それはアメリカが我々を売ったという事に他ならない。もしそんな事が起きているのだとすれば、我々はずでにあの洞窟で海上自衛隊なりに押さえられていたはずだ。だが、現実はそのようになっていない。そして、今も我々は無事のままだ。これが意味するのは言わなくも分かるだろう」

「なるほど。本国はまだ我々を見限ってはいないという事か……」

「だが、それも時間の問題だろう。なぜなら、もはや君達、舞草は我々ギャラルホルンと同じテロリストの烙印を押されたのだからな。やっつけてくれるな。折神紫……」

「……………」

マクギリスさんが不敵な笑みを浮かべて舞草の事をテロリストとそう言うのと朱音様は俯いたまま悔しそうな表情をした。

だが、すぐに前を向く。

「大荒魂が力を増している様ですね……」

「問題は邪魔者がいなくなった奴らが次に何をするつもりなのか……」

「まさか！二十年前のような!?!」

フリードマンさんの言葉に累さんははっとした様子で言う。

「それで済むかな？今や折神家に集められたノ口の総量はあの時以上のものだよ」

「あつ……」

累さんはフリードマンさんの指摘に言葉を失った。

「まさに、ステイルメント。打つ手なしだね……」

フリードマンさんのその言葉に一同はさらに沈黙する。

だが、それをエレンちゃんが破る。

しかし、それはとても希望的でもなんでもない事だ。

「このまま予定通り舞草に向かいますか？」

だが、その言葉にフリードマンさんと朱音さまは苦しそうな表情をした。

「いつそ、国外にでも逃げるかい？この調子だと恐らくアメリカになるとは思うけどね」

フリードマンさんは苦笑いを浮かべてそう言った。

敗北。

その言葉が誰の心の中にも浮かんだのだった……。

だが、その時。

「まさかとは思うがここで逃げ出すのではあるまいな？」

マクギリスさんだった。

マクギリスさんが口を開いたのだ。

しかし、その表情はどこか残念そうに聞こえた。

「戦力も殆ど残されていない今の状態でどうしろと？いずれにせよこの状態では身動きがは取れないよ」

フリードマンさんが聞く。

「ふっ……なるほど。脱出を選択するか。私の知る君達なら、当然戦いを選ぶものかと思っていたが……」

そう言うとマクギリスさんは、私たちに背を向けた。

「何処へ行くのですか？」

朱音様が聞く。

「君達が何処へ行くこうとも私はかまわない。しかしだ。私と君達の契約は履行してもらおう」

「何を求めると?」

「この艦の進路を鎌倉の方面へ向けてもらいたい。沖合い100kmほどの地点でも構わん」

そう言うのとマクギリスさん鉄の扉を開けた。

「私は包囲網を単独で突破する」

そう言い残しマクギリスさんは部屋から出て行ったのだった。

私たちはただ、この状況で単独で突破すると言い放った彼を半ば驚きをもって見ていたのだった。

◇

私はひとり潜水艦の中を歩いていた。

あの状況確認の後、私たちは一度自分の部屋に戻ったのだが、私はトイレに行くと言って部屋から出てひとり考えていた。

私はどうすれば良いのだろうか。

正直、この状況にはもう絶望感しか感じていなかった。

舞草の人たちもやられてしまって、もう残っている刀使は私達だけ。

最初の状況に戻ったと言えばその通りかもしれないけど、最初の時だって私達の学長や、舞草の人たちが助けてくれたからここまで逃げる事ができたのだ。

でも、もうその舞草の人たちの力は頼れない……。

言うなれば日本全てが私たちを狙っている……。

でも……。

それでも姫和ちゃんは例え独りでも紫様を倒す為に行くだろう。

その時に私はどうすれば良いのだろうか。

フリードマンさんの行ったとおり逃げる?

姫和ちゃんをおいて……そんな事は私にはできない。

じゃあどうすれば良いのか。

姫和ちゃんと一緒に二人だけで紫様を倒しに行く……？
無理だ……。

正直、私にでもこのままだった二人だけでは紫様の所まではたどり着けるとは到底思えない。

みんなを頼る？

もしかしたら、命の危険があるかもしれないのに……。

私はどうしたら良いのだろうか……？

そんな事を考えている内に私は薄暗い潜水艦の格納庫らしき場所にやってきていた。

そこは多分、ミサイルか何かを発射する為の場所なんじゃないだろうか。

S 装備の射出コンテナが並んで置いてある。

私はそこを真直ぐ歩いていく。

明かりは潜水艦の中ではよく見る赤い照明だけだ。

すると、私は一番奥の方だけが赤い照明ではなく何か普通の白いライトか何かで明るく光っている様子が見えた。

私は光に釣られる虫の様にその光に吸い寄せられていく。
すると、私はそこで金属音が響いているのに気がついた。

何かを組み立てる様な調整している様なそんな音だ。

そして、私はそこにたどり着く。

「あつ……マクギリスさん」

「ん？衛藤可奈美か」

そこに居たのはマクギリスさんだった。

マクギリスさんは胸の部分が大きく開いたガンダム・バエルの前で座り、そのバエルの中に繋がる幾つもの配線が繋がる数台のノートパソコンの画面を見て何か作業をしていた。

「どうした？」

マクギリスさんはさっきの部屋での事は、まるで無かった事のように普通に話しかけてきた。

「あの……マクギリスさんは、この後どうするんですか？」

私はその時、心から疑問に思っている事をそのまま口に出してしま

う。

「ふっ……先ほど言った通りだよ。私は単身で折神紫を討つつもりだ」

「確かにそのバエルなら出来そうですね……」

「ああ、私と折神紫には少なからずの因縁がある。私はバエルの力を奴らに示さねばならない。それに石動、私の副官には万が一私が居なくなつた場合に備えて指示を出している」

「そう、ですか……」

「ところでだが、君が聞きたいのはそんな事ではあるまい」

「え……？」

マクギリスさんは作業の手を止めると、立ち上がり私を見る。

「君はどうしたいんだ衛藤可奈美」

「それはどういう……」

「そのままの意味だよ。私はこれから、単身で折神紫の元へと行くつもりだ。だが、君達は、いや。君はどうしたいんだい？このまま逃げするのも良いだろう。確かに理性的な判断だと言える。しかし、十条姫和は違うだろう。あの目は私と同じ目だ」

「私、私は……」

「……まあ良く考えると良い。だが君は……」

「……っ？」

「ふっ……いや、なんでもないよ。さあ、早く仲達間の元へと戻りたまえ。そこで答えを見つけると良い」



「私、戦いたい」

私と姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃ

んは休んでいるように累さんに言われた為、船室に戻っていた。
その場に居た全員が何もいわずにその場が沈黙に支配される。

そんな時に私達の中で一番最初にそれを言ったのは舞衣ちゃんだった。

「マクギリスさんみたいな事言うつもりはないけど……だって……あんなの酷すぎる……」

「舞衣ちゃん……」

私は意外な舞衣ちゃんの反応に少し驚く。

「十条さん……」

舞衣ちゃんはそう言うのと立ち上がると姫和ちゃんの方を真剣な眼差しで心の靄が晴れた様に話し始めた。

「私、あなたに戦う理由が無いって言われて、ずっと考えてた。自分がどうしたいのかって……私は可奈美ちゃんに追いつきたくて、沙耶香ちゃんを放っておけなくて、ここまで来たの。ただそれだけで、状況がどうなっているのかも、紫様の事も実感がなくて……」

「舞衣……」

沙耶香ちゃんが呟く。

「でも、聡美さんや、孝子さん、他にもお世話になった沢山の舞草の人たちが戦う姿を目の当たりにして……改めて思ったの。これ以上目の前の人達を傷つくのは嫌だって……！私の力じゃすべての人達を助ける事はできないかもしれないけど、せめて見える範囲の人達だけでも助けたい。それが私の戦う理由だって」

その瞬間、もう諦めかけていたその場の全員の心に多分、舞衣ちゃん気持ちは届いていた。

それは無論、私にも。

「私も」

「沙耶香ちゃん」

「私にはそれしか出来ないから」

沙耶香ちゃんが舞衣ちゃんの言葉に一番に反応しそれは他にも広がる。
「オレも里の皆の敵を討つって決めた。このまま黙っていられるか

……！」

薫ちゃんだ。

薫ちゃんからは怒りのこもった声が聞こえる。

すると、エレンちゃんから冷静な声が響いた。

「ちよつと待つてクダサイ！残った刀使は私達だけなんですヨ？そもそもこの状態でどうやって……」

「この艦を下ろしてもらって孝子さん達の無事を確かめに行きます」

「それから鎌倉に戻る」

「敵は一人じゃありませんよ？大荒魂に辿り付くまでには、きっと沢山の障害があります」

「十条さんは、一人でその障害をかいくぐって紫様に一太刀入れました」

舞衣ちゃんがそう言うのと今までベットに横になっていた薫ちゃんが一気に起き上がる。

「そのペツタン女にできてオレ達にできないはずは無い」

「ねー！」

薫ちゃんとネネもそう言う。

するとエレンちゃんはため息を一つつくど立ち上がった。

「やれやれデース。分かりました。五人だけでは頼りないですから私も一緒に行きますよ！」

エレンちゃんは笑みを浮かべて言う。

そして、姫和ちゃんの方を向いてウイंकをした。

多分、最初からこの答えになると分かっていたのだ。

私はなんだか嬉しくなった。

「姫和ちゃん！皆で行こう！」

私は姫和ちゃんに向かってそう言う。

「……良いのか？」

姫和ちゃんが皆に聞く。

それに対しての返事はもちろん全員がイエスだった。

全員の返事を聞くと姫和ちゃんも薄っすらと笑みを浮かべた。

「ありがとう」

姫和ちゃんが真摯にそう言う。

なんだかこつちまで気恥ずかしくなるほどだ。

だが、その時、誰かのお腹の音がなった。

「今の……」

「お腹の音だよね？」

「ひよんデスカ？」

「ち、違うー！」

「……私」

腹の虫がなったのは沙耶香ちゃんだった。

「そう言えば、お昼食べるの忘れてたね」

舞衣ちゃんが思い出すように言う。

そうだ。

言われて見れば今日は色々あったせいで何も食べていなかった。

そう意識すると、なんだか私のお腹もすいてくる。

「腹がへっては戦はデキマセン！潜水艦の非常食なら沢山あります

ヨー！」

「あんまり美味くないがな……」

「ねえー……」

なんだか皆の顔に笑顔がまた戻ってきて私も嬉しかった。

私も笑みを浮かべる。

しかし、その時だった。

「ツ!？」

「なっ……今……これ!？」

「なんだこれは!？」

突然の事だった。

その場に居た全員の体から写しの様な写しがダブっているかのような変な現象が起きたのだ。

それにその瞬間、背筋がゾクゾクの嫌な感じがした。

そしてそれは、その場に居た全員がだ。

皆が困惑する。

「えっ」

「なっ……」

「ワッツ!？」

よく見ればネネも同じ現象が起きていた。

後々分かる事だがこの現象は日本中で起こっていたらしい。

私達はすぐに朱音様、フリードマンさん、累さんがいる部屋に走った。

私達が来るとすぐにフリードマンさんから第一声がとんだ。

「どうしたー!」

見るとフリードマンさん以外のその場に居た全員にその未知の現象が起こっていた。

だが、丁度その時、その現象は収まっていった。

「あっ……戻っ……た?」

「今のは一体……」

「グランパはなんともなっていないませんデシタね……」

「ああ……」

するとフリードマンさんは深刻そうな表情をした。

それを見た舞衣ちゃんが言う。

「フリードマンさん……何か、知っているんですか?」

そして、フリードマンさんは重そうな口を開いたのだった。

「……この現象は刀使達にしか起こらない……以前同じ現象が確認された事がある。20年前のことだ……恐らく……隠世で何か大きな変化が起こったのだろう……そして、大荒魂が出現した……」

フリードマンさんの言葉にその場に居た誰もが息を呑む。

それもそうだ。20年前の大荒魂といえば一つしかない。

全ての元凶……相模湾岸大災厄だ。

「……これは国家レベルの災害です。一刻の猶予ありません。この事をすぐにでも人々に知らせなければ!」

朱音様が言った。

「どうするんですか?」

累さんからは当然とも言える反応が返ってくる。

だが、私達が思っていたよりも自分達以外の国家レベルでの危機を

目の前にした朱音様の対応は早かった。

「まず、真直ぐ横須賀へと向かいます。報道陣を集められますか？」
「なるほど。マスコミを使うのか。今、貴女が姿を表せば国中の注目を集めるでしょうね」

朱音様は頷く。

「そこで私が全ての真実を語ります。折神家が隠してきた事も……そして、タギツヒメの事も」

「それが明らかになれば、もはやこの国だけの問題だけでは無くなるかもしれないな……だが、折神紫がそれを許すとは思えん。最悪の場合もありえます」

フリードマンさんは目線を鋭くして言う。

「私に何が起きようと、舞草には協力者が沢山居ます！」

朱音様が語尾を強めていうと今度は累さんが珍しく大きな声を出した。

「駄目です！朱音様の代わりは居ません！」

「逆に言えば、貴女さえ無事ならチェックメイトにはならない。この例えは不敬ではありませんがギャラルホルンの様に……」

「ですが……」

朱音様は声を上げようとするが、反論ができずに口を閉じてしまう。

再び室内が沈黙に包まれる。

「では、横須賀からは私達は別行動をとります」

すると、今度は姫和ちゃんが沈黙を破った。

その発言に朱音様、フリードマンさん、累さんは驚いた様な表情をする。

「なにを、するつもり……？」

「折神紫を討てば全ては終わる」

「攻撃は最大の防御と言いマース！」

「そんな無茶な！」

「あなた達……」

朱音様、フリードマンさん、累さんは私達の顔をまじまじと見る。

すると、累さん私達の顔を見てソファに座り込んだ。

「……止めても無駄なようだね。朱音様といい、君達といい、本当に刀使というのは……」

「分かりました。お願いします」

「朱音様!?!」

累さんは私達の行動を止めようとしないう朱音様に驚きを示す。

「ですが、せめて私にできる事はお手伝いさせてください。あなた達が戦いやすくできる様……少しでも多くの敵を私の元へ引き付ける様にしましょう」

「朱音様……」

朱音様の自分の身を危険にまでさらす行動に舞衣ちゃんは感謝からか声を漏らす。

「ところで、どうやって折神紫の元へたどり着く?」

「え?それは……」

薫ちゃんの質問にエレンちゃんが困る。

すると、その時だった。

私の頭の中にある光景が思い浮かんだのだ。

「そこで私は声を上げる。」

「ねえ、あれ使えないかな?」

この何気ない私の考えが後に包囲網の突破口になるとはこの時は考えてもいなかったのだ……。



——そっか……6人で行くんだ——

——うん……皆が姫和ちゃんと一緒に戦ってくれるって言ったから——

異常に濃い霧が立ち込める場所で私はともう一人の少女は階段に座って話していた。

少女は一見すると自分と同じ位の年齢に見えた。

何処か古めかしい学生制服を着た彼女は私と同じ御刀、千鳥を持って見つめている。

今私が座っているこの場所が何なのかは分からない。

神社の様にも見えるしお寺なのかも知れないが結局は謎だ。

ただ一つだけ分かっている事は、ここが夢の中だという事だ。

私は昔から度々この夢を見る。

昔から何度もこの夢を見ているが起きると何故か忘れてしまう不思議な夢だ。

でも、怖い夢ではなくて、私にとってはとても楽しみな夢だ。

私は夢の中でこの隣の少女に御刀の稽古をしてもらったり、悩み事があれば相談にのってもらえるのだから……。

この少女は一体何者なのか……。

実は、今私の横に座っている少女は私の剣の師匠でもある……お母さんなのだ……。

厳密に言えば高校生の時のお母さんだ。

——ふふ、良かったね——

お母さんが立ち上がる。

——でも、強いよ。紫は——

そう言うお母さんの声は真剣そのものだった。

——分かってる……あの人が御刀を持つてるところ、一回見たから

……

——そっか……まあ、強いって言っても、私ほどじゃないけどねえ

ええ、そうなの？――

お母さんが気を楽しにして言った事に私は興味が出る。

――ふふふ――

お母さんは私に気を使ってくれているんだとすぐに私は分かった。

お母さんは今日ここに來てから気を落ち込ませていた私に元氣を
つかせたいのだと思った。

やっぱり、昔のお母さんも私の知っているお母さんと代わらない。

――ねえ、可奈美。刀使って素敵だと思わない？――

――ほえ？――

急に違う話題を振るお母さんに私は素っ頓狂な声を出してしまう。

――人を守って感謝されて劍術も学べる！――

お母さんは御刀を構えながら楽しそうに言う。

――最高だよね！――

――うん！――

私は笑顔で頷いた。

――その上、福利厚生はバツチりだしね☆――

なんだか、最後に星のマークが付きそうなイントネーションでお母
さんは私にウイंकをしながら言った。

私はなんだかおかしくなった。

――えーそこー？――

私は笑いながら言った。

――ふっふっふ、っとそう言えば――

すると、そんな楽しい会話をしていた中、急にお母さんが思い出し
た様に言った。

――そういえば可奈美さ。前に不思議な男の人に会ったって言っ
てたじゃん？結局あの後に何か進展あったの？――

――マクギリスさんの事？――

――うんうんそうそう――

お母さんが言っているのはマクギリスさんの事だった。

以前、私はマクギリスさんと最初に会ったばかりの夜にお母さ

んにマクギリスさんの事を言ったのだ。

——それが……えっと、何て言ったら良いんだろ……

——どうかした？

——師匠……前にも言ったけど私、あの人と一回しか剣を打ち合った事ないんだけど、あの人からは、何ていうか……変な感じがしたんだ……

——変な感じ？

——今日だってそう。舞草の里が襲われて、それから潜水艦で逃げた時も、あの人、一人で包囲網を突破するって言って不機嫌そうに部屋から出て行っちゃたんだ——

——ふーん。変わってるねえ——

——お母、師匠もそう思う？すごく強いんだけど、でもね。なんだか……あの人を見てると、寂しそうな感じを受けるんだ……



「可奈美ちゃん！そろそろ時間だよ」

眠りから目を覚ますと目の前に舞衣ちゃんがいた。

どうやら私を起こしてくれた様だ。

「ん……おはようー」

私は舞衣ちゃんに言う。

すると薫ちゃんが私を見て呆れた顔を向けた。

「こんな時によく眠れるな……」

「どこでもすぐに眠れる事も刀使の大事な資質デス！」

エレンちゃんが面白そうに言う。

私はベツトから起き上がると御刀を手にした。

すると丁度その時、累さんが部屋に入ってきた。

「みんな！そろそろ横須賀だよ！」

「はい！」

「ねー！」

累さんの声で皆に緊張感が走る。

私たちは自室から出ると作戦の準備の為に廊下を歩いていった。

「ねえ！大荒魂を倒したら皆で美味しいもの食べに行かない？」

私は皆の緊張を解す為に声をかける。

「そういう事なら私がご馳走してあげる」

私の意を汲んでくれたのか累さんが話に乗ってきた。

「Ohh！るいっぺ、お腹太いデース！」

「わざと間違ってるだろ」

エレンちゃんの反応に薫ちゃんがツツコミをいれた。

良かった。

少しだけ皆の緊張がほぐれたみたいだ。

あとは……。

「やった！姫和ちゃん！デザートはもちろんチョコミントアイスだよ
ね！」

私はまだ一人、固い表情を隠していなかった姫和ちゃんに声をかける。
る。

「コース料理確定かよ」

薫ちゃんの言葉に送れて姫和ちゃんは表情を崩した。

「人をチョコミントのアイスがあれば良いみたいと言うなっ」

累さんはそんな私たちを見て少しだけ、少しだけけど安心した様子
を示した。

「皆、無事に戻って来てね。美味しいお店探しておくから」

累さんは笑みを浮かべた。

「はい！」

私たちはそんな累さんに向かって大きく返事をした。
私も皆も分っているのだ。

累さんは笑ってくれているが内心はすごく私たちを心配してくれている事を。

「十条さん？」

すると姫和ちゃんは舞衣ちゃんに近づいた。

「お前が全体の指揮を取れ。お前の指示があれば、きっと折神紫まで辿りつける」

「えっ」

舞衣ちゃんは驚いたような表情をした。

たぶん。

舞衣ちゃんは姫和ちゃんにそんな事を言われたのが意外に思えたのだろうと私は思った。

姫和ちゃんは舞衣ちゃんの為に戦う理由がないなら戦うなど気を使っていたから。

でも今は戦う意思を認めている様だった。

でも、今の目の前の様子を見てて私はなんだか嬉しかった。

姫和ちゃんはまだもう独りぼっちじゃない。

そう確信できたのだから。

「お前にはその力がある。孝子先輩達もそう言っていただろう」

「十条さん……」

「姫和で良い。舞衣、後ろは任せたぞ」

そう言うのと姫和ちゃんは笑みを浮かべた。

舞衣ちゃんもそれを見て嬉しそうに笑みを浮かべる。

「うん姫和ちゃんー」

それから私達七人は潜水艦の中にある作戦司令室にやって来た。

司令室はとても薄暗い部屋だった。

室内の明かりは幾つも点灯しているコンピューターの画面の明かりだけだ。

累さん曰く、この部屋は正式な名称ではCICという部屋なのだそ

うだ。

本来は船の指揮をする部屋なのだそうだが、今、この場には八人しか居なかった。

「それでは皆さんこれより本作戦の最終確認を行います」

モニターのみが点灯している薄暗い司令室内で朱音様が作戦の説明を開始した。

私達、六人はテーブル型の大型モニターを挟んで朱音様の前に並んだ。

「我々の目標は私の姉……折神紫にとりついた大荒神の討伐です。今回の作戦は奇襲作戦となります。この後、この船は横須賀港に到着します。すでにフリードマンさんの働きかけにより複数の報道陣が横須賀港には到着している筈です。そこで私は報道陣の前に素顔を晒し、そこで全国民に向けて今回の件の真実を語ります。彼らはすでに里を墜した事で勝利を確信しているはずです。そこに私が姿を表せば恐らく本部の刀使や警察の戦力を集める事が可能でしょう。あなた方は私に彼らの目がそがれている間にS装備を装着の上、強襲コンテナにて射出。折神家の本部を強襲します。なにか質問はありますか?」

「私は無いな」

姫和ちゃんが納得して頷く。

すると、舞衣ちゃんが手を上げた。

「あの、すみません。ひとつ良いですか?」

「なんででしょうか」

「あの人……マクギリスさんはもう居ないんですよね?」

「ええ、あの方はすでに今から三時間前の浮上時にこの船より単独で出発しています」

「マクギリスさんはどの様に行動するつもりなんですか? 場合によっては作戦が変わってしまうと思うんですが……」

舞衣ちゃんは懸念した様に言う。

すると、私は初耳の話に驚いて目を見開いた。

「えっ!? マクギリスさんもう居ないの!?!」

「何だお前、そんな事にも気づかなかったのか……」

薫ちゃんが呆れたように言う。

「かなみんが、寝てる間にあの人はこの船から出発しまシタ」

「ええ〜！なんで起こしてくれなかったの!？」

「この状況で良く眠ってたからな。起こさないでおいただ。眠れるにこしたことはない」

エレンちゃんと姫和ちゃんが私の質問に答えた。

すると、私とその答えを聞いたのを見ると朱音様は話を戻した。

「話を戻しましょう。柳瀬さん。彼の点は安心してください。あの方はここを去る際に我々の作戦の邪魔はしないと約束しました。また、現在も彼とは通信でやり取りをしていますのでこちらの動きも分かっている筈です」

「分かりました」

「この作戦は皆さんの活躍が頼りの作戦です……本来ならばこのような無理な作戦はしたくはなかったのですが……私も皆さんが戦いやすくなるように出来る限りの事はするつもりです。作戦の成功を切に願います」

「はい！」

私たちの返事が司令室に響いた。

そして作戦は時を迎える。



キイイインと私の耳に甲高い機械音が響く。

視界は殆ど真っ暗だ。

ただ、私の目の前のモニターのみが光を放っている。

私はただ目を瞑りこれからの作戦の為に精神を統一させていた。

「……………」

私が目を瞑っている間にも甲高い機械音はどんどん高くなっている。

すると、その時だった。

『皆さん！私は折神朱音です！私の話を聞いてください！』

その時、強襲コンテナの内部にて、通信画面越しに外の声が入ってきた。

映像はなく、音声のみだが、その声は朱音様その人だ。

『今、この国に大きな危機が迫っています！二十年前の、いえ、それ以上の災厄が起ころうとしているのです。二十年前の災厄の元凶。大荒魂が再び蘇ろうとしています！』

最初の予定通り、私達の乗った潜水艦は今、横須賀の港に居る。

そして、今、この船の上では朱音様が港に集めたマスコミの前に立って私達を送り出す為の時間稼ぎをしてくれているのだ。

今頃、この潜水艦の周りにはマスコミの他にも沢山の警察や刀使達が集結しここを包囲しているはずだ。

『刀使の皆さんは感じたでしょう！先ほどの不思議な現象を！大荒魂が現れる前兆です。もはや一刻の猶予もない…………』

すると、朱音様がそこまで言い終えた所で目の前の画面に緑色の文字が表示された。

——カウントダウンスタート…………10、9、8、7——

カウントダウンスタートの文字が表示された瞬間、ガコンという小さな音と共に私が乗る強襲コンテナが上に上がっていく感覚が湧き上がった。

エレベーターに乗っている感じだ。

いよいよだ…………流石の私もなんだか緊張してくる。

『どうか！皆さんのお力をお貸しく下さい！』

その言葉が合図の様な感じだった。

—— 2、 1 ——

0と数字が表示された瞬間。

私の体は強烈な轟音と共に今までに感じた事のない衝撃を感じた。

「くっ……い」

今までに感じた事のない圧力に私は声を漏らす。

これが出発前に聞いたGというものだろうとはすぐに分かった。

そしてこの衝撃と圧力は私を乗せた強襲コンテナが潜水艦の本来は大きいミサイルが発射する為にあるという格納スペースから空へと打ち上げられたから発生したものだ。

外の様子は分からないが、私以外にも姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃんを乗せた強襲コンテナが潜水艦より発射されているはずだ。

そして、その目標地点は大荒魂、紫様が居る刀剣類管理局の本部でもある折神家の本家その物である。

私を載せた強襲コンテナが射出されてから、どれ程の時間がたった時だろうか。

私は必死にコンテナの射出に伴う衝撃と振動に耐えていたのでその時間は長く感じてしまったが、強襲コンテナは恐らく1分もしない内に、射出の時とは比べ物にならない程の衝撃に襲われた。

「っ!!」

頭が若干くらくらとするが、それもすぐに治まる。

なぜならば、先ほどまでずっと続いていたGや機械の振動が途端に停まったからだ。

「……………」

すると、私の目の前のハッチ、つまり強襲コンテナの扉がプシューと空気を抜くかのような音と共にゆっくりと開いた。

それと同時に私をコンテナ内で固定していた安全装置や拘束具が外れる。

ハッチが開かれた瞬間、私の目には装着しているS装備のバイザー

越しに宙に舞う土埃が目に移映り、そして、私の頬を夏の夜の生暖かい風が撫でていた。

私に乗せた強襲コンテナは無事に折神家の本部の敷地内へと降り立つ事に成功したのだ。

周囲を見れば、ここは敷地内の駐車場の様であった。

私はS装備がちゃんと可動している事を確認すると、皆との集合地点となっている御前試合が行われた広場へと急いだ。

素早く高くジャンプすると屋根の上を上りそのまま高速で移動する。

私は前にも学校の実習でS装備を装着して実際に動かした事があるが、やっぱりS装備はすごいと改めて思った。

写シも迅移も使っていないのに、人間の常人を遥かに超えた動きができるのだ。

S装備は刀使をサポートする為に作られた一種のパワードスーツ……ってフリードマンさんや学校では教わった。

でも、S装備の稼働時間はたったの30分だけ……とにかく、とにかく急がなければならない。

すると、私が集合地点に降り立ったちようどその時。

他の皆も到着した。

姫和ちゃん、舞衣ちゃん、沙耶香ちゃん、薫ちゃん、エレンちゃん、皆そろってる。

「……」

「……」

皆顔を一瞬だけ見合わせ笑みで頷きあつたが、それだけだ。

今の私たちには言葉は要らない。

共通の目的に向かって突き進んでいるのだ。

私たちは姫和ちゃんの下に集まると姫和ちゃんを最初に門を飛び越え、御前試合が行われた会場の敷地内へと侵入した。

私の目にあの日の光景がフラッシュバックする。

自然と私の口元は笑みを浮かべていた。

「どうした可奈美？」

姫和ちゃんが私に問う。

私はそれに答えた。

「ここで出会った皆と、また戻ってきたんだなって」

「そうだな……戻ってこられるとは思わなかったが」

姫和ちゃんも私と同じで感慨深そうだ。

すると、足を止めた私たちに沙耶香ちゃんが注意を出した。

「感慨にふけるのは早い」

「サーヤの言うとおりデース。ストームアーマーの稼働時間は予備電池を含めても30分。それまでに大荒魂を討たないと」

「時間は私たちの味方ではないんですね」

「ネネー！」

そんな会話をしてると、薫ちゃんの肩に乗る、ねね、が声を上げた。
警戒している様子だ。

「そっちなか……ねね」

「こっちも反応している……恐らくこの方角で間違いないだろう」

ねねが示した方角と姫和ちゃんが持つスペクトラム計も大荒魂のいる方角を示す。

「これは……祭殿の方角」

沙耶香ちゃんが方角を見てそう言う。

「祭殿？」

舞衣ちゃんが聞く。

「折神家の一番奥。御当主様しか入る事を許されない禁足地」

私は山の上の建物を見た。

「じゃあ、大荒魂がいるのは……」

「見てて母さん……」

私の隣で姫和ちゃんが姫和ちゃんのお母さんの形見のスペクトラム計を握り締める。

「姫和ちゃん……ねえ姫和ちゃん！」

「ん？なんだ」

「絶対に勝とうね」

「ああ、そうだな」

私と姫和ちゃんは互いの意思を再確認する。

そして、その時だった。

「ふふ……」

「っ！」

私たちは御刀をいつでも抜ける様に構えると笑い声がした方向。

私たちの頭上の屋根の上を見た。

そこには、月を背後にひとりの少女が笑みを浮かべて私たちを見下ろしていた。

「あの娘は……」

舞衣ちゃんがいち早く反応し、そして私もあの少女をすぐに思い出す。

潜水艦で里を脱出する時に孝子さん達を襲った親衛隊の制服を着た刀使だ。

「あはは！えーっ」と

するとその少女は屋根の上から頭に手をかざして私達をまるで品定めするかの様に眺めた。

少女と私の目が会う。

そして……少女は目を細めて満面の笑みを浮かべた。

「きーめたー！」

その瞬間。

少女の姿が消えた。

「——っ!!」

私はすぐに御刀を引き抜くと構えた。

それとほぼ同時に御刀を通して私の体に衝撃が加わる。

その衝撃は私の体を先ほど立っていた場所から100m以上も動

かされる程だ。

目を開けは私の目の前に先ほどの少女が御刀を持って目の前にいた。

少女は迅移を使ったのだ。

一方で突然の襲撃に写シや迅移を張っていなかった私は対応に遅れた。

「あっはははははは!!」

少女は笑いながら自身の御刀に力を込め、一方の私はその攻撃を止める事に集中した。

本殿の建物の中まで入った所で私はようやく少女の御刀を払うと地面に着地する。

そして着地後すぐに私は御刀を構えた。

「親衛隊の!」

「ふっふっー良いねえ、相手がお姉さんなら、私はきつと」

少女はすごく楽しそうだった。

本当に満面の笑みを浮かべている。

その様子が本当にご満悦といった様子だった。

「はあぁー!!」

少女が笑みを浮かべたまま切りかかってくる私も、写シや迅移を発動させて少女の攻撃を防いだり、少女への攻撃を行ったりした。

「あっはははははは!!」

少女は楽しそうに笑いながら攻撃を仕掛けてくるが私と少女の攻撃と防御はまさに両者一進一退といった状況であった。

私は少女と一旦距離を取る。

「あははは——やっぱりだ!あの時そうじゃないかと思った。お姉さんはきつと、誰よりも強い」

「くっ」

「だからお姉さんを倒せば私は!!」

少女は再び切りかかってくる。

だがその攻撃を強烈そのもので、私は後ろへと押された。その余りにも強烈な攻撃に私は一瞬戸惑う。

すごい気迫……この娘どうしてこんなに！と。

「ふっ……このっ！」

私もやられてばかりではられない。

すぐに私も少女へと攻撃に転じた。

だが、その攻撃は避けられてしまう。

強い！これが天然理心流の境地！

私はこれまでの戦闘で少女の御刀の流派は見破っていた。

だが、相手の流派の理解は出来てもそれが、勝てるかどうかは別の

話だ。

剣術とは互いの流派のぶつかり合い。

その場に応じた行動が求められる。

でもだ。

こんなに楽しいのは久しぶりだった。

私は自然と笑みを浮かべる。

「私もー！」

私はそう言うのと少女への攻撃を連続で行った。

少女の剣撃を避けつつその合間を縫って私の剣撃をしかける。

少女は私から距離をとった。

「はあはあはあ……まだだよ……お姉さん」

少女は息を荒くしてそう言う。

激しい戦闘で疲れたのだろうか？

だが、それにしても、私から見て少女の様子はおかしくみえた。

違和感を感じたのだ。

先ほどまであんなに楽しそうだったのに、今はなんだか急いでいる
様だ。

まるで何か時間に追われている様な……そんな感じ。

「はあはあ……楽しいねえ……」

違和感を感じていた。

しかし。

「うんー！」

私は頬を上げる。

この少女はこんなにも必死なのだ。
それにこんなにも楽しそうなのだ。
これに答えない訳にはいかない!!
少女も息を整える。

ここで攻撃をするというのは野暮というものだ。
私はこの少女とは正々堂々と勝負がしたかった。
少女は息を整え終えると御刀を再び構える。

そして、再び少女からの剣撃が炸裂……………しなかった。

「横槍!」

「ダイナミック」

少女を横から出てきたエレンちゃんが突き飛ばし、私はというと薫ちゃんの太刀の鞘で吹き飛ばされた。

「うわわわ!」

突然の事に私はそんな声を上げる。

そして突き飛ばされた先には姫和ちゃんがいて私を抱えるように文字とおりキャッチした。

「行くぞ可奈美!」

「ふえ!?ちよ、ちよつと姫和ちゃん!」

そして姫和ちゃんは私を抱えたまま本殿の廊下を走り始める。

後が続くのは舞衣ちゃん、沙耶香ちゃんだ。

「ま、まって舞衣ちゃん!あの娘との決着がまだ!」

「いいから!」

「ほへ?」

これは…………怒ってる舞衣ちゃんだ…………。

そう思った。

そして私は今やるべき事を思い出したのだ…………。

今はあの娘との戦いよりも大荒魂を優先すべきなのだ。

あの娘との決着はまた今度つけければ良い。

だけ…………。

私はこの時なぜか、妙な不安を覚えていた。

もしかしたら…………もしかしたらだけど、あの娘とちゃんと剣を交え

る機会はもう来ないのではないかと……そんな不安を……。

だけど、私は今は大荒魂を優先すべきだ。

だから私はあの親衛隊の少女の事をなんとか頭の片隅にしまいいんだ。

そして、私達は大荒魂が潜む祭殿の奥深くへと進んでいったのだつた……。

しかし……私の不安は実現する事になった。

私はその後、二度とあの時の少女とちゃんとした戦いをする事はできなかつたのだ……。